

---

# 猫かぶりなあの男とキスをする。

夢花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫かぶりなあの男とキスをする。

### 【Zコード】

Z3914R

### 【作者名】

夢花

### 【あらすじ】

『優しくて、運動神経抜群で、頭脳明晰な超人少年、水無瀬愁也。とか思っていたあの頃のあたしが情けない。くそう！！　あの野郎！　ファーストキスを返せええええ！』これは、水無瀬愁也の秘密を知ってしまった、彩那の苦悩の日々。結構ベタな展開が多いです。後、ノリで書き始めてしまったものなので、矛盾してる部分とかあつたらお知らせください！　基本的には土日更新の・・・はず・・・です

## 猫かぶり（前書き）

はじめましての方ははじめまして。そうではない方はまたお会い  
できて光栄です^ ^

この小説がお目にかかるとはなんたる至福・・・つ！ 読んでくだ  
さるなど誠にありがとうございます^ ^

稚拙な文章で申し訳ありませんが、よろしくお願ひいたします。

それでは、最後までお付き合いで願います。

## 猫かぶり

ああ、なぜこんなことになつてているのだろうか。

神様、あたしが何か間違つたことをしたんだつたら謝ります。だけどこの仕打ちはあんまりじゃありませんか？ 別に好きでこいつのことを知つたわけじゃないし、好きでこいつの秘密守つてるわけじゃないし。

好きで、好きでこいつとキスをしてるわけじゃねええんだよおおー！

事の発端は一日前。

いつもようくに親友の穂<sup>みのづ</sup>と一緒に帰つていただけなのだ。今思い返せばあの時の忘れ物なんて次の日に学校に行ってからでもよかつたのに、どうしてよりによつてあの時取りに行つてしまつたのだろうか。

「あー！」

いきなり声を上げるあたしを、穂はびっくりして見つめてきた。そりやそうだ。さつきまでまったく他愛もない話をしていたのにいきなり声をあげたら誰だつて驚く。

田を丸めて稔があたしに問いかけて来る。

「び、びっくりした。いきなり何なのよ、彩那<sup>あやな</sup>」

「『めん稔！ 先に帰つて！ ノート忘れて来た！』

と叫びながら走り出す私を止めることができたらどれだけいいか。  
一層目を丸めた稔が一瞬キヨトンとしてから慌てて身体を反対方  
向に向けた。

「え？ の、ノート！？ ちょ、待つてよそんなの明日でもよくな  
い！？」

「だめなんだつて！ 今日の「ひのき」の予習しどかないと絶対明日のテ  
スト無理だもんっ！」

「ちょっと彩那！？ 小テストよ！？」

「それでも！」

自分でいうのもなんだけど、あたしは真面目だ。中間テストはも  
ちろんのこと小テストとかでも絶対いい点は取りたいってくらいに  
真面目だ。稔とか他の友達には真面目すぎるよー、つていつも言わ  
れてるけど、おかげさまで成績もいいし大学進学も問題ないんだか  
らあたしのやつてることは合つてゐる。はず。いやいや合つてゐるよ絶  
対。

反対に稔はあり得ないくらいの究極の面倒くさがりや。中間テス  
ト、小テストが共に近づいて來ても一切勉強に打ち込む姿を見ない。  
つてかテストが近づいてくれば近づく程どんどんリラックスするタ  
イプである。それなのに成績はいい。なぜだ。あたしはこれだけ真

面目に勉強して学年成績一位、稔は勉強する姿を一切見た事ないのに学年成績は五位。なぜだ。稔曰く『適当に聞き流してれば全て呑み込む天才型なのよ、私は』。

世の中って不公平だよね。

とにかく学校からあんまり離れてなかつたから一分も走つてればすぐに学校についた。でも、あたしも稔も既に放課後になつてる時点で学校から出て来たから、学校に戻ると殆ど誰もいなかつた。夜じやないだけいいか。お化けとかそういう類いは一切信じないんだけど、やっぱり夜の学校つて不気味だと思うのよね。

急いで校舎内に入つて上履きを履くと、疲れてしまつたから息切れしながら階段を登つて行く。高校二年生にもなるとわざわざ二階まで階段でいかないといけないから大変すぎる。来年が憂鬱になつてくるわ。

やつとのことで三階までたどり着くと、誰もいないはずの教室のドアが閉まる音がして、思わず柱の後ろに隠れてしまつた。

そつと顔を覗かせると、男子生徒が耳に携帯を当てて一人立つていた。

あれ？ あれって・・・。水無瀬君？

水無瀬愁也君。サラッサラの黒髪から覗く（クオーターだから）青まじりの茶目に端正な顔立ちは男の子なのに思わず綺麗だと思つてしまふほどのイケメンで、運動神経も抜群。謙虚で温和で優しくて、男女共に友人が多い。その上学年成績は唯一あたしを抜かす、学年一位の完璧超人少年だ。

あたしとあまり交流はないけど、同じクラスだし学年一位、二位同士だから勉強の世話になることも時々ある。本当に謙虚で優しい男子で、そりや女子にモテるわとも思つ。

そんな水無瀬君が、こんな時間にこんなところで何してるんだろ

「う?

声をかけようと思つて柱から離れた瞬間、

「つづけんなっ!! 勝手に出て行きやがったくせにいきなり  
フラフラ帰つて来るとか許さねえぞ!! 絶対に家に入れんなよ!  
入れたらぶつ殺す!」

聞こえて来た怒声と共に壊れる勢いで携帯が閉まる間に足が止まり、水無瀬君を呼ぼうとした口も開いたまま固まった。

……今の、声は、水無瀬君、だよね……? 叫んで、た  
よね……? あれ……? おかしいぞ。あたしの知ってる水  
無瀬君はそんな口調じゃないはずなんだけど。

勉強とかできなくとも『あ、そこ間違ってるよ』とか、よくでき  
てるところを見ると『うわっ、有賀さんってやっぱ頭いいんだね』  
とか、普段からあたしや友達とかにたいしても『昨日のテレビ見た  
? ヤバいよ、俺感動した』とかいうおつとりー、とした口調のは  
ず。

そんな水無瀬君が(あたしの空耳じゃない限り)『ぶつ殺す』と  
か口にしてるんだが。

なんとなく見てはいけない場面を見てしまったような気がしてゆ  
っくりと下がつて行つたけど、携帯での対話を終えた水無瀬君がイ  
ライラした様子のまま振り向いた。

バチツと見事に視線が合つた。

• • • •

思い返せば、この時一田散に逃げ出しが悪かった。結局ノートも手に入らなかつたし、稔との楽しい帰り道も帰れなくなつたし、わざわざ息を切らしてまで学校に行つたのに見てはいけないものを見てしまつたし。

だけどあの時逃げていなければ、あたしはどうやって言い訳をするつもりだったのだろう。

そして次の日。なんとなく危険な気がして結局水無瀬君のことは  
稔には言わなかつた。いや、あれはどう考へてもあたしの空耳ではないんだけど、きっと水無瀬君がマジ切れした時にああなるんだろ  
うなあ、つて勝手に解釈したら稔にそれを教えて実は水無瀬君が猫  
かぶりだつたとか回されたくないあたしの貴重の気遣いであつて決  
して言つてしまつたら水無瀬君が鎌を持つて追いかけて来る夢を見  
たわけでもなんでもないし。

……なんで鎌だつたんだろ？……。マジで怖かつたん  
だけど……。

学校に行く時には穂は一緒ではない。確かに一緒に帰るけど、それは親友だからであつて別に帰り道が一緒だから、という理由から

来るわけではない。十分くらいは駅まで一緒にだけど、稔は電車に乗つてあたしは歩ける距離に住んでいるからいつも駅で別れる。時々駅から出て来た稔と一緒になることはあるけど、やっぱり一人で登校することが多い。

だから教室に入った瞬間に水無瀬君と視線が合つた時、傍らに稔がいなことを強く呪つた。

パッと視線を逸らしてそのまま何事もないように席についた。正直それしか方法が思い浮かばなかつたし、水無瀬君がいきなりあたしを教室から引っ張りだしたりはしないだろうとも思つたからだ。案の定その日いっぱい水無瀬君はあたしと接触を図ることはなかつた。一日中視線を感じていたけど。いや、近づくことならきっとできたと思うんだけど、あたしはずっと稔にくつついていたから話しかけてくることはなかつた。たとえ稔が同じクラスにいなくても他の友達と一緒に過ごすことでなんとか水無瀬君から離れることができたのだ。

ま、そのお陰ですっかり安心しきつていたあたしは、トイレに行くために下駄箱で稔を待たせて、再び階段を登つて行つたのだ。それから用を足してトイレから出た瞬間、

「ねえ」

固まつた。驚いたからじゃない。いや、確かにびっくりしたわけだけど、その声には確かに聞き覚えがあつて、間違いなく彼はあたしに話しかけて来ると分かつたからだ。

ゆつづくと首を振り向かせると、…………やつぱり…………。

水無瀬君が腕を組んで壁に寄りかかっていた。そしてこちらを見ている。無言で。

「み、なせ君」

「…………」

沈黙を貫き通す水無瀬君。汗ダラダラのあたし。

「水無瀬君、こ、こんな時間にここで何やつてんの?」

「…………」

「こ、こ、女子トイレの前だよ?」

「有賀わざわい、」

ビクッと身体が震えた。そのまま水無瀬君の視線ががつちりとあたしの視線と交わる。

「昨日の放課後学校に来てたよね?」

ピキッと再び動きが固まる。あたし、もしかしなくても、大ピンチじゃない?

そのまま冷や汗ダラダラで水無瀬君を無言で見つめていても、あつちは確実にあたしが何かを言つまで待っている様子でいる。っていうか腕を組みながら壁によりかかってるその姿、めちゃめちゃ絵になってるんだけど。

「き、来た、かな？」

「……俺さ、昨日の放課後学校に残つてたんだよ」

「う、うん」

「それで電話してたんだけど、それを終わらした瞬間に振り向いたら有賀さんがいたんだよね」

「……い、いた、ね」

「しかもなんかじりじり後ずさりしてさ」

「……して、た？」

「もしかして、俺の会話聞いてた？」

「はっ！ これは確かめてるの！？ 確かめてるのね！？ ということはあたしが本当にそこにいたかどうかは知らないってことね！？」

「よし！ いいは嘘を貫こう！」

「ききき聞いてないよ！ そんな他人の会話聞くなんて？」

「じゃあせ」

いきなり一段低くなつた声に言葉が止まつた。そのまま水無瀬君がジリジリと近づいて来て、あたしは思わず下がり続けて、壁につかつてしまつた。それでも尚水無瀬君は近づいて来る。

「……今日、どうしてずっと俺のこと避けてるわけ？」

「……」

ヤバい。これは本当にヤバい。絶対絶命大ピンチなんだけど。しかもなんだか頭の両側に水無瀬君の腕があつて逃げられない状況になつてる……！？ なんで！？ なんでこんなことになつてるの！？ どうすればいいの！？ 本当のことと言えば良いの！？ マジで分からない！

両面相を繰り返すあたしをじつと見つめてから、水無瀬君は俯いた。

「…………聞いてたんでしょ」

「えっ！？」

「……電話での会話、聞いてたんだろ」

「…………え、ちょ、水無瀬君…………？」

あのー。口調が変わつて來てるんですけど。

声をかけると、水無瀬君はキッと視線を上げた。

「往生際が悪いんだよ。俺が電話してる所、しつかりと見てただろーが」

「！？」

ぐ、黒水無瀬君になつた……つーな、なんで！？ やつぱり昨日は水無瀬君がマジ切れした瞬間とかじやなかつたわけ！？ 何これ！？ どうなつてるの！？

「ちよ、ちよっと水無瀬君！？」

「．．．俺はな、有賀」

いきなり呼び捨てかよ．．．！

「学校では優しくて謙虚で温和な誰にでも好かれる優等生をやつてんだよ。だつてそつちの方が人生が楽だろ？ 变な輩に喧嘩も売られねえし、先生達には評判はいいし、男にも女にも同じ量の友達が出来る。おまけに女にモテるモテる！」

「．．．み、．．．みなせ、．．．君？」

きや、キャラが変わり過ぎなんだが。

「だけどよ、俺の本性はこっちだ。昨日の電話を聞かれるとは計算外だった。ま、周りを確かめなかつた俺も俺なんだがな。まさか誰かに聞かれてるとは思わなかつたから、振り向いてお前がいた時は驚いたよ。しかも一目散に逃げやがつて」

「ちょ、ちょっと待つてよ！ これどういうこと！？ どうなつてんのよ！ あ、あんた本当に水無瀬君！？ 双子とか他人の空似とかじやないでしうね！？」

「俺が水無瀬愁也には見えないくらいに驚いたつてことか？」

「そうよ！ 水無瀬君はあんたみたいな奴じやないわ！ 水無瀬君に何したのよ！」

「有賀」

抗議をするために腕に手をかけて水無瀬君を睨みつければ、静かに名前を呼ばれる。それからあたしが手をかけていない方の腕で鞄の中からノートを取り出した。それを突きつけて来る。

ノートには確かに『水無瀬愁也』と書いてあるし、中身も綺麗な水無瀬君の字だ。

「その中にある問題、俺に一つ聞いてみる」

「えっ？」

「お前より頭がいいって証明できれば、信じてくれんだろ?」

「…」

た、確かにあたしより頭がいい人は水無瀬君しかいない。あたしより一つ下で、三位の成績を持つている神楽さんでさえも中間テストの総合点数はあたしより百点以上の差がついている。水無瀬君とあたしの成績の差は、五十点。だけどその五十点の差があまりにも大きいのだ。あたしがどれだけ勉強して、どれだけ頑張ってもその距離を縮めたことはない。

自信満々のまま水無瀬君はあたしを見つめている。

分かつてゐる。虫の良すぎる理屈で田の前にいるこの男の子が水無瀬君じゃないって決めつけてる。でも、そう思つてしまつぽくじこの男の子は水無瀬君っぽくないのだ。

「…いい

「は?

「わざわざさうやつて証明してくれなくとも、あんたが水無瀬君だつてことべりい分かつてゐる

「 . . . . . 」

そう言つたあたしに対して両手を大きく見開いた水無瀬君は、確かにあたしや稔の知つてゐる水無瀬君に見えた。

ああ、これが水無瀬君なのだ。口が悪くて意地悪そつたこの腹黒い水無瀬君が、本当の水無瀬愁也なのだ。

「 . . . よりによつてなんであたしが知るのよ . . . 。 最低な立場だわ . . . 」

「 . . . なんで、そんな、わざわざ猫なんてかぶつてんのよ」

ポツリポツリと言葉を紡ぐと、水無瀬君はニッと笑つた。

「 言つただろ。こっちの方が人生が楽だつてよ。中学からずっとこれで貫き通して、断然簡単だよ。ちょっとくらい失敗しても俺のことは先生達はすぐに許してくれるのに、俺と同じ失敗をした態度の悪い奴は散々怒られる。だつたら失敗しても許してくれる奴になりてえだろ? 」

「 . . . 水無瀬君」

「 ありがあ。このこと絶対誰にも言ひなよ」

「 は? 」

誰にも言ひなつて . . . 。今までに誰かに言ひていつて許可を訊く所だつたんだけど。

聞き返したあたしに、水無瀬君は溜息をついた。

「は？　じゃねえだろ。お前が言ひちやつたら俺の人生計画は台無しひなんだよ。本氣で頼むぜ」

「そ、そんなのずるい！　みんなを騙してゐみたいなもんじやない！」

「騙してゐんなら騙されてる方が悪いんだよ。大体、運動神経と頭脳はともかく、性格まで完璧な男なんているわけねえだろ。普通なら違和感覚えるつづーの」

「水無瀬君！」

「つるせえ。有賀、もしお前が他の奴らにバラしたりしたら、どうなるかは分かつてんだろうな？」

「は？　そんなの知るわけ？　つ

気づいたら水無瀬君の顔がすぐ目の前にあった。

それから、気づいたら水無瀬君の唇に、自分の唇が当たっていた。

「…？」

田を見開いて驚いていると、あたしにキスをしたまま水無瀬君が目を開いてこっちを見てる。その美しい瞳にキスされていることも忘れて思わず見惚れてしまいそうになつたけど、脳の隅っこで必死に理性が叫んでいて、我に返る。

瞬時に顔を引き離そうとしたけど、いつのまにかがつちりと頭の後ろの水無瀬君の手があつて一向に離れる気配がない。

息をするために僅かにあけた口の中に、濡れた何かが入つて来て、それが水無瀬君の舌だと理解するまで少し時間が経つてしまつた。だけど理解してからは一層強く水無瀬君を押し返そうとしたのに微動だにしない。

「んつ、つ、はつ、み、んんつつ！」

荒い吐息が漏れても尚、水無瀬君はあたしの舌を絡めとる。さつきまで開いていた瞳も伏せていて、開いたままのあたしの口には彼の美しい睫毛が見えた。

だけどそんなことに気を回している暇はない。

רַנְגָּה . . . . . רַנְגָּה . . . . . רַנְגָּה . . . . .

必死の音を出して抵抗をしても水無瀬君のキスは止まらない。だけどこれ以上はだめだ。このままだと理性が粉々になってしまふ。身体が溶けてしまふんじゃないかつて思う程に熱い。水無瀬君の胸板に押し付けていたわたしの手の力も抜けて行つていいだめだ。これ以上は、だめ。

一度強く唇を吸い上げてからふつと水無瀬君が離れて行つて、あたしは息を切らしながら彼を睨み上げた。あたしとは対照的に息一つ乱れていない。

「な、何、すんのよ、このクソ水無瀬！」

「それが嫌だつたら誰にも言つなよ。誰かに言つたら、キスだけじ  
やすまねえぞ」

お、恐ろしいことを言いやがつたこいつ！… あつさり人のファ  
ーストキスを奪つておいてその台詞は何！？ 許せない！

「こんの . . . つ、猫かぶり野郎があ！…」

「なんとでも言えばいいだる」

飄々とした様子で水無瀬は床に落ちていた鞄を拾い上げると、何  
事もなかつたかのように階段の方に歩を進めた。それから一度だけ  
振り向いて、未だに床に座り込むをあたしを見て、ふんっ、と鼻で  
笑つた。

．．．あんの、野郎．．．！ 鼻で、鼻で笑いやがつたあ  
あああああああ！！

許さない！… 絶対に許さない！…！

これが、あたしと水無瀬の、秘密の共有の始まりだった。

秘密書 (前書き)

なんだか一話より短くなってしまった。

「有賀さんーん」

「…………」

堂々と声をかけてくんないこの下衆野郎が。散々人を騙しやがつて許さねえ。おまけに人のファーストキスを奪いやがつてますます許せねえ。つてかそんな下衆野郎の言つ事を素直に聞いてるあたしもどうなの??

無視を通して歩き続けると後ろからタツタツタと足音が聞こえて来る。なぜ近づいて来る!

「有賀さんってばー」

「…………」

大体こいつの猫がぶりはマジで完璧すぎる。こいつやって見るとやつぱり昨日、おとといの水無瀬君のままー、なよつな氣もするんだけど。

現実はそう甘くないわけで。

「…………無視してんじゃねえぞてめえ」

肩が掴まれたと思うと、極上の笑顔を浮かべたまま水無瀬が小声であたしに言い放った。

「こ、わ、怖っ！？」思わずものすごいスピードで後ずさりしちゃつたじゃないの！ バクバクする心臓を押さえて水無瀬を睨み上げると、相も変わらず笑顔を浮かべたままこっちを見ている。

因みに現在学校に登校中。教室に入った瞬間に話しかけられることがなくなるようにわざわざ遅く登校してきたっていうのになんでよりに寄つてバッタリ会うのよ！ あんたいいつもは登校するの早いでしょーが！！

「な、何なの！？ びっくりさせないでよー。」

「お前がさつさと返事しないのが悪いんだろ。いつまはわざわざ優しい水無瀬愁也のままで呼んでやつたのにさ」

「自分で言うな！ 大体こんな所で本性さらけ出しちゃつていいわけ？ 誰かが聞いてたらどうすんのよ」

「聞いてるわけねえだろ。こんな時間だぞ？ 大体全員が登校してるし、誰かがいたとしても半径五メートル以内に入つたら俺は優しい俺にスイッチオンするから」

「…………」

もう嫌だこいつ。

「……ねえ、もしかしてとは思つただけど、あたしが誰にも言つてないと思つてるでしょ」「は？」

カマをかけてみると以外と水無瀬は驚いてこっちを見た。  
ふつ。少しは苦しむがいい。

「あんな」とされて誰にも言わないと思つてたら大間違いよ。言つとくばど稔には言つちゃつたし、ついでに美里ちゃんと黒鈴にも言つちやつたわ」

ふふん、と笑つてみせてから水無瀬を盗み見ると、あいつは酷く驚いていた。けれど、あたしが言い終わると同時にスツと田を細めた。それからキヨロキヨロと周りを見回してからいきなり肩を掴んで来た。

「いつ？」

そのまま壁に押し付けて来たと思つと、水無瀬の端正な顔が近づいて來た。

「ぬる、ぬるー。嘘、嘘つれやつた!」ぬるなれー嘘ですかーーー!」

両手を顔の前にかざして水無瀬の顔を押し返すと、今度は水無瀬がふふんと笑つて見せた。

• • • • . . . .

「しょーもねー嘘ついてんじゃねえよ。俺が本気だった」とへりい  
分かつてんだろ、バーか」

「つかつかつかつか！」

声にならない叫びを上げて真っ赤になつた顔で水無瀬を睨みつけたが、微動だにしない。それどころかピンッとあたしの額に「コピ」をしてから二ヶと口角を上げて学校の方に歩き出した。

飄々とした様子で歩きやがつてーーー！　乙女の純情振り回してん  
じやないわよ！　一体何様のつもりなわけ？　しかも、なんか、言  
いたくないけどめっちゃああいうキスに慣れた様子だったし、いろ  
んな女とピーッツとかやってんぢやないでしょうね…………！

「水無瀬君！」

わなわなと肩を震わせて水無瀬の後を追うと、後ろから可愛らしい声が聞こえた。あたしの声じゃないと分かっていたのか、さつきの極悪面はどこにいったのやら、水無瀬はいつもの優しげな表情のまま振り向いた。ついでにあたしも振り向くと、嬉しそうに瞳を輝かせながら女子生徒が立っていた。

制服から見るとあたし達と同じ学校。リボンの色からして . . . 三年生にいる、先輩だ。

あたし達の学校は女子のリボンと男子のタイの色が学年に寄つて  
違つて、一年生は赤、二年生は青、三年生は緑だ。

久我先輩

見覚えのある顔だつたけど誰だか分からず、首を傾げてみると、後ろから水無瀬が呟いたのを聞いて、「あ、そうだ！」とポン、と手をついた。この人は確か久我夏美先輩だ。なんで知っているかと言うと生徒会副会長だからだ。

なんか、生徒会長って覚えてるんだけど副会長ってなかなか覚えられないよね。水無瀬は確かに生徒会役員だから顔見知りなのかな。……ってか生徒会にも入ってるのかよこいつ。つくづく優等生の猫かぶつてやがる。

ところで……どうしてそんな気まずそつな顔をしてるの、水無瀬君よ。

「おはよう」やれこれます

「おはよう」

丁寧に礼をするので、あたしを一瞥した久我先輩にあたしも一応礼をした。それから顔を上げると、つこりと微笑んでいる。水無瀬に向かって、あたしは眼中にないですか。まあ交流ないから当然かもしれないけど。

「ずいぶん遅いのね。普段はもっと早いでしょ？」

「……はい。今日は家の用事で」

嘘だろ。絶対嘘だろ。あたしの行動パターンを読んで遅く出て来

たんでしょう？ だつてあたし水無瀬と一緒に登校するのはじめてじゃないし！ まだほのぼの優しい水無瀬君だった頃は時々登校中に会つことがあつたからあたしの登校時間絶対把握してただろ！

水無瀬の言葉に久我先輩は、そつ、と静かに咳いてつきり黙り込んでしまった。

．．．．何この気まずい雰囲気。

「み、水無瀬君、先輩、そろそろ学校に行かないと？」

「何か俺に言いたいことがあるんですか？ 先輩」

わざわざ先輩に配慮してあんたのこと君付けで呼んだのに台詞遮つたよこいつ。

しかも久我先輩もあたしの言葉には反応しなかつたのに水無瀬の言葉には顔を上げた。．．．．ってか、もしかしてあたしつて邪魔者？ だつてさつきから久我先輩がめつちや邪魔そこにあたしのことチラチラ見てるもん。

．．．．ここは一人に配慮して学校に向かうか、と思つて水無瀬を通りすすぎよつとする。

「水無瀬君、あたし先に学校に行くから？」

「いいよ有賀さん。ここにいて

「えつ」

おいおい。人が配慮してやつてるのになんで引き止めるのよ。

何やつてんのよ？ みたいな視線を向けると、久我先輩には見えない様に水無瀬は顔をこちらに向かせてあたしを睨みつけた。

「俺も一緒に行くからさ。勉強の話も途中だつたでしょ？」

「へつ！？ あ、う、うんっ！ そうだね！？」

顔とは対照的すぎる声に思わず顔がひきつって声も裏返った。 . .

・ . . これは、残らなかつたら後が怖い。

でもやつぱり久我先輩は邪魔そうにあたしをチラチラと見ている。当然それに気づかない水無瀬ではないはず。つてことは、先輩と二人きりになりたくないってことか？

「水無瀬君 . . .」

「すみません先輩、俺達すぐに学校に向かわないといけないので . . . 話があるのなら . . .」

「 . . . . .」

ほら、またあたしをチラ見した。

「 . . . いいわ。また今度にする。引き止めてごめんなさい、水

無瀬君」

「いいえ」

それじゃあ、と言つてさつさと進んで行く久我先輩の後をびっくり

りして見つめる。つてか先輩、あたしに挨拶はなしですか。

はあ、と溜息をついて横にいる水無瀬を見ると、苦虫を噛み潰した様な顔でチッと舌打ちをした。

「え？ 何あんた、久我先輩に恨みでもあるわけ？」

「ねえよ別に」

「……なんであたしを引き止めたのよ。せつかく氣を遣つてあげたのに」

「余計なことすんな。あいつが何を言いたがってたのかお前だつて分かつてんだる」

先輩をあいつ呼ばわりですか。

・・・まあ、なんとなく雰囲気から察してたけど・・・。

「……どうして聞いてあげないの？」

「あの人と付き合つ氣はないし、好きでもなんでもない。生徒会役員だつてただの形だし、思い入れもなにもないし。・・・そもそもも本当の俺のことを知らないくせに好きになつた人を好きになれるとは思えない」

「……そんなのあんたが猫かぶんなきゃいいだけじゃないのよ」

「うむせえよ」

ええええ・・・。『もつともなこと』言つたのになんでそんなこと言われないといけないわけ？

「とにかくさつと学校行くぞ。早く歩けよ」

「…………」

「ひつじの台詞だよ！ そもそもさつあんたがあたしを行かせてくれたらこんなことになつてないんだよ！ 何なのこの俺様野郎は！」

言い捨ててさつと歩き出していく水無瀬を無言であたしは追いかけた。

あたし達が通っている学校は国立藤ヶ丘高等学校という。国立と言っているけれどそんなにレベルが高いわけではない。そもそも毎年の金額がなかなか高いのでそこそこにお金のあるあたしの家でも払うのに苦労している。それでも通わせてくれる的是藤ヶ丘の勉強の教え方がとても上手だからだ。黒板に書いてあたし達に知識を押し込むだけじゃなく、一人一人の生徒に回って手伝いをしてくれて、放課後も必ず先生達が残つて、勉強で分からぬ部分があれば聞きに行くと丁寧に教えてくれることもある。

そのおかげであたしもここまで成績が伸びているのだ。

ひたすら無言を貫き通して一人で学校の門に入る。上履きを履いた瞬間にチャイムがなったけれど、あたしも水無瀬も急ぐ様子は一切見せない。……いや、あたしはすぐにでも走って登りたいんだけど、水無瀬の方が『俺を通り越したら殺すぞ?』的なオーラを発してるからなかなか進むことができない。

……このままだと遅刻なんだけど……。

あたしの心の声が届かないまま水無瀬と共に階段を登つて教室のドアを開ける。既に教室は静寂に包まれていて、先生が教卓に立て話をしていた。だから普段は真面目でどちらも早く学校についてるあたし達が遅刻したのを見ると、先生だけじゃなくてほかのみんなも驚いてお互いのことを見ていた。

「水無瀬、有賀。珍しいな。一人揃つて遅刻か?」

「すみません、有賀さんと勉強の話をしていたら話しごんじまつて」

「……」

呆然と水無瀬を見つめるあたし。

なんつー言い訳を使うんだよお前。そんなんで許してくれると思つて?

「どこまでも真面目な一人だな、お前ら。普段は生活態度がいいから許してやる、早く席につけ」

「はい」

「あ、はいっ」

ヒラヒラと手を振つてあたし達に席につくべひすと、あたしと水無瀬は急いで席についた。

「そりかこれか！ 猫かぶつてるとこんな利点があるのか！」  
「確かに、これが成績優秀だけど問題児である遠田じおだが言い訳につかつたら絶対に先生に怒鳴られるに決まつてる。だつて態度が悪いもん。」

「……つぐづぐ世の中つて不公平すぎる。」

「……あんたと水無瀬の勉強を話し込む姿とかめっちゃ見たかったんだけど」

ヒソツ、と隣にいる稔が話しかけて来て、あたしは疲れたように溜息をついた。

「そんなの見てどうすんのよ」

「だつて学年トップマーの勉強の話だよ？ めりちゃ高レベルでしょ」

「……あのねえ、」

「いやあ、見たかったー。だつてあんた達二人ともレベル高すぎなんだもん。三位の神楽さんでも一人の勉強には追いつけないって噂だよ？ ま、総合点数が百点以上も差があるんだからそりゃそうだよね」

「……」

実際そんなことは全然してないし、むしろ水無瀬が先輩に告白されそうになつた場面に出くわしていただけなんだけど、さすがにそれは言えない。だつて少し斜め前にいる水無瀬がめっちゃこっち見てるんだもん。めっちゃ。

ジリジリと顔に視線を感じながらも絶つつ対に水無瀬の方を見な  
い様にしてあたしはひたすら俯いていた。

## 不安な感じがして仕方がない

理科で実験をする時は理科室へ行き、そこで班に別れる。大体は出席番号に寄つて班が決まるんだけど、それだと必ず早く終わる班と遅く終わる班、眞面目にやる班とかふざけてやる班がいつも同じで偏つてしまつたため、今日は気分を変えて違う班決めにしようということになつた。んで、その変わつた班でこれから先実験をやることになる。

実験は単純で、バネにおもりをぶらさげて、重さによつてどれだけバネが伸びるかを記録するということだ。

実験班の決め方は単純にクジ引きになつた。引いたクジに書いてある番号に寄つて四人で構成された班になる。出席番号の最後から順にくじを引いて行く。あたしは『有賀』だから自然と最後の方になる。因みにあたしの出席番号は一番だ。

次々と全員がクジを引いて行き、あたしの番が回つて来ると、一番の愛野さんと一緒にクジを引きに行く。一枚しか残つていなから上にあつたクジを引いてから折り畳まれていた紙切れを開いた。

「 . . . 六班 . . . 」

綺麗な字で大きく『6』と書かれた紙切れを再び折り畳んで席に戻ると、先生が全員を静かにさせてから教卓に立つた。

「はいはい。静かに静かに。スタンドもバネも重りも各自で取つて来てください。んじやあ班になつてくださいねー」

先生が言い終わつてから『さんぱーんこつちーー..』『一班ここに集まれよー..』などと言葉が飛び交い、あたしは溜息をついて席から腰を上げた。正直ただの班決めでここまで盛り上がる意味がよく分からない。

六班を探しながら視線を彷徨わせていると、左手の指を全部広げて、右手の指を一本だけ上げて『ろつぱーん』と呼んでいる人が見えてあたしは近寄つた。あれは美里ちゃんだ。頭はそんなにいいわけじゃないけど仲のいい友達と一緒に班なのはいつだつて心強いことだ。

人の間をすり抜けて美里ちゃんに近づいて行くと、美里ちゃんの顔がパアと明るくなつた。

「やつた！ 彩那と同じ班！」  
「やつたねー！」

いえーい、とハイタッチをして、ほかの一人がくる間にスタンドを取りに行こうとして歩き出した瞬間、

「ああ！ 水無瀬君も六班！？」

その美里ちゃんの言葉に足が止まつた。

それからゆつくりと首を振り向かせると、美里ちゃんに向かつて水無瀬が顔に微笑を浮かべながら近寄つて行く。

「うん。え、狭川さんも六班だよね？」

「うん、そうだよー。いやあ、彩那と水無瀬君と同じ班とかヤバい。  
超恵まれてる！」

その発言に水無瀬の目が少し見開いて、未だに一人の方に首を振り向かせているあたしに顔を向けた

．．．くつ、いつ見ても端正な顔立ちしゃがって．．．！

「．．．へえ、有賀さんも一緒に？」

「イイ、と口角を上げながらあたしに向かって水無瀬が微笑んだ。  
いや、周りからは微笑みに見えたかもしれないけどあたしに取つたら悪魔の微笑にしか見えなかつた。

もう．．．なんでよりに寄つて水無瀬と同じ班なのよ．．．。

これから先ずっと一緒にことじやないのー。

．．．仕組んだんじゃねえだろうなこいつ。あたしが六班にくるのを見て、違う六班の人の紙と交換してきたとか。くつ、あたしに嫌がらせをするためにはあり得る。超あり得る。

「有賀さんと同じ班だと心強いね」

極上の眩しい笑顔を見せて来たこいつ。

負けるものか！

「うん、そうだね。水無瀬君が一緒にいたら苦労しないよね」

「大げさだよ、そんなの」

「何言つてんのよ。水無瀬君学年成績が一位じゃない」

「そんな有賀さんだつて一位でしょ?」

「いやいや、水無瀬君とは比べ物にもなんないよー」

「五十点しか違くせに何言つてんだよ」

周りの人には笑顔を振りまいてトップマークが会話をしているようにしか見えないだらうけど、実際は田でこんな感じの言い争いをしている：

『へえ、有賀、お前と一緒にかよ』

『何か文句でもあるわけ?』

『いやいやまさか。お前と一緒にだつたら実験も楽に行べよ』

『全部あたしに任せること』

『まあそういうことだよな』

『ふ・ざ・け・ん・な』

『いいだろ? 言つ事きかねえどビツコツになる分かつてるだ

『みづみ』

「……いや、じつかじつかは分からないけど多分こんなもんだよね。最後の台詞はとても水無瀬っぽい。とっても。

「おひ、水無瀬も有賀も同じ班かよ! ラッキー」

「ああ、富谷君も同じ班？」

「ねえよ」

あたしと水無瀬が見つめ合つたまま四人目の班員の富谷君が寄つて来た。富谷君もいればあたし達の班に問題はない。態度は悪そくに見えるけどとても真面目だからね。

つてか一番の問題はこいつだよこいつ。この皿の前にいる猫がぶり野郎だよ。

「じゃあ俺と有賀さんは実験道具集めて来るから、狭川さんと富谷はこいで待つて良いよ」

「ああ、サンキュー水無瀬、有賀」

「ありがとー」

なんであたしがあんたと行くわけ。一人で取りに行けばいいだろーが。

はあ、と溜息をついてスタンドを取りに行くと、重りやバネも同じ所にあるから後ろから水無瀬が追つて来る。顔には満面の笑みがあるに違いない。ああムカつく。

「同じ班になるとはさすがに予想外だったな

「……仕組んだんじゃないでしょうね」

「なんで俺がお前と同じ班になりたいと思つんだよ。自意識過剰」

「…………」

落ち着け。落ち着くんだ彩那。だめだ。こんなことで怒つてはいけない。こいつはこういう奴なのだ。表では笑顔を振りまきながら優しげな少年を演じてるけど本当は小声で嫌味を繰り返す嫌な男なのだ。こんなことで振り回されではならない。落ち着くんだ彩那。

ふう、と落ち着くために息を吐くと、何も反応しなかつたあたしを水無瀬がつまらなそうに見た。

「はい。スタンドもって  
「俺が？」  
「あんたが。あたしはバネと重り持つから  
「…………」「

有無を言わせずにスタンドを押し付けてあたしはバネと重りを持つてさつさと班に戻つて行く。後ろから水無瀬が溜息をつくのが聞こえたけど、同時に道具を取りに誰かが来たので何も言わずにあたしの後を追つてきた。

さすがというかやはりというか実験が最初に終わつたのは私達で、結果も私達の班が一番正確だった。ムカつくけれど水無瀬があたしよりも頭がいいのは猫をかぶつてもかぶつてなくても同じなので

仕方がない。

でも悔しい。

なんあんなに嫌な奴なのに全てにおいて超人なのよ！ ああム

力つく！

「彩那つてばー！」

ペシッ、と軽く叩かれながら名前を呼ばれて我に返った。目の前を見ると稔が腰に手を当てて、肩眉をあげながらあたしを見下ろしている。

・・・あれ？ いつのまに学校終わってたんだろう。前にいる稔が呆れた様子で我に返ったあたしを眺めてから溜息をついて、あたしの鞄を机のホックから外して教室から出て行く。

「あ、ちよ、稔！ 待つてよー。」

いろいろなことに対しても強引すぎるよこの子。つたく。

「あれ？」

慌てて教室から飛び出して稔を追いかけると、階段の手前で稔が立ち止まっていた。追いついて自分の鞄を稔の手から取つてから、

稔の見ているものに視線を向けた。

「 . . . げつ . . . 」

水無瀬が立つてた。つていつてもあたし達を見るわけでもなんでもなく耳に携帯を当てるだけなんだけど。 . . . あんたつて奴はどうしてそんなに携帯で話す必要があるのよ。つてか猫かぶつてんだからせめて人気のないところで電話しなよ。

あたし達の足音が聞こえたのか、水無瀬ははつとして振り向いた。そこにあたしと稔の姿を見つけると、小さく微笑んでから階段を降りて行く。

「 . . . だから絶対に家に入れないで。俺が帰るまで頼むよ」

あたしはともかく稔が側にいるから口調はいつものように穏やかだつたけど、そこには確かに怒氣が込められていて、あたしははじめて水無瀬の叫ぶ姿を見た放課後を思い出した。あの時も確かに『絶対に家に入れんなよ』とか叫んでた気がする。

「 . . . 誰だろう? 水無瀬のことだから女関係か? 酷いフラれかたをされた女の子が押し寄せて來たとか。あり得るあり得る。あいつ絶対ああいうタイプだもん。」

うんうん、と一人で納得していると、隣にいる稔が首を傾げながら水無瀬が降りて行つた階段を見つめた。

「なんだろう。なんか怒ってるみたいだつたわね」

「そうねー」

「水無瀬君にしては珍しい」

「まあ、水無瀬君も人間なんだから苦労があるんじやないの?」

感謝しろよ水無瀬。今この瞬間に穏にあんたが猫がぶつてゐること  
言えてもよかつたんだから。

・・・・・あれ? そういえば今思つたんだけど。あたしが水無瀬が猫かぶりだつて発見した日、あいつは確かに素のまま電話の中に叫んでいた。ということは電話の相手も水無瀬の本性を知つてゐわけで・・・・・猫かぶつてゐることも知つてゐることかな? 中学から猫がぶつてゐることも知つてたから、家族ももしかして知つてゐるのかもしねり。

んー。気になる。

それにもし家族じゃなかつたとしたら、あいつが本性をバラしてゐるのつて誰になるんだろう? 彼女とかでなくても本性を見せなさうだし。

いやー。気になる。

「そりいえば彩那、水無瀬君と同じ理科の班になつたんじよ?」

「え? ああ、そりいえばそうだね」

「ラッキーすぎるでしょ。私も水無瀬君と同じ班がよかつたー! なんで学年トップツーが同じ班なのよー そんなのずるいー!」

朝から何人もの人に言われている言葉にあたしは溜息を吐いた。自慢してるつもりではない。だけど確かに周りから見れば学年トップシーが同じ理科の実験班なんだから、班員が羨ましいのは当然といえば当然かもしねない。

それでも穏だつて頭は悪くはないわけで。

「……あのさあ、そんなこと言うけど穏だつて余裕で実験やつてたじゃん。学年五位なんだから文句言うなよ。充分頭良いんだから」

「そりやあね？ 順位だけ聞いたら『つわおー、何、ちょ、穏超頭いいじゃーん！』とか思われるかもしねないけど！」

「…………」

「あんたと私の総合得点の差、知つてんの？ 知らないでしょ？」

「…………そういえば見た事なかつたな……。神楽さんは自分からあたしに言って来たから知つてたけど、基本的には水無瀬どこのくらい点差がついてるかを確認するから、あたしよりも順位が下の人の得点はあまり気にした事がない。」

言つておくが断じて自慢してるわけじゃないし、あたしよりも順位が下の人をバカにしてるわけでもなんでもない。ただ、一位の成績としてはやっぱり一位にはなりたいわけで、どうしても水無瀬の得点が気になつてしまふのだ。

「……そういえばあんまり見た事がないかも」

正直に答えると穂が『でしょ？』とでも言いたげにあたしを見た。

「神楽さんとあんたの得点の差が百点以上。神楽さんと遠田の得点が基本的には四十点差。んで、私と遠田の得点が基本的に八十から百点差。さて、私とあんたの得点の差はなんでしょう？」

「さつと一百一十点から一百六十点？」

「はやつ！ そうだよそういうこと…つまりあんたと水無瀬君の得点の差はめっちゃくちゃ僅差なの。私が遠田にいつまでたつても追いつけないよう、神楽さんも彩那の足下には及ばない。分かるー？ そんないつでも僅差な二人が同じ班なんて羨ましいに決まってるじやん」

「…………」

確かに点数についてはあまり考えた事がなかつたけど、穂の言つ通りだと思った。テストの合計得点は千点。水無瀬は必ず九百点台をたたき出して来て、あたしはいつも八百点から九百点弱を取る。一方の神楽さんは殆ど七百点で、時々八百点台にも入つて来るけれど、そういう時は基本的にあたしも点数が高くて、水無瀬の点数も高い時だ。

「…………んー。そう考へるとあたしと水無瀬が同じ班つて、す「こことなのかも。決して自慢してるわけじゃないけど。そういうふうに聞こえるかもしれないけど。

「まつたく。彩那つてそういう所に関してまつたく自覚がないから嫌な感じだよねー」

「……ちょっと」

「嘘。うわうそ。そうこうといひが彩那のいい所。んじゃあねえー」

「はいはー。じゃあね

手を振りながら稔が駅に入つて行つて、あたしは溜息をついた。  
稔は水無瀬の本性が知らないから羨ましいとか言えるんだよなー。  
あたしは水無瀬の本性を知つてて、あいつがどれだけ腹黒くて酷い  
奴なのかは知つてるから、いまいち喜びが大きくない。

再び溜息をついて、青に変わった信号を渡ろうとした瞬間、

「おい

。 . . . .

「またあんたかよー?」

叫びながら振り向くと、腕を組んで壁によりかかりながら水無瀬  
が田を見開いた。

「んだよ。文句あんのか?」

「ありまくりだよー。どうしてそういうタイミングで呼びかけてく  
んのよ、あんたは!」

「お前が一人じゃないと話しかけられないから仕方がねえだろ」「  
つてかどうして呼びかけてくんのよー。ほつとけばいいじゃない  
「聞きたいことがあつたから呼びかけたんだよ

「…………もつ…………。何？ わたしと済ませてよね

もうあたし優しい。こんな嫌な奴のいりごとを素直に聞いてるあたり、ただのお人好しに見えるかも知れないけど断じて違うよ。違うよ？

「…………お前さ、」

「…………え、そこで言葉を切るの？ めっちゃ何か聞きたげなのになんでそこで言葉を止めるのよ。

「…………ちよっと、何よ。気になるじゃない」

「…………やつぱい。知つてたら恐ろしい」

「はあ！？ 知つてたらって何よ？ ちよ、え、ちよっと水無瀬！」

自分から引き止めておいてやつぱいって何よあんた！ しかも歩き出したし！ 何事もなかつたかのよつに歩き出したし！ 挨拶もなしかよお前はよ！！

顔を引きつらせながら水無瀬の後ろ姿を追うと、あたしが何を知つてたら恐ろしいのか考えてしまった。

知つてたら恐ろしいって、何が？



## 不安な感じがして仕方がない（後書き）

これを上げたらもう一つの方の小説に取りかかるので、次話は遅れてしまつかもしれません。

ご了承ください。

ここまで読んでくれてありがとうございます。

## 猫かぶり家族

水無瀬の言つた意味がよく理解できなこまま家に帰ると、いつの間にか土曜日になつていた。なんだろう。最近時間が流れるのが速くなつてゐる様な氣がする。水無瀬と関わるよつになつてからだよね。絶対。

時計を見ると午後一時。しまつた。昨日遅く寝たから起きたのが十一時だつたんだよな . . . 。朝ご飯食べて朝シャワー浴びたらいつの間にかこんな時間になつていた . . . 。

そこで、

「そんなんこと思つんだつたら出て行けばいいでしょー?」「お前らがやつてけるのは誰のおかげだと思つてんだ! ! !」「働いてるのはあんただけじやないのよー! ! !」

・・・またはじまつた。もつ結構前からだけどね、お母さんとお父さんの喧嘩がはじまつたの。最初はそんなに簡単に怒りだす二じやなかつたのに、今ではちょっとくらいすぐにヒートアップしてしまつ。

いつもうちにいるのは憂鬱だから、大抵喧嘩が勃発する時は出かけることにしている。

部屋から出て玄関に向かうと、後ろのドアがしまつた部屋で一人が叫び合つのが聞こえる。どうせまたお父さんがお母さんに小さな文句でもつけてそれにお母さんが爆発した、つていついともパンに決まつてる。

溜息をついて、一応『いつてきまーす』と言つてからドアを開け

た。

外に出ると一人の叫び声が一気に小さくなったのに安堵の溜息をついて、どこへ行くわけでもなくあたしはフラフラーっとでかけた。どうせ暇なんだから本屋でもいつて漫画買つてるかな。そういうば食材もなかつたような気がするけど・・・・、多分怒つた後にお母さんが買い物に出かけるから食材はいいや。本屋にでも寄ろうかな。

商店街をブラブラと歩いて本屋を見つけると、その前に見覚えのある人物が見えた。

美里ちゃんだ。

「美里ちゃん！」

声をかけると、本屋に入ろうとしていた美里ちゃんが驚いて振り向いた。そこであたしが手を振りながら駆け寄つて来る姿に顔を輝かせて美里ちゃんも手をふる。可愛いなもー。

「彩那！ 超偶然！ こんな所で何やつてんの？」

「こつちの台詞だよ！ あたしは本屋に寄つて漫画でも買おうと思つて」

「あたしも一つ。どうせなら一人で見てく？ 買う漫画は同じでしょ？」

「だねつ」

あははと一人で笑つて本屋に入る。趣味は似ているため、じばら

く美里ちゃんと一緒に漫画を探すと、やはり一人で立ち読みを始める。立ち読みをはじみると何時間も同じ所に立つて読み続けられるから時間を潰すのにはもってこいの場所だけど、急いでる時に『ちよつとだけ』と思つて寄つちゃうと大変なことになる。

因みにあたしはそういう体験済み。十分くらい寄るはずだったのがいつまにか一時間も立ち読みしてて大慌てで家に帰つたんだつけ。その時も相も変わらずお母さんとお父さんが喧嘩してたからあたしが遅れたのに気づいたのかさえも不明だけ。

結局今回も一時間半くらい立ち読みをしてしまつて、美里ちゃんと一緒に本屋から出たのが三時近くだった。

「ヤバい。長居しそうだ」  
「あははっ、分かる。でも本屋つてつい何時間もいちやうよね」「だよねっ！」  
「結局何も買わなかつたし」  
「あははっ、ほんとー。」

一人で笑いながら商店街を進んで行くと、美里ちゃんの家の方向があたしとは反対方向なので、信号の手前で手を振つて別れる。それから腕時計を見ると三時五分。さすがにお母さんとお父さんの喧嘩は終わってるかな、と思つて溜息をついた。

これでまだ続いてたらあの家でてつてやる。稔の家にでも居候しようかな。

．．．．．うう時に兄妹が欲しいと思つよねー。一人でもあたしと同じ気持ちの人がいてくれればあの家で住むのも楽になるのに。一緒に住んでるから一人ですつと愚痴つてられるし。

結局人生そろは甘くないけどねー。

再び溜息をついて角を曲がった瞬間、

「彩那ちゃん?」

凛とした声に、あたしの友達にそんな声の人はいないと思いつながら振り向くと、友達でなくともとても見慣れた姿が両手に大きな袋を持ちながらじつちに向かって微笑んでいた。

「美智子さん!」

齊木美智子さんは近所に住んでる一十六歳くらいのおねーさん。ある時、家に帰る途中で袋を四つくらい大変そうに運んでるのを見かけて助けるために声をかけたらすく感謝されて、お茶をしてつてとまで言われたんだよね。それからなんとなく気が合つて、じつらへんで会う時は必ず声をかけてくれる。

「やつぱり彩那なんだ。すく偶然ねー。こんな所で何やつてるの?」

「あたしは本屋に……。美智子さんじゃ、どうしてこんなところにいるの?」

「見ての通り買い物。弟が食べ盛りだからねー、最近たくさん食べないといけないのよ」

苦笑を浮かべて美智子さんが両手を上げた。

美智子さんは結構歳の離れた弟さんがいて、土日は部活で殆ど家にいないらしいけど、帰つて来た後に山のよつに食べるらしい。

「そりいえば、彩那ちゃん今時間あるへ 家すぐそこだからお茶でもするために寄つてつてよ」

ね？ と可憐らしく小首を傾げる美智子さんに抗つことができたわけでもなく、あたしは美智子さんの右手にある袋を持って一人で美智子さん宅へよつて行く。

美智子さんの家は一階建てで大きく、白い柵に囲まれた綺麗な家だ。表札に斎木があるのを見て、そりいえば・・・と思つて問い合わせてみた。

「美智子さんつて、結婚しないの？」

「え？」

「そんなんに美人なのになんて結婚してないのかなつて」

キヨトンと目を丸めて、しばらくしてから美智子さんは盛大に笑い声をあげはじめた。

・・・・意味が分からない。

「あはっ、・・・あは、ははは、あははは、ははは、あはははは  
ははーー！」

「え、ちゅ、美智子さんー？」

「「」あははっ、「」めん、「」めんっ！ 私、こいつ見えて結婚してるのよ？」

・・・・・。

「ええええ！」

「絶対知ってると思ってた！ だつて私の家に来るのはじめてじゃないし、棚の上にある写真とか見て勝手に推測したと思ってたの！ いつも家にいなのは出張中だからで、いやだ！ 絶対知ってると思ってた！」

「ええええええ！」

再び笑い転げる美智子さんを驚いた目で見つめた。

「……知らなかつた。いや、言われてみれば棚の上に写真が置いてあつたからそれを見ればよかつたんだけど……なんとなく勝手にいろいろ見るのも失礼な気がして見なかつたんだっけ。

「人の写真をそんなジロジロ見てないよ！ もう！ 美智子さんいつまで笑つてんの！」

「「」め、「」めんっ！」

ふふふふふ、といまだ笑いを零しながらも美智子さんが家の中に入つて行つて、あたしも少し眉間にしわを寄せながらも美智子さんの後を追つた。前回来てから結構時間が経つてたけど、やつぱりクリーム色と白のまざつた綺麗な部屋のままだつた。

玄関から入つてすぐ横にある棚に写真があるのを見て、さつき言われたことも考えて写真を見た。確かに真っ白のウエディングドレスに身を包んで、イケメンと腕を組みながら階段を降りてる写真がある。

「…………しかし美人は何を着ても似合つね…………。正直美智子さんほどの美人はあんまり見た事がない気がするしなー。」

「すうい…………。美智子さんめっちゃ綺麗」

「やだ！ 褒めてもなにも出ないわよ？」

「いやいやほんと！ このウェディングドレスだつてすうじく似合つてる！」

「あら、ありがとう 恥ずかしいわね、なんだか」

ほんのり頬を染めたまま美智子さんが袋を置いて笑いを零した。それからその袋の横にあたしも袋を置くと、じつと美智子さんがこちらを見たままだったので少し驚いて身を引いた。

「え、何？」

「いや、あんまりじつくり見た事なかつたんだけど、彩那ちゃんつてとっても美人ね」

「…………はい？」

いや、真顔でそんなこと言われてもすうじく困るんだけど。

「とても高校一年生には見えないわー。すうじく美人。これは一目

では分からぬけど、じっくり見て美人だつて分かるタイプね。モテるでしょ？」

「モテ、はい！？ あたしが！？」

「そりゃー！ 彩那ちゃん以外に誰がいるつていうのー。 髪の毛はすっごく綺麗でサラサラだし、目も丁度いい大きさだし、鼻と口もすっごく綺麗な形してるー」

「ちょっと美智子さん！ いきなり何なのー？」

あまりにも驚いて数歩下がっても美智子さんが追つて来る。

「いやだー、どうせならうちの弟のお嫁さんにでもなつてよー。こんな綺麗な顔をずっと見てられるんだつたら幸せだわー」

「見ず知らずの男と結婚させよつとしないでー。 美智子さん！ よ、追いかけないでー！…」

身の危険を感じるくらいの勢いで美智子さんが追つて来て、あたしが身体の前で止めるために両手を差し出した時だった。

「おい、姉貴。 外にまで声が漏れてんぞ？」

男の子の声と共にドアからひょっこりと顔が除いて、その顔を見た瞬間に田の前に美智子さんが迫つていたことも忘れて愕然とした。相手も手に鞄を持ったまま田を見開いてあたしを見てる。

「み、み、み、水無瀬えええええ！」

「有賀」

なんでこんな所にこいつがいるのよ！？ どんな腐れ縁！？ な  
んでどこにいたつてこいつと関わりがあるのよ私は！？

水無瀬に指を突きつけたまま心の中で絶叫を繰り返すと、水無瀬はあたしと同じくらいに驚いた表情のまま、横で全てを傍観してゐる美智子さんに向いた。

やつぱり美智子さんも同じくらいに驚いた表情をしていることが  
ら、あたしが藤ヶ丘に通つてるとは知らなかつたのか。つてか水無  
瀬と知り合いだつてのは知らなかつたつてどこかな。  
いやいや、そんなことより。

「なんで水無瀬がこんな所にいんのよ！－」

「ここは俺の家だ！」

「なんで！？」  
おやがんたか美智子さんのかじとがやめてよーーー！」

その形やかた

嘸てじ、アサガホが遡<sup>アシテ</sup>シセキハニ

如貴に給如レハナガナ生苗ニ達シルニ當ナリ前ナ

「ボルヒス

「アーティストの心」

「モードルーラー」  
アーティスト用語

にきたの!!

「まあ？ マジかよ！」

「何その顔！ 何その『なんだこいつ超めんどくせえ』って顔！！」「そう思つてんだから仕方がねえだろ。マジなんていんだよ、お前「くつそ・・・つ！ ほんと失礼だなあんた！！」

「なんとも言えば？」

興味なくしたとでも思つて、水無瀬は鞄を床に置いて、近くにあつた椅子に腰を降ろすと横にいる美智子さんを見た。あたしもイララしながらも美智子さんを見ると、美智子さんは目を見開いてあたし達を交互に見つめた。

「……嫌だ、ちょっと愁也」「

「んだよ」

「……あんた、猫かぶつてないじゃない」

美智子さんの言葉にあたしも水無瀬も固まる。  
「……しまったのか？いや、美智子さんも水無瀬が猫かぶつてるって知つてんだから問題はないはず。

ないよね？

美智子さんの発言に水無瀬が深く溜息をついた。

「……バレたんだよ。四日へらいで前に

「うつそマジー！？」

「マジ」

「じゃああたしも猫かぶんなくていいことー？」  
「じゃねーの」

「……え？いやいやひとつ待てよ。空耳か？今はあた

しの空耳か？ ってか空耳であつて欲しいんだけど。今、美智子さんが『あたしも猫がぶんなくていいってこと？』って聞いた様な気がするんだけど、氣のせいであつて。空耳であつて。これ以上の猫かぶり発覚はマジで無理だから。

なんとなく危険を感じながらも美智子さんと視線を合わせると、美智子さんはニヤリと口角を上げた。

「そーかそーかー。愁也の猫かぶりバレてたんだ？」

「…………えーと…………」

キヤラが急変したんだけど。やめてくれよ。実はあたしも猫かぶりだったんだー、とかいうカミングアウトはマジでやめてよ。

「愁也が猫かぶりのことで彩那ちゃんのことと信用してたことはあたしも信用していいよね？」

「えつ…………」

「あたしも猫かぶりなんだよねー」

「…………」

なんだその爽やかな笑顔。なんだそのめっちゃくちゃ爽やかな笑顔。あたしが水無瀬の秘密を抱えているのにどれだけストレスを抱えているのかを知つての発言ですか美智子さん！？

田を見開いて美智子さんに見入つてると、美智子さんはガハハ、と気品なか笑い声を上げた。

「いやあーー！ 憐也の猫かぶり知ってる人なんて彩那ちゃんが三人  
田くらいじやない？ これは楽しい！ しかも懐也のこと怖がつて  
ないケースとかはじめてじやない！？ 何これ超楽しい！」

「……姉貴」

絞り出す様な声で水無瀬が美智子さんを呼んでも美智子さんは興奮状態のまま笑い続ける。先程の結婚を聞いた時の笑いとは違うさうの声に田を見開かずにはいられない。

「……ってかなんだこの家族。猫かぶり家族かよ。まさかの。

「……なんで、美智子さんまで猫かぶつてんの？」

あたしの問いかけに涙を吹きながら美智子さんが隣にいる水無瀬をチラリと見つめた。口元にはまだ笑みの名残がある。

「いやだつてね、懐也がこんな状態でしょ？」

「こんな状態？」

「完璧超人美青年を演じてるじやない」

「……ああ……」

「そんな性格のいい奴が弟にいるあたしがいい奴じゃなかつたらおかしいじやない？ それに『弟さんはあんなにいい子なのに』とか近所のおばさんに言われたくないじやん？」

「……」

まあ、確かに水無瀬の猫かぶりがあんなんんだから家族もいい

人ばかりだと勝手に思い込んでたんだけど……。思い返してみれば美智子さんのキャラはすっごく優しくて美人の理想のお姉さんってタイプ。水無瀬は優しくてイケメンで頭も良い、運動神経が出来る理想のタイプ。

……元々スペックがいいから出来る猫かぶりだよね。

……つてかなんだこれ。なんであたしこんなことになつてんのよ。なんでよりに寄つてあたし?ほかの誰でもよかつたのにあたし?もうマジあり得ない。

水無瀬と美智子さんが会話を始めたところで（といふか嫌そうな顔をする水無瀬に美智子さんが一方的に質問攻めしてゐるよつに見えるけど）家のチャイムが鳴り響いた。

……こんな時間に誰が来るつていうのよ、と思つて首を傾げると、目の前にいる二人は嫌そうな表情になつたまま固まつた。

……え?

「……夏菜<sup>かな</sup>だな」

「……そつだらうなー。迎えに行つてよ

「嫌だ。姉貴が行け」

「はあ? やつけんな。あんたが行きなさい」

チツと舌打ちをして水無瀬が腰を上げた時に、チラリとあたしを見た。

「……有賀、攻撃されても俺は知らないからな  
「は?」

ちょ、そんな意味深の言葉をかけてそれ以上は何もなし！？

んであなたはそう言葉が足りないのよ、水無瀬！！

な

・・・・とつもなく嫌な予感がしてきた。

## 猫かぶり家族（後書き）

微妙な所で切って「めんなさい」。でもなんだか長くなりそうだったので、次の話でまとめてしまおうと思つて . . . 。

そんなに遅れなかつたかな？ もう一つの小説の方も同時進行中で書いてたので、少し遅れてしまつたのはすみません。というか基本的に不定期更新ですみません。

東北地震については外国住みである私もすぐに聞きました。日本に住んでいる家族や友人の無事は確認できていますが、放射線もあるし、地震や津波の影響でまだまだ非常に大変なので油断はできない状態です。

皆様のご家族や友人も「無事であることを祈つております。

ここまで読んでくれてありがとうございました。

## 嫉妬とライバル発言

夏菜、と言つた水無瀬の言葉にあたしは密かに驚いた。いやだつて、なんか女の子を名前で呼ぶようなイメージがなかつたから、普通にそれを口にする」とに対する驚くのは無理もないと言つてほしい。

彼女とかいても苗字でずっと呼ぶつていうイメージがあるし、苦手な人は『そいつ』とか『こいつ』とか『あいつ』とかなんとも無礼な口の聞き方をするどばかり思つてしまつ。

「有賀、攻撃されても俺は知らないからな」「は？」

と、田を点にするあたしを見ずに至極嫌そうに水無瀬が玄関に寄つてドアを開けた。あたしと美智子さんが覗き込むのと同時に、水無瀬がサッとドアの前から退いた。

瞬間、

「しゃりやああーーーー！」

といづらび声と共に女の子が突撃してきた。

いや、マジで突撃という表現がぴつたりと思つてしまつような勢いで家の中に入つて來たのだ。驚いてあたしが田を丸めて、美智子さんは溜息をついた。恐らく女の子のするべきことが分かつていて

横に退いた水無瀬も同じ様に溜息をつく。

女の子は家の中に転がり込むと、あたしと美智子さんを一瞥もせずに水無瀬に向いた。

見た目だけで判断するとあたしや水無瀬と同じ年に見える。『アムロングの黒髪』にぱっちりとした茶目。雰囲気から既に明るいや元気さが現れていて、ずいぶんと可愛らしこ女の子だ。

「避けるなんてひどすぎー もう聞いてよ愁也ー お兄ちゃんが、お兄ちゃんがあああー！」

「うるつせえよ。お前の突撃なんて受けたら即死だよ即死」「ひど、酷い！ 人を突撃マシーンみたいに言わないでよー」

「だつてそうだろ？」

「違うよーーー！」

飛び上がって水無瀬に叫ぶ女の子を、水無瀬は軽くあしらってから再び台所へ進んで行く。

．．．．．ってか水無瀬が猫かぶつてないことは．．．．家族？ いや、家族だったら一緒に住んでるだろ？ ．．．．いや、従妹とかかもしれないな。水無瀬のこと名前で呼んでるし．．．．マジで誰だこの子。

美智子さんは水無瀬の後ろ姿を微笑を浮かべてから追つて行き、あたしは困惑したままだったけど美智子さんの後を追おうとした。が、

「．．．ちょっと」

後ろから聞こえた声に驚いて振り向くと、女の子はさつきの態度からは予想がつかないよつた顔つきであたしを睨みつけていた。

「……え、何。あたしなんかした？」

「……な、何ですか？」

聞いても返答はない。

女の子はすっと視線を横に滑らせると、隣に立っている美智子さんに視線を定めた。美智子さんが無言に見返している。

「……な、何なのこれ。つてか水無瀬もそんな所で立つてないでなんとか言えよ！」

「……美智姉……。この子誰？ なんでここにいるの？」

「友達。あたしがお茶に誘ったんだよ」

「友達って、高校生じゃん。はじめて見るんだけど」

「当然でしょ。そんな頻繁に連れて来てるわけじゃないんだから」

素っ気なく言い放つ美智子さんを見て、この子のことが好きじゃないってなんとなく感じた。女の子の方はその態度に対して得に何かを感じた様な素振りは見せず、ジロジロとあたしを見回してからふーん、と口にした。

「……何なの？」の失礼な子は。

「夏菜。用があるんだつたひどいとと聞えよ。俺達だつて暇じゃねえんだ」

プチ修羅場を田にしてながらも至つて冷淡に水無瀬が言つと、さつきまで座つていた椅子に再び腰を降ろした。美智子さんもベンチに立つてお茶を入れ始めて、あたしも流れでさつきまで座つてた椅子に座つた。

夏菜と呼ばれた女の子はズカズカと台所に入つて来ると水無瀬の態度に眉を寄せた。

「なんで愁也はそつやつて冷たいのさー。遊びに来ただけなのにー。遊びに来ただけなら俺達に遊ぶつもりはないからさと返れ」「ひどーーーー！」

溜息混じりに言つ水無瀬は本当になんといつらくなし。だけど夏菜ちゃんはその態度が普通なのか、深く傷ついた素振りは見せていない。それ所か当たり前のように水無瀬の隣の席に座つた。瞬時に水無瀬の眉間のしわが寄る。

「 . . . 帰れつて言つただろ」「帰りたくないもーん。美智姉のお茶も飲んでいきたいしてめえのお茶なんて淹れてねえよ」「じゃあ愁也の貰うし」「ぞつけんな」

水無瀬の声色に、心底迷惑がついていることが分かる。別にあたしだって水無瀬のことによく知ってるわけでもなんでもないけど、その態度に屈しない夏菜ちゃんすげえ。  
つていうか、誰なのこの子。

「……あの」

声をかけると、全員があたしを見た。

「え、いや、あの、紹介は、してくれないわけ？」

あたしの発した言葉に水無瀬が眉をあげて、なぜか夏菜ちゃんに睨まれた。なんなのわからん。

「ああ？ 紹介されてものかよ」  
「そういうわけじゃなくて！ いや、やうだけビー。普通は紹介するでしょ？ 礼儀だよ礼儀！」  
「面倒くせえなあ」  
「そんなことくらこで面倒くせがらないでよー」

はあ、と水無瀬が溜息をついた。

「こいつは市村夏菜。近所に住んでる俺と姉貴の幼馴染みだよ。ん  
で、夏菜、こいつは同じクラスの有賀」

「あ、有賀彩那です。よろしく」

「……市村、夏菜です」

……え、なんでそんな不服そうな顔であたしを見るの？

つてか水無瀬と美智子さんの幼馴染みか。なるほど。そりゃあ猫  
かぶりはできないわけだ。名前で呼んでるのも納得できる。でも、  
夏菜ちゃんが水無瀬と美智子さんの猫かぶりを知つても誰にもバ  
レでないつことは、やっぱり口止めされてるのか？

……いや、本当にびっくりしてそんなに睨むの？

「…………」

じとーつ。

「…………」

じとーつ。

「…………」

じとーーーつ。

「何なのーーー？」

我慢が出来なくて叫んでも夏菜ちゃんの視線は揺らがない。

何なのーーー？ あたしこの子になんかしたのーーー？ 初対面でしょーーー？

椅子から立ち上がって叫んぶあたし。微動だにしない夏菜ちゃん。それをつまらなさそうに見る水無瀬。そして笑いながら見ている美智子さん。いやいや、ここは助けよつよ。

溜息と共に椅子から水無瀬が立ち上がったので、おっ、助つ人が入るかと思つてる矢先。

「着替えて来る。体育着暑いし」

「わかったーーー」

「え、ちょ、水無瀬ーーー？」

助けるや、「コラアーーー！ あんた絶対あたしが夏菜ちゃんに睨まれてる理由分かつてるだろ？ があああああーーー！」

と切実に視線で訴えても、水無瀬はあたしをチラリと見てからふんつと鼻を鳴らすと階段を登つて行く。

は、鼻で、鼻で笑いやがつたああああああああああーーー！

「・・・あんの野郎・・・つーーー！」

と、水無瀬が一階に消えた瞬間、夏菜ちゃんは水無瀬のために置いてあつた湯のみを掴むと、ダンッと勢い良くテーブルに置いた。驚いてあたしの肩が揺れた。

な、何？

「…………单刀直入に聞くけど、あんた愁也の何？」

「……………はい？」

え、いきなり何この子。

…………本当に田が点になつたんだが。

「愁也の何って聞いてるんだけど」

「…………クラスメート、ですか？」

なんだこの子。いきなり失礼になりやがつた。しかも横で傍観してる美智子さんは何も言わないわけ？ マジ？ 一人で片付ける？ つか攻撃つてこのことかよ水無瀬…………

無難に（つていうか実際そうだし）クラスメートと答えると、余計夏菜ちゃんの眉間のしわが寄る。

「ただのクラスメートの癖に、どうして愁也が猫かぶつてないのよ」

「……………」

今『ただの』つてものすごく強調したよね。しかもクラスメートの『癖に』だあ？ クラスマートであつたら悪いのかおらあ。はつ、ヤバい。落ち着け彩那。キレてはいけない。

「……とある事情で、知っちゃったのよ」

「とある事情？ 何それ。なんで愁也が猫かぶつてること知つてひつやつてノコノコ遊びに来たのよ」

ピキッ。

「……別に水無瀬に会つたために來たわけじゃないわ」

「嘘つかないでよ。それ意外にどうして來るの？ 愁也の猫かぶつてない性格を知つて惚れたんでしょう？」

「…………」

はい？

「ひつしてそこに『惚れた』が出てくるのか聞いていいかな」

「猫かぶつてる愁也の性格をしつて好きにならない子はいないもん。そういう奴だもん、愁也つて。だけど猫かぶつてない性格を知りながらもひつやつて愁也と関わつてゐつてことは惚れてるつてことじょ？」

「…………全然違つんだけど」

「じゃあひつしてこるのよー。愁也のことが好きでもなんでもない

んだつたらノコノ遊びに来ないでよー 愁也はあんたみたいなウザイタイプなんて嫌いなんだからー」

「…………」

ウザイって言いやがっただのアマ。

「あの、全然一切惚れてないから水無瀬のタイプとか関係なくない？」

「愁也にはこれ以上近づかないで！ 愁也にはあたしがいるから、あんたみたいなのは必要ないのー！」

「…………」

ははーん。

つまりなんだ。この子、あたしに嫉妬してるわけ？ 猫かぶつてない水無瀬があたしと普通に会話をしてるのを見て嫉妬したわけ？ つまりは水無瀬のことが好きってこと？ やば。こんな分かりやすい好意見た事ない。

つてことはあたしより鋭い水無瀬は当然夏菜ちゃんの好意には気づいてるってことか。美智子さんも知ってるっぽいな。攻撃つてのは夏菜ちゃんがあたしに嫉妬することを見越しての言葉か。つてか知ってるんだつたら止めろや水無瀬。

…………なんで次から次へとこんな厄介」と絡まれるのよ、あたし。

「とにかく絶対に愁也のことは好きにならないで！」

「…………いや、全然一切好きになる予定はないので」

「距離も置いて！ 愁也にはあたしがいるんだから、あなたはいらないの！」

「…………」

…………の野郎…………。人を道具みたいに言いやがって……

つ！

「夏菜。いい加減にしなよ。彩那ちゃんは愁也には惚れてないって言つてゐるじやん」

溜息混じりに横から美智子さんの助け舟が入る。やつとかよ。もううつしょーっと早く助けてくれても支障はなかつたんだけど。

美智子さんの言葉に夏菜ちゃんはぶすつとしたけどそれ以上何かを言つ事はなかつた。再び溜息を吐いて美智子さんはあたしの前に湯のみを置くと、そこに緑茶を注いだ。

「…………ありがとうございます」

沸々と沸き上がつていた怒りをなんとか落ち着かせて、あたしは注がれたお茶を口にした。丁度いい苦さが口に広がつて、一瞬にして幸せな気分。お茶つて本当に極楽な気分になるよね。とくに緑茶は大好き。マジ愛してる。

ふう、と満足そうに息を吐くと、美智子さんは微笑を浮かべて自

分にもお茶を注いだ。

「「めんよー、彩那ちゃん。夏菜つてほんとに嫉妬深くて、今まで愁也と関わつて来た女の子をみんな追つ払つてんだよねー」

「 . . . はあ . . . 」

「つむさいな！ 美智姉だつて知つてるんだつたら協力してよー」「嫌だね。あたしは愁也に嫁が出来るんだつたら夏菜より彩那ちゃんがいい」

「 . . . ちょっと美智子さん . . . 」

「美智姉酷い！！！」

「酷くないわよ。誰だつて普通そう思ひでしょ

「酷い！…」

「 . . . いや、夏菜ちゃんにめっちゃ悪印象を抱いたあたしでもその発言は酷い。美智子さんつて、ほんと夏菜ちゃんが嫌いなんか . . . いや、でもそこまで言わなくて もよくない？

夏菜ちゃんに冷たい表情をしながらも、あたしに顔を向けるにつこじと美人お姉さんスマイルを向けていた。

「 . . . なんという扱いの差。

「それにしてもそろそろ遅くなつて來てるから、お茶を飲んだら愁也に送らせるね」

「え、いや、いやいや。その必要はないよ美智子さん。あたし一人で帰れるし」

「何言つてんのー。眞つ眞つでも女の子のお客は絶対に送るのがうちのポリシーー！」

「何そのポリシー！？」

その心遣いはとても嬉しいけど水無瀬になんて送らせてほしくないし！ 美智子さん絶対わざとだろ！

「ゴタゴタ言わねえでさつさとお茶飲めよ。送つてくから」

背後から聞こえて来た声に湯のみを持ったあたしが固まる。そのまま恐る恐る振り返ると、私服に着替えて水無瀬が面倒くさそうに階段を降りて来ている。くそつ、好きじゃないけどかっこいいなあ前！

『さてかちよつと待てよ』  
『送つてくから』?  
『今、送つて  
くから』って言つた?

・・・人の親切心に『何々

「うん、頬が熱い。胸が熱い。」

「さて、刀無瀬があたしを送る理由が分からぬ」

「たかひ俺んちのボリシーたて姉貴が今言つたたそーか」「いやいやでもさー！」

「そうだよー」

なおも信じようとしているあたしの後ろでダンツと音がして、振り向くと夏菜ちゃんがテーブルに手を叩き付けて立ち上がっていた。

．．．地雷踏んでしまつたか？

「なんで愁也がその子送るの…？ 一人で充分帰れるでしょ…」

必死の夏菜ちゃんの叫びにしかし水無瀬も美智子さんも完全無視。  
．．．この姉弟厳しそうだろ．．．。

水無瀬はまるで夏菜ちゃんがいないのよつにズカズカと近寄つて  
来ると、自分の湯のみを掴んだ。それから一気にそれを飲み干して、  
あたしに向く。  
え。

「だからさつさと飲めよ。俺だつて送つて行きたいわけじゃねえし  
早く出て行つてもらいたいし心底面倒くさいけど女を一人で帰らせ  
るわけにもいかねえだろ」

「．．．．．．」

なんだこいつ。いいこと言つてゐるつまつけど腹立つぞ?  
言われなくとも帰つてやるわー

手元にあつた湯のみを口に運んで一気に飲み干すと、苦さで一瞬  
むせそうになつた。でもこらえる。それからお茶を全部呑み込んで  
湯のみをダンシとテーブルに置くと、あたしは美智子さんと夏菜ち  
ゃんに向いた。

「お茶あつがとひ、美智子さん。会えてよかったです。……夏菜ちゃんも」

「いいのいいのー。また今度遊びに来てね」

「……馴れ馴れしく名前呼ばないでよ」

「…………」

夏菜ちゃんこと仲良くなろうとは思わない方がいいかも。

クルツと水無瀬に向き直ると水無瀬は既に玄関に向かっていた。あたしは美智子さんと夏菜ちゃんに小さく礼をしてからその後を追つた。一度も振り返らずに進んで行く水無瀬の後を追つてあたしは斎木家を後にした。

……それにしてもおかしな気分だ。お互い反発してるのになんで水無瀬に送られてるの？ あたし。いや、斎木家／水無瀬家のポリシーだからなんだけど。それでもなんだか変な気分だ。

やっぱ、こんな無言で歩いてても気がまずいだけだし、夏菜ちゃんのことでも訊くか。地雷踏みそりだけど。

「やつこえばあんたわあ、夏菜ちゃんの気持ち知つてんでしょう？」

案の定睨まれた。

「知ってるよ」

「……やつぱり……」

「むしろあの態度で気づかれない方が難しいだろ」

「だよねー。嫉妬心丸出しだったしねー」

「だから攻撃されるかもしけねえって言つただろ」

「つてか知つてんだつたら先に言つてよ！」

「なんて言つてほしかつたんだよ。『夏菜は嫉妬深いから気をつけろ』？『俺のことが好きだからお前と俺が話すのを見たら攻撃してくれるかもしないぞ』？ なんこと言つて、お前がはいそですかつて受け入れんのかよ」

「……」

ま、まあ確かにそんなこといきなり言われても多分あの状態のあたしだつたら『は？』で終わつただろうな。……言われなくとも『は？』で終わつてたし。いや、それでもちよつとくらい注意してくれてもよかつたような……。

再び沈黙に陥つて、今度は昨日言われたことを思い出して聞いてみた。

「そういえばあんたが、昨日知つてたら怖いとか言つてたじやん？あれなんのこと？」

「……姉貴のことだよ」

「……？ なんで美智子さん？」

「姉貴が藤ヶ丘の子を時々お茶に誘つてこの前言つててさ、その人物の説明がお前みたいだつたから気になつたんだよ。案の定お前

だつたけど」「

「…………」

「ああ。ん、じゃあ家についたか」「

「へ?」

「…………ほんとだ。いつの間にかついてる。ってかここいつなんであたしん家知つてんの?あれ?あたしが言つたのか?ヤバい。なんかいろいろありすぎて記憶が追いつかない。

「んじゃ、一度と姉貴のお茶の誘いには乗るなよ」

あたしが家に入る所で水無瀬が言い、驚いて振り向いた。既に水無瀬は歩き出していたからその後ろ姿に呼びかける。

「はー? なんで!」

「なんで家にいる時までお前と関わらないといけねえんだよ」「美智子さんが誘ってくれるんだから仕方がないでしょーが!」「だからそれに乗るなつつてんの。ただでさえ学校で会つてのうに家でも会いたくねえよ」「

「あなたの都合で決めんな——つー」

なんなのあの自分勝手な野郎は! あたしがあいつの秘密握つてんの分かつててそんなこと言つてるわけ!? つていうかここまでされても秘密ばりやないあたしつて優しすぎない!?

はあ、と溜息をついてから家に入ると、台所の方でお母さんとお父さんの声が聞こえる。さすがに喧嘩はしていないみたいだけど、声音だけで不機嫌なのが分かる。・・・あたしが出かけたことには気づいてたのかな？

ただいま、と咳いてから自分の部屋に戻ると、今日の出来事を思い返してみた。

・・・・ま、何はともあれ、忠実に送ってくれた水無瀬のことは、少し見直したかな。

## 嫉妬とライバル発言（後書き）

土口までは多分更新はありません。『ア承けださー』。

「」まで読んでくれてありがとうございます。

女おじなんのせ勝手だけ、なぜこいつへ。（前書き）

悪くなつた。

好きになるのは勝手だけど、なぜここ??

お母さんとお父さんがまた喧嘩してる。つてか最早日常茶飯事と化してるよね。本当に嫌になつて来る。二人とももちよつと大人になつてくれればいいのに。原因は聞いてないし聞きたくないけど、どうせまたくだらないことだ。お父さんがお母さんの食べ物に文句を言つた。お母さんがお父さんの態度に文句を言つた。お母さんがいらついていた。お父さんがいらついていた。

どんな小さな事だつて一人に取つたらすぐに大喧嘩に発展するような問題だ。

あたしは土日に家にいるのは嫌いだ。理由なんて、言つまでもない。

「もしもし稔?」

携帯を耳に当てながら部屋のドアを開くと、お母さんとお父さんの声がまだ聞こえる。いい加減にしてよ、本当に。稔の返答を待ちながら溜息をついてドアを閉めた。

『おっ、彩那！ よくぞ電話してくれた！』  
『つてかあんたが電話しろって言つてたんじゃない』  
『まあそつこいつだよね。んで用件なんだけどさ、勉強会しない?』

「…………はい？」

「え、ごめん。何？ 今なんだかあり得ない単語が稔の口から聞こえた気がするんだけど」

『勉強会よ。勉強会。勉強すんの。学年第一位の有賀彩那から勉強が教わりたいのよー』

「…………稔、酔つてんじゃないでしょーね」

『どうこう意味だよ』

ツツコミが入りました。

だつてそうでしょ。そう思つでしょ。稔から勉強会の誘い？ よりこみて宇宙一の面倒くさがりやの立原稔からの誘い？ とてもじゃないけど信じられるわけがない。

『ぶつちやけ宿題写さして欲しいだけなんだけど』

「だよねー！ やっぱりそうだよね！ 稔が勉強なんてしたいわけないもんねっ。そうだよね、ああよかつたー」

『…………それまで言つか？』

いやあもう心底驚いたよ。稔から勉強会の誘いを受けるなんて何が起じたのかと思つちゃった。ああほんとよかつた。

『とにかく家が嫌ならすぐにでも来てよね。明日提出の数学とか手

付けてないから』

「……手付けてないってあんた、プリント五枚だよ？ しかも先週もりつたやつじやん」

『あんたねー。私が本当に机に座つて真面目に数学のプリントやると思って思つてるわけ？』

「思つてないけどさ」

『即答かよ』

やがて穂との会話を終わらせながら、あたしは数学のプリントを溜息と共に鞄に詰めた。それから文房具、携帯、財布……は多分いらないだろ？ けど一応持つて行く。あとは……まあ特にないな。

普段持ち歩いてるもの適当に鞄に詰め込んでから部屋を出た。台所の方を見ると二人の言い争いは終わったみたいだけど、閉まつていぐドアからもいやーな空気が漂つて来る。  
……一応行き先だけ教えとこうかな。

台所に近づいてそろつとドアを開けると、お母さんがキッチンに立つていてお父さんはソファに座つてテレビを見ていた。ってかお昼も食べて今一時なのになんでお母さんキッチンに立つてんの？ 盤洗いか？

一人を一度見回してからお母さんの背中に呼びかける。

「お母さん」

「んー？」

振り向かず皿を洗いながらお母さんが答えた。

「ちょっと稔んちに行つて来るね」

「あら、どうして?」「

「…・稔曰く勉強会」

「稔ちゃんが勉強? 珍しいこともあるもんねー」

「だよねー。じゃあいってきます」

「いつてらっしゃい」

最後にこちらに振り返つてから小さく笑つたのであたしも一応笑い返した。それからお父さんにもいってきます、と言つと小さくだがいってらっしゃいと返つて来る。

・・・お互いに対してだけなんだよなあ、この一人が険悪になるのつて。あたし対しては大喧嘩したあとでも普通に接してくれるし。あたしに八つ当たりしたくないのか? してるけどね、時々無意識に。

稔の玄関に近づいた瞬間にドアが勢い良く開いたから驚いて目を見開いた。目の前に立っていた人物も同じく驚いて茶目を見開いた。立っていたのは稔のお兄ちゃんの、立原拓さん。あたし達より一歳しか違わないから普通にため口で話してゐるんだが、別にいいみたい。注意されたことも一度もないし。

漆黒の癖毛が普段よりも跳ねてる所を見ると、起きてから髪の手入れはしてないってことだよね。まあ男がちまたと鏡を見ながら髪を整えるのも気持ち悪いけど。

「彩那！ びくつたー。何やつてんの？」

「びくつたのは」つちだよ。あたしは稔と勉強会」

予想通り拓が眉を上げた。

「稔が勉強だと？」

「うん」

「冗談だろ」

「冗談だよ」

「…………」

一ツ二つと笑つたまま拓と言葉を交わす。

あたしの言葉に首を振りながら笑うと、拓はポンポンとあたしの頭を叩いた。

「んじゃ、よひじく頼むよ。ちよとくじこあいつに勉強する意思を叩き込んでくれ

「無理だと思つた」頑張る

「ねりむ

一カツと笑つて拓が歩いて行き、その後ろ姿を少しだけ眺めてから稔の家に入る。あたしを待っていたかの様に（いや実際そうなんだけ）稔の部屋に行き着くと稔のテーブルの上には既に五枚の数学のプリントが並べてあった。もちろん白紙。

あたしが部屋に入るや否や稔はぱあっと顔を輝かせてプリントを嬉しそうに差し出した。

．．．正直、この問題を学年五位の稔が出来ないとは思わない。つてことは面倒くさいだけってことか。

溜息と共に鞄を置いて、あたしは中からプリントを取り出した。ここまで来ると何を行つても稔は絶対に引き下がらない。あたしの宿題を「写すまでは絶対にね。

「はいはい。待つて。これで、五枚、つと

「やつた サンキュー 彩那」

「へいへい」

無言になつてプリントに答えを「写して」行く稔に溜息をついてから、あたしは自分の勉強を取り出した。勉強ついていつても宿題はもう全部終わらしてくるから予習なんだけど。

「ああ、そうだ」

一枚目プリントを始めた所で稔が顔を上げずに声を上げたので、あたしは教科書から顔を上げた。一問目を終わらした所でビシッとあたしの顔にシャーペンを突きつけて来る。

．．．何？

「ズバリ答えてね  
「何をだし」

「水無瀬君と付き合ってるの？」

ボキッ、とシャーペンの先の芯が折れた。あまりの威力に芯が宙を舞つて稔のプリントの上に落ちた。  
あたしの反応を見た稔がパチパチと瞬きを繰り返す。

「え、図星?  
「んなわけねえだろーがつ！…！」

なんであたしが水無瀬と付き合わないといけないのよ！？ どこのからそんな推察が出て来たわけ！？ 信じられない！ しかもよりもよつて稔！？ 稔に聞かれたんだけどあたし！！ 水無瀬に興味ないって知つてその発言をするのあんたは！？

わなわなと肩を震わせるあたしを見て、さすがに地雷を踏んだと思いついた稔が慌てて取り繕つた。

「い、いや！ 別に私がそう思つたわけじゃなくー」  
「．．．じゃあ誰？」  
「え、えと、み、美里」

。 . . . . . . . . . . .

なんですか？

予想外の人物の名前に怒りがしづまつしていく。  
美里ちゃん？ なんでそこで美里ちゃんの名前が出てくるのかが  
さっぱり分からんんだけど、穂の様子からして本当なんだらうな。  
え、でもなんで美里ちゃん？

「ちよっと待つてよ。なんでそこで美里ちゃんの名前が出てくんの？」

「 . . 付き合つてないのね？」

「んなわけないつていつただろうが」

「いや、だから確認だつて！ いや、そのね？ 彩那と水無瀬君が  
付き合つてなければ言つていつて言われたんだけど、美里つて水  
無瀬君のこと好きなんだよ」

沈黙。

「 . . . . . . . . . なるほど」

そういうことね。所謂『嫉妬』つてところか。

いやでも待てよ？ あたしつて別に今まで通りに水無瀬と過ぐし  
てるはずだし、あたしと水無瀬が付き合ってるかもしれないなんて  
いう疑惑は、ずいぶん前からあつたってこと？

でもあたしが知ってる限りでは、とてもじゃないけど付き合って  
いるカツプルのような振る舞いは一切したことがないはず。 . . .  
何がどうなつてそんな結論にたどり着いたんだろう。

「 . . . なるほどねえ」

再び眩くと稔がそうなんだよ、と頷いた。

「いや、でも、あたしと水無瀬、君が付き合つてるなんて、普通に  
考えてあり得なくない？ 今までそんな素振りしたことはないはず  
なんだけど」

ヤバい。危うく水無瀬を呼び捨てにする所だった。  
あたしの質問に稔は少し困ったような表情を浮かべた。

「いやあね？ 私もそう思つたから、何がどうなつたら彩那と水無  
瀬君が付き合つことになるの？ って聞いたんだよ」

グッジョブ稔。

「そしたら、金曜日？ だつたのかな。駅の前で彩那と水無瀬君が  
話してゐるを見たつて言つてたわけよ」

……駅の、前……

あつ。あつ！あれか！ 稔と別れた後に待ち伏せされていた時のことか！

うわー……。よりによつてあんなタイミングを見られたのか……。つてか水無瀬が美里ちゃんに気がつかなかつたつてことは、そこまであたしが美智子さんと知り合つたら怖いつて思つてつてこと？

……地味にムカつくな。

「ああ……。確かに駅の前でバッタリと会つたから少し話をしたけど……。どうしてそれで付き合つてるつて思つわけ？」

「最初はそう思わなかつたらしいのよ。でも、昨日彩那に会つた後に、商店街に行つたらしいの。そしたら彩那が水無瀬君と一緒にいるのを見たつて言つてたから、それで疑問が浮かんだらしいよ」

「……」

しくつた。まさか水無瀬に送られてゐる所を誰かに見られるとは……。ヤバい。バカラ彩那。いくら午後でこの周辺にうちの学校の子達があんまり住んでないからつて、なんで美里ちゃんのことば思い浮かばなかつたんだろう……。すぐ近所なのに……。膝をついてガクツとうなだれたい氣分だ。

「で？ さうなの？」

「……まあ、そりなんだだけだ」

「マジで！？ ジやあやつぱ付き合つてんのー？」

「違つて言つてるでしょ！… 何回言えれば分かつてくれるんだよ！」

「……」

「だつてそれつてつまつどつかから送つて貰つてたつてことでしょ！？ それで付き合つてないと思わせる方が無理だよ！ 親友としてショックだよ！ そんなことが起こつてたのに知らなかつたなんて！」

「いい加減にしないと私の口縫い付けるよ稔ーー！」

息を切らして怒鳴りつけと稔はケラケラと愉快そうに笑い声を上げた。

こいつ絶対いつか思い知らせいやる。

「冗談だつて！ でもなんで一緒にいたのさ」

「あのね？ これには深いわけがあつて、つてか絶対美里ちゃんには言わないでよ」

「分かつてゐつて！」

「・・・水無瀬君つてお姉ちゃんがいるんだけど、あたしとそのお姉ちゃんが結構仲いいわけ。それで昨日お茶を飲みにいつたらバッタリ水無瀬君と会つてね？ 午後まで居座つてたから水無瀬君が送つてくれたの」

「じぶんと省いちやつたけどいいよね。夏菜ちゃんのこととか夏菜ちゃんのこととか夏菜ちゃんのこととか。

と、あたしの言葉に稔は頬杖をつきながらふーん、と口にした。

「なーんだ。つまんないの。もつと深い面白い理由があるのかと思つた

「面白い理由があつたらよかつたつて」と dijo? とにかく早く

プリント終わらしてよ。あなたのせいで予習が進まない

「へいへい。すみませんねえガリ勉さん」

「本当にその口縫い付けるよ?」

「あ、そういうえばさ」

華麗に無視したな」のやうひ。

「水無瀬君のことが好きな子って多いから、気をつけなよ?」

「…注意されなくとも分かってるつもりだよ。」

「あ、とあたしは深く溜息をついた。」

人間というものは、何かに気づき始めると、どんな時でもそのことが目に入ってしまうものだ。たとえば、カーテンについた模様とか、友達の背中のシャツにくつついてる糸とか、あたしの場合は友達の好きな人へ向ける視線とか。

美里ちゃんが水無瀬のことを好きなのは一目瞭然だった。むしろよく今まで気づかなかつたな、と自分に言ってやりたいくらいだ。理科が嫌いな美里ちゃんが浮き足立つて理科室に移動して、実験中

も一生懸命水無瀬に話しかけて、話しかけられると田中が少しだけ輝いて、頬がほんのりと赤に染まる。

可愛いなもー。いや、本当にどうして今まで気がつかなかつたんだろひ、あたし。

美里ちゃんと仲はいいけど、実際好きな人の話とかしたことはほとんどない。だから好きな人がいたとしても見当もついてなかつたし、美里ちゃんもあたしに対しては同じだ。だからこそ、あたしが水無瀬と付き合つてるかもしれないと思つた時に、あたしに聞くことができなかつたのだ。

・・・複雑だなあ、乙女心。

付き合つてはいないものの、つていつかお互いに対して好印象を抱いてすらいないけど、美里ちゃんがいる前で水無瀬と仲良く話すのもなんだか気が引けて、出来るだけ水無瀬と会話をしないようにした。あたしの妙な態度の意味は理解していたのかしていなかつたのかはよく分からなかつたけど水無瀬の方もあたしと会話をしようとはしていなかつた。

チラリと美里ちゃんを何回か盗み見るとそれはもう至極嬉しそうな表情だつた。

・・・・いや、マジでどうして今まで気がつかなかつた？　あたし・・・。

「有賀、これよろしく」

隣から呼ばれてはつと右に顔を向けると、富谷がスタンンドを持つてあたしを見てる。  
え、これよろしくって、どうこうことですか富谷君。

「 . . . . ん、何が?」

「調整して」

「なんでスタンドが一つあんの?」

「こっちの方が早く進むかと思って」

「いや、そりゃそうだけど、同じスタンドでやつた方が長さとかい  
ちいち変えなくていいからこのままよくない?」

「 . . . そうかあ?」

「すぐ終わらせたいからって楽しそうとすんな」

手にあつた紙を丸めてペイツと富谷の頭を叩くと、チツ、わああ  
つたよ、と言いながらスタンドを戻しに行く。その後ろ姿を頭を振  
りながら見送る。富谷つて、変な所で抜けてるよね。

美里ちゃんと水無瀬が続けていい実験に視線を戻すと、美里ちゃ  
んが一生懸命メモリを記録していくけど、水無瀬がじつとこっちを  
見ていた。驚いて目を見開くと、呆れような表情をしてから実験に  
視線を戻す。

・・・なんだ今の失礼すぎる視線は・・・。

そういうえば、水無瀬が誰に『絶対に家に入れんなよー』って言つ

てたかは分かつたけど、その絶対に家に入れてほしくない人って、誰だ？ 夏菜ちゃんではないと思うし、美智子さんに言ってたんだから一人の知り合いつてことだし . . . 。

わからん。

現在掃除の時間。ゴミ箱を裏庭まで運んでいてそんなことを考えていると、噂をすればなんとやら。

同じく「ゴミ捨て当番だつたらしい水無瀬とバッタリ出くわした。  
. . なんどよりによつて周りに人がいない時に会つかね、あたし達は。

「 . . . . .  
「 . . . . .  
「 . . . . .  
「 . . . . .  
「 . . . . .  
「 . . . . .

なんだこの沈黙。

「 . . . . あの、退いてくれない？」

あんたのせいで巨大ゴミ箱に近づけないんだけど。  
てつきりそのまま居座ると思ってたのに以外と素直に退いたので少し驚いてからあたしの持つてるゴミ箱を巨大ゴミ箱の中に入れた。だけどその間もずっと背中に視線を感じていたからいらついて勢い良く振り向いた。

「何？」

「別に」

「…………」「.

「ロス。こいつ絶対にいつか殺してやる。

「なんか用があるんだつたらちやんと~」

「お前さ、なんで急に狭川に気遣つてるわけ?」

「…………」「..」

やつぱりあたしの行動は完璧バレてましたか。やつだよねえ。当たり前といえば当たり前だよねえ。認めたくはないけどこいつって洞察力はすっごいもん。

何の事? つてとぼけても無理だと分かつてたから、溜息混じりに捨て終わったゴミ箱を抱えた。

「……別に。変な勘違いされたからそれをちやんと証明しておこうと思って」

「変な勘違い?」

「駅前で話をしていた時と、土曜日あんたがあたしを送つてる所、見られたの」

「…………」「..」

納得した声出したぞこいつ。

「 . . .え、ちよ、まさか美里ちゃんがいるの知つて . . . ？」  
「誰かがいるのに気づかないほど落ちぶれてねえよ」

「 . . . それはあたしが落ちぶれてるってことかよオラ。

「え。いや、ちょっと待つてよ。美里ちゃんがいるのを知つた上で  
あたしと話をしたりあたしを送つたりしたってこと？」

「え、でもあんた美里ちゃんの気持ち知らないわけじゃないでしょ

「よー！」

「まあな」

やつぱり . . . ! あたしが気づいて（まあ總に言われて気づい  
たんだけど）水無瀬が気づかないはずがなかつた . . . !

「知つててあたしと話したり送つたりしたわけ！？」

「当たり前だろ。たかが一人の勘違いが怖くて行動なんてできるか  
よつての」

「そういうことじやないじゃん！ 美里ちゃんがそのせいぞれだ  
け悩んだのか知らないあんたじやないでしょ！」

「知つたこつちゃねえつづつてんだよ。そもそも気持ちに答える気  
はさらさらないんだからあいつが勘違いしたつてどつもしねえよ」

「 . . . つー」

「…………なんですか？」

「…………知ったこいつちゃんねえよって言つた？」「こいつ。勘違いしちつてどいつもしねえよって言つた？」「こいつ。

「…………あんなに、あんなに水無瀬のこと好きでいてる美里ちゃんに、勘違いしたつてどいつもしねえ、って言つた？」

「ふつざけんな！！　あんたそんのが許されると思つてんの……？」

「誰の許しがいるってんだよー。」

あたしが爆発すると、水無瀬も叫び返したから一瞬言葉が詰まってしまった。

「美里ちゃんがあんたのこと好きなの知つて、あたし達が一緒にいるのを見たらどう思うかくらい知つて、それでどうもしねえ！？　やめてよ！　いい加減にしてよ！　あたしのことを踏みにじつた上に美里ちゃんの気持ちまで踏みにじるのは止めてよー。」

「じゃあどうして欲しいつづーんだよー。俺に告白しようとか！？　俺に狭川と付き合えってか！？　はじめから希望させずに興味がねえって示した方が、あいつも諦めがつくだろー。」

「優しさのつもり！？　それで優しくしてるつもりなの！？　だったらやめてよ！　美里ちゃんはね、どれだけ諦めた方がいいって示されたつて諦めたりはしない！　そんなの、そんなの分かつてないでしょ！」

「分かつてるからやつてんだ！　お前の問題でもねえくせに口出す

んじやねえよ！」

「美里ちゃんはあたしの友達なの！！ あたしのせいで悩んだんだつたら、あたしが美里ちゃんのために怒るのは当たり前でしょ！？」  
「てめえには関係ねえんだよ！」

吐き捨てて「コミ箱を片手に抱えたまま水無瀬が立ち去りつとする。  
だけどそれ以上進む前に一步踏み出して、あたしは水無瀬の腕を  
掴んだ。

「話はまだ終わってない……」

「俺のは終わったんだよ」

「あたしのは終わってないって言ひてんの！」

「お前しつこい！ これ以上話すことはないだろ？ 」

再び水無瀬がいらだちを露にしたけど、これだけはさがるわけにはいかない。わざと美里ちゃんを傷つけて、自覚してるくせに、飄々としやがつて！

「あるから引き止めて？」

ガツとものすごい勢いで腕を掴まれたと思うと、ダンシと壁に押し付けられた。「コミ箱が音を立てて地面に転がり落ちたけど、あたしも水無瀬も微動だにしない。

はつ、と驚いてあたしが息を吸つて、力を込めたままあたしの腕を壁に押し付けた水無瀬はゆっくりと言葉を紡いだ。

「お前には関係ないから引っ込んでろって言つてんだよ。話はもう終わつたから黙つてろ」

「……っ、どうして！ どうしてそんなに冷たくいられるの…」

「……どうでもいいだろ。もう黙れよ」

「どうでもよくない！ 美里ちゃんは？！」

柔らかい何かが唇に当たつた。壁に押し付けられたまま、一瞬頭の中が真っ白になつたけど、水無瀬の唇とあたしの唇が当たつているのを自覚してあたしは大きく目を見開いてからすぐに腕に力を込めた。だけど、力を込めた瞬間に水無瀬がより強くあたしを押さえつけて、キスも激しさを増した。

目を見開いたまま水無瀬を見ていると、そろつと水無瀬の瞼が上がつた。あたしが見つめていることに対しても驚きは一切みせず、止めてほしいって訴えかけようとして開けた口に、濡れた感触が入つて来て身体が強ばつた。

な、にを、するの、こいつ！ 好きでもない女とそんなにキスがしたいのかよ！…

「……ん、ちよつ、んつ、くつ…… やめつ、で！」

押さえられていらない右手で水無瀬の胸板を押してもびくともしない。それどころか、抵抗をしようとするほどキスが激しくなつていくだけだ。

水無瀬の舌があたしの舌を絡めとろつとした瞬間に水無瀬の舌をガツと噛んだ。瞬時に水無瀬の動きが止まって、視線を外さずにい

た瞳が少し開いてから舌が抜けて行つた。腕にこめられた力も弱くなつたのであたしは瞬時に身を引いた。

荒く息を繰り返しながらも口の中にかすかに血の味がして、それだけ強く噛んだのかと思つて水無瀬を見上げた。予想通り痛みに顔を歪めながら水無瀬は口を押されて、座り込んでしまつたあたしを睨みつけた。

睨みつけたいのはこいつちだよ…………つー！

「何、すんのよつーーー！」

「……黙つてろつて言つたのに黙らねえからだ」

じつと冷たい目で水無瀬を見つめているあたしを見てから、水無瀬は無言で立ち去つていつた。

今度は、引き止めなかつた。

好きになるのは勝手だけ、なにこいつへ。（後書き）

遅れてしまつてすみません。」

一応毎日ボチボチ書いてたんですけど、なにせインターネットに接続できる時間があまりないものですから。。。

遅れてしまつてすみませんでした。」

1月まで読んでもくれてありがとひげこますへへ

険悪な雰囲気ついていたのう」と?

泣きたい気分だ。というよりも泣きながら怒りたい気分だ。大声を張り上げて涙を流しながら意味分かんない事を口走つて爆発したい気分だ。

## 結論：氣分は最悪。

それもこれも全て水無瀬のせいだ。言うまでもないかもしれないけど水無瀬のせいだ。というか元々あたしがこんなにも精神不安定になりはじめたのも水無瀬のせいなんだよ。

木 . . . . 。 しかも | 回りじめめう | 回も、そ、ヰ . . K I . . . .

だめだ。言つてしまつたらまた爆発する気がする。  
落ち着いて深呼吸しよう。

四庫全書

「落ち着けるかボケえええええええ！」

「あげええ！？」

ちやぶ台をひっくり返す勢いで立ち上がると、稔が驚いて奇声をあげた。

現在午後五時。学校の校舎。つてか教室。陸上部である稔のこと  
を待つために教室に居座つていた所、何かを取りに戻つて来たらし

「ホンッ、と咳払いをしてから書いていたノートに視線を戻した。  
じつと穂があたしを見つめている。

「 . . . 彩那さあ . . . 」

「え？」

「なんだか最近、ぶつ壊れること多くなつてない？」

「 . . . . . 」

え、何その超失礼な発言。確かに最近壊れてるかもしれないけど  
だからってそんな单刀直入に聞くか？なんていうの。プライバシ  
ーっていうか気遣いつていうのが一切ないよね。

しかもあたしにたいしてだけ。そういう性格だから分かるといえば  
分かるけど。

「ストレスが溜まつてんの」

「 . . . 何からの？」

「 . . . . んー . . . 人生？」

「おもつ！…」

人生つていうか、なんていうの？ 精神不安定＝人生全て嫌だ。  
みたいな感じになんねえ？

とブツブツ言うと、穂が眉を上げた。

「…あんた相当病んでるね」

「そうだね。」  
「そうかもねー」

—  
• • • • • • • •

「……あのね、」  
「私は部活戻つていいよ。あたしは！」と勉強してゐるから

「ん？」

升ひ隠り自殺とかしたしてね

卷之三

「冗談。そんな」としないから

今、その声で「冗談とか言われてもおもひんなしか」と云ふ。」

そこまで病んでないっての。そもそも病んでないし。つてか病んでるように見えるなら多分この短期間だけだろうし。

人には人のプライバシーがあるつてちゃんと気遣いできる子だからいいんだよね。いや、気遣いとはまた全然違う部類かな。どっちかっていうと人の問題に首突っ込んで面倒ごとなつたら嫌だからっていう理由だね。

稔すぎる理由で逆に安心するよ。

カリカリとノートにシャーペンを滑らせるといつが心配げにあたしを見つめてから教室を後にする。さつきの紙切れは多分記録を書き込むための紙だからそろそろ部活が終わるってことかな。

ふう、と勉強に一段落つけてから、気分転換に校庭に視線を移した。今の時間帯で部活をやっているのは陸上部だけだ。ああ見えて

も稔は三番田に足の速い女子で、陸上部の中ではまだ一年生なのにと大いに期待されている。

かつこいいねえ。

そこでふと小さく歓声が上がったのを聞いて、その方向に視線を移した。

それからひくつと口元が引きつった。

陸上部の部員達に背中を叩かれて、丁度走り終わっていた水無瀬は荒く息をしながらも爽やかな笑顔を浮かべていた。

ああその爽やかな笑顔をぶん殴つてやりたい。

．．．．．そういうえば水無瀬は陸上部のエースだつたんだつけ。二年生のくせに。

嫌いであるあたしでもかつこいいと認めるあの顔に超頭もいい。おまけに運動神経も抜群つてどういうことなの。神様、不公平すぎるでしょさすがに。

そのままじとーっと水無瀬の方向に視線を向けていると、全員から離れた水無瀬がふとこちらを見上げた。まるであたしがそこにいることを分かっていたかのようだ。

そこで窓から顔を覗かせているあたしを見つけて、見事に視線が合つた。綺麗な瞳と目が合つて思わずうつと息が詰まった。水無瀬も目を見開いたが、あたしから目を逸らしはしなかつた。まるで水無瀬もあたしと同じ様に息を詰まらせているかのように見えた。つてまあそんなことはないと思うけど。そもそもなぜあたしを見て目を詰まらせるのかも分からんし。

しばらくそのまま見つめ合つてから先程のことを思い出してあたしはふいっと稔の方に視線を滑らせた。水無瀬のことを見ないようになっていたけれど、まだ見られている気がしてどうも落ち着かない

気分だつた。

あたしと水無瀬の間が険悪な雰囲気になつてゐるのに一番に気づいたのは稔だつた。さすがといえばさすがかな。つてか昨日の掃除から帰つて來た時からあたしの気分が最悪だつたのには気づいてるつぽかつたけど。

日頃から特に水無瀬と良く話してゐるわけでも仲がいいわけでもないのにあたし達の雰囲気がよくないのに気づいたのはやつぱりさすがだ。以外と洞察力に優れている稔にはいつもながらも賞賛するよ。

「何かあつたの？」

水無瀬と一切話さなくなつてから三日が過ぎた頃、稔が聞いてきた。あたし自身もそろそろ来るだらうなと構えてはいたからとくに驚いたりはしなかつたけど、それでも気づけた稔には驚いた。

「何か、つて何が？」

「いやあ、私の気のせいかもしれないんだけど、なんだかあんたと水無瀬君の間に嫌な雰囲気が漂ってる気がするんだよね。違う?」  
「…………いや、別に…………そういうわけでは……」

理由 자체は多分聞いてこないとは思つんだけじ、だからと言つてはつきり告げるのもなんとなく気が引けた。

とはいつたものの口籠つてしまつたあたしに対して穂が眉を上げた。だけどあたしの気持ちを察してか穂はふーん、と興味無さげに呟いた。

じついう時に親友が穂でよかつたと思う。洞察力がいいつていうのもちやんと分かってくれるからいいし。これが美里ちゃんとかだったら困る。なぜかって? 美里ちゃんは絶対に理由を知りたがるだろうから。水無瀬のことが好きとか嫌いとかは抜きにして、いろいろ知りたい子なんだよね。

「でも嫌な雰囲気つて……何がどうなつてその結論にたどり着いたのよ」

「え? いや、なんか最近まで一人とも仲よさげな感じだつたんだけど?」

「……仲よさげ?」

「あ、いやー、だからその、お互いの領域に干渉しないけど、干渉して欲しくないことをお互い分かつてる様な?」

「…………」

「なんていうの。理解しあつてるみたいな?」

「…………」

「そ、それが最近なんていうか干渉できるけど絶対しねえもう関わらねえみたいな雰囲気に、な、つてる、気、が……」

無言になつてただ穂を見つめるあたしに穂の声がだんだん小さくなつて行く。

いや、あたしとしてはその観察力にびっくりだよ。あんた本当はあたしと水無瀬の間に何があつたのかとか密かに知つてたりするんじゃないでしょうね。

何も言わないあたしに穂は眉を上げたまましばらく見つめてたけど、あたしが何かをいう気配がないからか穂は諦めた様な溜息をついてから席についた。

ふと顔を上げると、丁度教室に入つて来た水無瀬と見事に視線が合つて瞬時に顔をしかめた。そんなあたしの表情を水無瀬はバカにしたような視線を向けてからふんっ、と鼻で笑つた。

・・・・・あいつ、人の事をバカにする度に鼻で笑いやがるよな。

ふんっ、とあたしがそっぽを向く。でも水無瀬の席はあたしの斜め前だから嫌でも見えてしまうんだけど。わざとでもいう音を立てて席につく水無瀬を睨みつけていると、隣にいる穂の視線があたしに注いでいるのが分かつた。

そういうえば、あまり考えたこともなかつたけど、この三日間あたしが水無瀬と徹底的に話さないようにしてるのは明らかだけど、水無瀬の方も何かとあたしと接触を図つて来る様子は一切ない。

それはあたしの心中を察しているからなのか、単にあいつもあたしとは話をしたくないからなのかなよく分からなかつたけど、とにかくあの一件以来水無瀬とあたしがお互いから声をかけようとしたこともなれば、そもそも眼中に入れないとつとめていた。元々よく話す仲でもなかつたから違和感がする人は穂以外にはいない

ようだつたし、一緒にクラスもそこまで同じといふわけでもない。

ただ問題なのは、次の時間が理科、物理ということだ。

昼食を食べ終わつて一足早く理科室に移動したあたしと稔は、あたし達の他に理科室にいる人達を見回していた。やはり美里ちゃんは既に班の席に座つていて、あたしと稔を見つけるとニッコリと笑つた。

あたしがニッコリと笑い返すと、稔も小さく笑つてからあたしの裾を摑んだ。

「え、ちょ、何よ」

「……あんたと水無瀬君の間の空気がいやーになつてる」と、美里、気づいてないの？」

「……んー。気づいてないっぽい。大体、同じ班だからつよく話してゐわけでもないから、気づかない人は気づかないんじゃないの？」 稔は鋭すぎるんだよ

「まあそこは否定しないけどさー」

「しないのかよ」

「あんたらの間で何が起こつたかなんて知らないけど、美里の前では氣をつけなよ？ 可愛い顔してすっげー嫉妬深いんだから」

「……分かつてゐけど。つてか氣をつけるつたつて何も話してないじゃん」

「そうじゃなくてさあ。あんたと水無瀬君の間に何か秘密みたいなものがあるつて気づかれたら、もう終わりだべ？ 何の事か知るまで絶つつつつつつつつつ對に詮索し続けるから」

「…………」

まあ、あたしだつて美里ちゃんの嫉妬心に気づいてないわけじゃ

ない。これまでだつてあたしと水無瀬が一人で実験の話をしていると、必ず美里ちゃんがなになにー？ という感じで割り込んで来る。その割り込みがあまりにも自然だつたから今まで気づいてなかつたんだけど、稔に言われてからは、その行動は美里ちゃんがあたし達の邪魔をするためのものだといつのに気づいた。

稔の言葉に肝に銘じておくよ、と言い残すと、人が集まりはじめた理科室の中でそれぞれ席についた。最後に稔が心配そうにあたしに視線を投げたけど、あたしは美里ちゃんという秘密探し探知機をなんとか回避しないといけない任務が待つていてるから構つてはいられない。

あたしが席につくや否や美里ちゃんの顔が僅かに輝いて、理科室のドアが開いて水無瀬が入つて來た。それからすぐに視線があたし達の班に向いて、美里ちゃんと富谷を撫でてからあたしに止まつた。すぐにあたしが視線をはずして、水無瀬はあたしの前に腰を降ろした。あたし達の班はテーブルを挟んで一列に人が並んでるから、同じ班の人は向かい合つているような形式になる。

「今日もまた同じ実験？」  
「ううん。今日からは変わるつて」  
「マジで？ 何に？」  
「ビー玉の速度を測るとかなんとか・・・」  
「・・・ああ・・・」

水無瀬と会話が出来て嬉しそうな美里ちゃんが可愛いつたらありやしない。好きな人と話が出来てそんなにも嬉しいものなのかなえ・・・。

水無瀬がなんとなく納得したような声を出してから黒板に視線を向けたので、あたし達も視線を向けると確かに黒板にはビー玉の速度と書かれてある。ってかそれだけかよ。

ザワザワと話をしているとチャイムの音が鳴り響き、先生も教室の中に入つて来たので徐々に音が小さくなつて行く。先生が教卓に立つて静かになつたあたし達を見回してから黒板をバンバンと叩いた。その指は『ビー玉』の下をなぞつた。

「これ読めるひとー」

しーん。

「誰も読めないのかよつ」

「はいはい先生！俺読めるー！」

生徒達の中でムードメーカーの宮谷君が手を挙げた。最早お約束の展開としか言えないよね。

「はい宮谷君」  
「びーきょくー」  
「非常に惜しいー」  
「先生をつとと説明してー」  
「よしきた。この読み方はびーだまだ」  
「読み方なんて聞いてねえよ」  
「酷いよ遠田君！ それが先生への扱いですか！」

「そんな馬鹿げた」としゃべてる暇があるんなら今田やる実験の説明してくれよ！」

「だからこの読み方から勉強しないといけないでしょ！？」

「マジでいい加減にしろよ先生！」

んー。相変わらず先生の扱いが酷い。まあ先生もああいつ性格だから分かるつちゃ分かるんだけど。みんながケラケラ笑いながらあたしも小さく微笑を零すと、田の前にいる水無瀬も呆れた様に笑つたのが見えた。

なんであんたはあたしかり見える位置にこいつもこるんだひつね、まつたく。

遠田から罵倒された先生はなんとなく寂しそうにしながらも説明を始めた。

「えー、実験は至つて簡単でーす。式をあげるからそんでもうやさしくさやらを当てはめて解いてねー」

「何を？」

「ビー玉の速度」

「どいの？」

「えー？ 一定の傾きのある板の上の速度測定器の間の瞬間に決まってんじやん」

「いつ決まったのー？」

「今」

「今かよー。」

もしかしたら明美先生とうちのクラスで漫才が繰り広げられるか

あけみ

もしけないと思つて來たよ、あたし。

「何回か説明したことがあるから実験道具しかあげないぞー」「いつ説明したのー?」

「何週間か前に、こんなやるよー。って言つたじやないー。」

「それだけでやれつていつのー?」

「当然よー」

「先生の鬼ー!」

確かにすつごい鬼だよ、先生。あたしはいつも予習してゐるから何をやるかは大体見当がつくし、式をくれたら格段に簡単になるからそれはそれでありがたいんだけど。。。。実験道具だけつて、説明は何もなし?

みんなが抗議の声をあげたけど、先生はそれを完全に無視をすると準備室に入つて小道具をいろいろ持ち出して來た。速度測定器はあたし達の後ろにある棚に閉まつてあるから、素早く一番新しいのを一つ掴んでから、ブーブー言いながらも実験道具を集めに行くみんなの中に交じつた。

実験道具を全部集めた結果、目の前にあつたのは、台、板、ビーエ、速度測定器が二つ、定規。以上五つ。

。。。これだけで全員に実験を求めるのは酷すぎるでしょーよ、先生。

「。。。有賀さん」

その声に眉間にしわが寄つたけど、それをなくしてから顔をあげると、水無瀬が板を台に立てかけてからあたしを見た。

「Jの実験の仕方、分かるよね?」

「……応予習はしてある」

「さすが」

ふわっ、と優しい水無瀬君の笑顔を浮かべたからつられて笑顔を浮かべる所だつたけど寸での所で押し留まる。

つてか、分かる『よね?』って聞いたつてことは、水無瀬も知つてるつてことだよな。当然。つてか知つてなかつたら困る。あたしだけができる自信はない。

つてか知つてなかつたらキレるよ?

「水無瀬君も当然予習してあるよね?」

「先生が説明した時にちゃんと聞いてたからね」

「それこそさすが」

お互に笑顔を振りまいて話をしていると（実際は絶対に心の中で毒舌な会話をしていたけど）、まったくなんのことが分かつていな美里ちゃんと富谷君が明らかにほつとしたような表情をした。二人ともまったく分かつてないつて顔だね今。

「ああも「J」ついでう時に水無瀬君と彩那と同じ班でよかつたつて思うよねー」

「思つ思つ。俺と狭川だけだったら絶対に無理だつたよ  
「だよねつ」

あたしと水無瀬がそんな一人に苦笑を浮かべると、あたし達は実験を開始した。

一十分経つた頃に実験が終わっていたのはあたし達の班だけだった。といつても殆どあたしと水無瀬の協同作業で、美里ちゃんと宮谷君はただ黙つてみていただけなんだけど。

実験のデータを全部集めた所で、あたし達は式に取りかかった。つて言つても宮谷君が水無瀬の紙を覗き込んで美里ちゃんがあたしの紙を覗き込んでるだけなんだけど。

「先生のくれた式は $V^2 - V_0^2 = 2ax$ であつてるよね」

「うん。七センチの加速度から計算するよね」

「うん」

「んーと、」

一人で黙り込んでからシャーペンを紙の上に滑らせる。今の時間だけは水無瀬の助けがいるから睨みつけたい衝動は抑えることにしている。データを集めてる間も水無瀬の手伝いがなかつたら終わつてしまふ。

計算が終わって、あたしは水無瀬に声をかけた。

「0・46の一乗引く0・2の一乗だから、0・1716になつた？」

「なつたなつた。0・17まででいいよね」

「いいと思つ。四十五センチの方は1・62になつた？」

「なつた」

「多分合つてゐるよね」

「これでいいと思つよ、俺も」

よし、と一人してシャーペンを置くと、富谷君と美里ちゃんがせつせと同じことを自分達の紙の上に書き始めた。

ああ、なんであたしこんなに平和に水無瀬と会話してゐるわけ。

「はえーーーーー。一人ともすこすき。何の話してゐるのか全然分かんないよ、ねつ、富谷君」

「うん、全然分かんねえ。俺とお前だけだったら絶対最後まで残つてたぞ、狭川」

「だねつ」

笑いながらあたしが美里ちゃんの紙を眺めていると、前にいる水無瀬があたしを見てゐる気がしたから顔をあげた。案の定見られていた。．．．つてか何なの？ この何日間ずっと田代が合つてんだけど。

「何？ 水無瀬君」

訳：『何見てんだよ、水無瀬』

「え？ なんでもないよ。有賀さん、最近元気ないんじゃないのかと思つて」

訳：『見てるわけじゃねえよ意識過剰が。俺のこと避けまくってなくせにしつかり俺のこと見てるじゃねえか』

「何言つてんの？ 普通に元気だよ。水無瀬君こそ最近なんだか浮かない顔してるような気がするんだけど氣のせい？」

訳：『てめえ何言つてんだよあん？ あんた、しつかりと自分の行動くらい後悔してんでしょうな』

「そんなこと絶対ないよ？ 僕普通に元気だし」

訳：『はっ、後悔なんてしてるわけねえだろ。今すぐ機嫌いいし』

「そつかー」「うん。心配しなくていいよ」

「なんだか水無瀬君らいしくない気がしてたからや」

「そうかな？　俺はこの上ないほど普通だよ？」

「そりやよかつたー」

ああ、ここいつ殴りたいなあ。

## 険悪な雰囲気ついてひじょうどい？（後編）

微妙なところで区切っちゃったかな . . . 。

次話投稿は明日か来週になります。多分来週になるかな . . . 。

いいまで読んでくれてありがとうございます。

## 恋は本当に大変なものだ。 (前書き)

お久しぶりで「やむ」います。いろいろあって長い間投稿できなくてすみませんでした。○。□

お詫びといつてはなんですが、明日も投稿するつもりでいます。

少し長めです。

恋は本当に大変なものだ。

結局この実験に成功したのはあたし達の班以外には一班しかいなく、それも学年三位の神楽さんの班と、稔と遠田の班。まあ、つまりは学年トップファイブの班だ。当然といえば当然か。そういえばトップファイブって全員物理取つてんだな・・・。

つてか三班しかできないから明美先生にはじつびどく怒られた。いやいや、元はといえば貴方のせいでしょーに。

「それにしてもうちには遠田がいてくれたから助かったよー。いくら式くれたといつても遠田がいなかつたら絶対出来なかつたなあ」「だから予習しどきなさいつて言つたじやない」

現在放課後。またもや稔の部活が終わるまで待つている所を、休憩中の稔が教室に入つて来て会話をはじめた。  
あたしの冷静な言葉に稔が頬を膨らませた。

「どつかの天才二人と違つて私は予習しても分からぬことが多いのつ」

「・・・天才はあいつよ。あたしは予習をしつかりやつたから出来ただけ」

水無瀬を会話に引っ張りだした稔に少し機嫌悪そつに言つと、じつと彼女がこちらを見た。

「 . . . 何？」

若干睨みつけながら言つと稔が慌てて両手を前にかざした。  
別に殴るわけじゃないからそういう反応やめてよ。傷つくじゃな  
い。

「いや、水無瀬君と喧嘩しても天才なのは認めるんだなあ、って思  
つただけ」

「別に喧嘩したわけじゃないよ。それに、天才なのは誰だつて否定  
できないことでしょ？」

「まあ . . . そうだねえ。彩那は学年一位なのに全然追いつかない  
しね」

「 . . . . . 」

「あ、いや、う、うそ！ 嘘！ 「めんなさい地雷踏みました何も  
言つてしません！」

ほんとにもう。

水無瀬のせいですつとムカムカしてるんだよ、あたしは。だから  
といつて本人に毒を吐けるわけじゃないし、ストレス発散も出来な  
いし。

ああもう！－この胸の中のムカムカは誰にぶつければいいのよ

！ 実験が成功したと分かった後に二コ二コ顔で『やつたね。さす  
が有賀さん』とか笑顔を振りまきやがつて！ おかげさまであたし  
は『いやあ、水無瀬君のおかげだよ』とか返さないといけない羽  
目になつたじやねえか！

．．．というか、そんなあたし達を美里ちゃんがじつと見てた

のが一番気になるんだよね。穏からの連絡であたしと水瀬がなんでもないって分かつてのはずなんだけど。つてか分かつてほしいなあ。これ以上あいつの恋愛沙汰に巻き込まれたくない。あたしは夏菜ちゃんだけでもう充分懲りたよ。

「そういえば、彩那

穂が声をかけて来たので顔をあげた。

「何？」

「富谷ってあんたのこと好きなの？」

「…  
…  
…  
…  
…  
…  
はい?  
」

いや、噂で聞いたんだが、あなたと富谷って中学からの元同級生でしょ？」

「そうだけど……」

「仲いいの？」

「・・・・・懶くなこと懶つ」

中学でも一年と二年の時に同じクラスになつたわけだし、ああい  
う性格だから誰とでも気軽に話すのが富谷君だ。男子の中でもそれ

なりに交流が多かつたし、よく話したけど……。

「好きって……所詮噂でしょ？」

「そりなんだけどさあ、今日あんた達をずっと監視してて本当かな  
つて思つたんだよね」

「監視なんてしてちや 実験が出来ないのも当然だね」

「つるわこよひ。とにかく、圓谷つて何かとあんたのことを睨むのよ。  
しかもよく話しかけられるでしょ？」

「……………」

そんな、ことは、ないと思つただけど……。

「だからつてあたしのことが好きつてわけじゃ？」

「男が女を何回も見るのに恋愛感情以外に一体何があるつてこのう  
よー！」

「……………」

「それにしても水無瀬君もそれに気づいてるっぽいし、美里ちゃん  
もいるからまあ、あの班は見事な四角関係だね」

「いやいやいや、なんで水無瀬君が出てくるのよ」

「いやだつて、あんたと水無瀬君が付き合つてるかもしれないって  
噂は美里ちゃんだけが知つてるわけじやないんだから」

「……………」

なんですか？

「アーニー君とお喋りでござるが……」

「ええええええ！？」  
「だつて知ってると思つたんだもん！－！」

「知らないよ！！」

「ウツ跡」

「え、いやでもほら！信じない人も多いと思うし！ 美里ちゃんもきっと違うって言い張るからほら心配しないで！？」

机に突つ伏して言つと、穂がオロオロしたままわたしを慰めようとする。

水無瀬と付き合つてゐるつて . . . . 。そんな噂が流れたらあたし一体何人に目の敵にされると思つてんのよ . . . . つ！ うちの学年所か一年も三年も水無瀬のことが好きな子つているのに！

・ . . やだなあ、リンチとかにあいそうだなあ。そんなの漫画

にしかない展開かも知れないけど

「『じめんつて彩那！』  
余計なこと言つた！  
私の言つたことはもう  
気にしないで！」

「…………いいよ。平気。稔のことは責めてないし、ほら、早く部活戻りなよ。先輩が呼んでるよ?」

あたしの言葉に稔が外に耳を向けると、校庭の方から『みのりーーつー』と叫んでいる声が聞こえる。

「ああ、もう！ 五分も経つてないじゃん！ とにかく」めん彩那！ 長引いたら先帰つていいから！」

「へいきへいき、終わるまでここにいるから」

さつさと行きなー、と手を振ると少し心配そうにこちらを振り返つてから稔が走り去つて行つた。

そして三十分が経過し、五時ぐらいにさしかかった所だった。

「 . . . 有賀さん」

窓の外見ていたあたしは、呼ばれた声にハツとした。こんな時間に稔以外に誰があたしを呼ぶつていうのよ。未だにムカムカしていたあたしは少し不機嫌そうに振り向くと、教室のドアの側にいる人物に目を見開いた。

立っていたのは、三年生生徒会副会長、久我夏美先輩だった。

「 . . . 久我先輩？」

えーと。世界の全ての人の中によりによつて貴方に声をかけられることは最大の予想外だよ。

名前を呼んでも口を開きかけてから再び閉じただけで、先輩は少し俯いてしまつた。

「 . . . なんなの？」

「あの、あたしに何か御用が？」

「ってかなければここにいないよね。」

声をかけると先輩は少しだけ顔をあげた。困惑した表情が浮かべてあつたからこいつも困惑だよ。なんだつていつの？

「あのね、聞きたいことがあつたの。本当はもう帰るつもつだつたんだけど、貴方がいるのを見えたから寄つたのよ」

「 . . . はあ . . . 」  
「 . . . 」  
「 . . . 」  
「 . . . 」

「 . . . 再び黙り込んでしまつた。」

「あの、久我先輩？ 聞きたいことがあるのなら？」

## 「水無瀬君のことなの」

声の強さが変わって思わずびくっと身体が震えた。  
えつ・・・水無瀬？

「・・・え、あの、水無瀬君がなに？」

はつとした。「これは、もしかしなくとも、あの噂か・・・・・・  
つ！？　あたしと水無瀬が付き合つてるなんていう馬鹿げた噂がま  
さか三年生に回つてしまつてるのか・・・・・・つ！？　だつて、だつ  
て久我先輩つて確か水無瀬のことが好きだし、あたしを問いただし  
に来たとしても不思議ではない・・・・・・つ！

まさか、とか思いながら目を見開いて先輩を見ていると、恐る恐  
る先輩が口を開いた。

「有賀さんと水無瀬君が、付き合つてゐて、本当？」

・・・・・うわあああああ・・・・・やつぱり・・・・・・・・。

「あの、なんか、そういう噂が回つてゐみたいなんですけど、ガセ  
ネタなんで。本当に。あたしと水無瀬君本当に関係ないんですよ」

だからその泣きそうな顔やめてくださいよ先輩・・・・・・

つたく・・・！ 水無瀬がはつきりと断らないから先輩がこいつ  
やって来てしまつたじやないの――！

あたしの強い口調にしかし、先輩は納得した様子は見せなかつた。  
それどころか、なんとなく睨まれてる気がするんだけど、それは気  
のせいであつてほしい。

「水無瀬君がモテる」とはよく知ってるの」

「は、はい」

「私の学年でも彼のことが好きな人は五人は知ってるわ。貴方の学年なんてもつと多いでしょうね。一年生にも彼に憧れてる子が多いみたいだし」

「...は、せー?」

何が言いたいんだろう・・・・。

「だから、水無瀬君が誰かと付き合つたら、付き合つてることを秘密にすることは当然だと思つてゐるのよ」

「付き合ってる」とか公の場に出たら、女子の祖先が彼の彼女に向くことは分かりきつてるもの。水無瀬君は優しい人だから、彼女をそんな目に合わせたくないだろうし」

「…………え、あの…………まさか、あたしと水無瀬君が、  
秘密で付き合ってると、思つてゐるんですか？」

違つよ！－ なんでそういう結論にしかたどり着かないのよ恋する女子つていうのは！－ ワーストなシナリオばっかり自分達のなかでたてていって勝手に傷ついて勝手に人を責めるんでしょうよ！もう・・・・ 「冗談じやないよ！ なんで水無瀬のせいでこんなに振り回されないといけないんだよ！」

「本当に違つんですよ先輩！ なんでそういうことになるんですか！」

「・・・だつて貴方と水無瀬君は、仲がいいから」

「はい！？」

「前から思つてたのよ。一人とも学年トップの頭脳だし、運動神経もいいし顔もいいし。貴方達以上のお似合いのカップルはいないつて思つてる人が殆どなのよ」

「冗談はよしてくださいよ！」

「本当よー」

叫び返されて思わず言葉が詰まつた。

「それに、私は水無瀬君をいつも見てるから分かるけど、彼は貴方の周りでは気を許してる。水無瀬君は一見誰にでも心を開いているように見えるけど、誰にも分け隔てなく接してることとは、それだけ気を許してないつてこと。だけど貴方の周りでは彼は落ち着いた様子を見せるもの。だから、私だけじゃなくてたくさん的人が貴方と彼が付き合つてるんじゃないかつて前々から思つてたのよ」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「そんなこと思つてる矢先に今度は学校外で一人一緒の所を見たつて噂が回るんだから、付き合つてるとしか思えないじゃない！」

「本当に違つんですよ！ 先輩！ 本当に付き合つてたらあたしだつて白状しますよ！ だけど本当に付き合つてないんです！ ！」

「そうだとしたらどうして彼は貴方の周りだと自然体なの！ ？」

「知りませんよ！ よく相談に乗るからとか同じような立場だからとかそういうふんじゃないんですか！ ？」

「違うわ！ あれはもつと強い絆だもの！ そうでなければ私だって貴方を疑つたりしないわ！」

「ああ、もう！ 本当に違うんですよ？」

「有賀さんの言つてゐる」とは本当ですよ、先輩」

女子一人の声に突然割つて入つて来たアルトにあたしと先輩はドアの方に振り向いた。気づかなかつたけど、いつの間にか先輩は教室に中に入つて来てたんだ。

校庭にいるのを見たから声の持主を見てあたしはとくに驚きはしなかつたけど、先輩は目を大きく見開いた。

水無瀨君

先輩が名前を呼んだけど、あたしはムスッとして彼を睨みつける。

「こいつのせいでこんなことになつてゐるんだから、こいつの口から聞いてみよ」いやないの！」

「なんだかそつこつ噂が回つてゐみたいなんですねけど、俺と有賀さんはただの友達です」

「でもっ」

「回つてゐる噂は単にバッタリ会つた俺と有賀さんを見て勝手に解釈した奴の仕業でしょう。俺だって、誰かと付き合つたら隠すことなんてしませんよ」

「…………」

さすがに本人に言われたからなのか、自分の気持ちが殆どバレてしまつていることもおかまいなしに先輩は黙り込んだ。それから水無瀬を見て、あたしに視線を移す。

「…………めんなさい、有賀さん。悪いことをしてしまつたわ」

「え、あ、いいえ、そんな。分かつてくれたならあたしは別に……」

「」

先輩が弱く笑つて、それから水無瀬を見た。

「…………水無瀬君も」「めんなさい」

「…………いえ」

「じゃあ、また」

床に転がっていた鞄を拾い上げて、先輩は足早に教室から走り出て行った。

「…………それにしてもあたしの言葉には一切耳を傾けないくせに、水無瀬の一言で納得するとは。あれこそ惚れた弱みつてやつかね？」

「…………つたく、めんどくせ。」

先輩が出て行つたドアをしばらく見つめてから溜息をつくと、水無瀬の視線が真っ直ぐとあたしに注がれてるのが感じ取れた。か、考えてみれば、猫かぶつてない水無瀬とは四日ぐらい話してないんだっけ。

「…………途方もなく長く感じるのはなぜだ？」

「…………有賀」

「話しかけないでよ。あんたを許したわけじゃないんだから」「…………」

「あなたのせいだとどんな屈辱を味わつたと思つてるのよ。それどころか美里ちゃんの気持ちもなんでもないかのように扱つて。」

ふんっ、とそっぽを向いて頬杖をつくと校庭を見下ろした。パーン、と乾いた音がして、五十メートルの距離を三人の女子生徒が走つて行く。

後ろで水無瀬が溜息をつくのが聞こえた。

「…………この前は悪かった」

「……謝つて済む問題でもないでしょ。あたしだけじゃなくて

美里ちやんまで傷つけたんだから」「ひ

「……別にあの場に狭川がいたわけじゃねえだろ」「ひ

「わざこつ問題じやない」

即座に返事をすると、見えてるわけじゃないけど眉を寄せる水無瀬が想像できた。薄く窓に反射する水無瀬が頭をガリガリとかいてから、再び溜息をついた。

「狭川のことも、さすがに言い方が悪かった。そのことも謝るよ。」

「お前にああやつてキスしたこと、」「めん

「何急に素直になつりやつて。気持ち悪い」「

「てめえ……」

「あんなことされたの、あたしはまだあなたの秘密をバラす」とをしてないんだよ?」「

言にながら振り向くと、水無瀬が少し驚いた表情をした。それからすぐに顔を伏せる。

「ああ……。ありがとつ

「何なのよ。急に素直になつりやつと調子狂うじやん。

心の底から反省してるようになんだから少しょんぱりとしてしまつた水無瀬に、あたしは溜息をついた。

「あたしと話さない方が秘密もバレないっていうのに、なんでもわざわざ謝りに来るのよ。らしくもない」

水無瀬が苦笑を浮かべた。

「…………案外、辛いもんなんだよ」

「…………何が？」

「本当の自分を知っている人が、周りにいないのが」

「…………だったら、猫なんかかぶらなければいいじゃない」

「そんな簡単にできるわけねえだろ。俺はもう、掘りすきてしまった穴の中にいるようなもんなんだから」

「…………」

「…………何言つてんだか。最初から猫かぶるうなんて考えな  
ければ、抜け出せない穴なんかにはならなかつたのに。」

「それもあんたのせいでしょ？」

「…………まあな。だけど、今まで平気だつたんだよ。学校で  
本当の俺を知つている人はゼロだつたんだから。それはつまり素を  
出さずの一過ごすことだ。一回聞いたらすっげえ疲れると思  
うだろうけど、案外楽なんだよなあ。バレちまつてる人はいないか  
ら何をやっても誰も何も言わなかつたし」

「…………それは軽くあたしのことを責めてるわけ？」

「別にそういうわけじゃねえよ。ただ、一回俺のことを知つてゐる人

がこると、素を出したくなるんだよ。特にお前は俺に無駄に媚びないし、一緒にいて楽だから

「…………」

なんで急にこんなこと言つてるのこの人。ほんとに謎なんですか  
ど。大丈夫かな？ 熱とかあるわけじゃないよね？

「だけど、素を出せるたつた一人の人物に無視を通り通されたことが  
んなにも辛いとは、思わなかつたんだよ」

「…………」

「んでまあ、そうなつてしまつた原因が俺だつたから謝りに来たわ  
け」

「…………そつ」

「…………そつ、て、お前なあ。人が謝るのにその態度はねえんじや  
ねえのか？」

「散々人のことを振り回したんだから、そんなに簡単にあたしが許  
すと思わないでよね」

はああああ、と水無瀬が長い溜息をついた。

「まつ、どうせそんなことだと思ったよ。お前が簡単に入を許す奴  
じゃねえことくらい予想の範囲内だ」

「よく分かつてゐじやない」

「まあな」

一拍だけ長く見つめ合ってから、水無瀬は机にかけてあつた自分の鞄を手に取つた。それからスタスターと教室から出て行こうとするところで、あつ、と声をあげた。

少し目を見開いてそつちを見ると、二ッと水無瀬が口角をあげた。

「一応言つておけば、反省はしてるが、後悔はしてねえからな」

言い残してビュンッとものすごい速さで廊下を走つて行く音が聞こえた。

わなわなと肩を震わせてあたしはガタンと座つていた椅子を押し倒しながら立ち上がつた。

恋は本当に大変なものだ。（後書き）

しばらく書いてないからなんだか文才が落ちてる気がします。いやもいほんといめんなさい！ 石でもなんでも投げてください！

明日も投稿するつもりですが、できなかつたら・・・むづ見捨ててくださつても文句一つ言こません・・・。

恋愛はやつぱり厄介だ。

それにしてもどんなに嫌な奴でも反省する時は反省するんだな。後悔しないって言われた時はぶん殴りたくなったけど、まあ謝ってくれたからよしとしよう。  
だけど許しはしない。

水無瀬と久我先輩が去つて行つたすぐ後に稔が教室に入つて來たけど、わざわざ今起こつた事を話す氣にもならなかつたので放つておいた。でも機嫌がよくなつてたらしく、仲直りでもした？ つて聞かれた時は殺す勢いで睨みつけてしまつた。

さすがにハツ当たりするのはそろそろやめたほうがいいかもしない。最近ずっとハツ当たりしてゐるのにキレ返さない稔には感謝します本当に。

雑談しながら一人で帰り道を歩いていると、ふと稔がこちらを見た。

「ところで、話の途中だつたんだけどさ、富谷に告白とかされてない？」

ピキッと青筋がたつた気がした。

「さ・れ・て・ま・せん」

「なあーんだ」

「なんだとはなんだ！」

「あいつ絶対彩那のことが好きだと思うのよね」

•

稔のそういう発言のせいで勝手に噂が出回るんでしょう。まさか稔自身気づかずに噂を回して、それが自分に帰つて来た時も自分が回した噂だつて気づいてなかつたとか？

・・・・うわあ、超あり得る。

「あのねえ、確信も持てずにそつこつ」といつから瞳が回るのよつ。宮谷君があたしのこと好きでも好きじやなくてしゃうつことを軽々と言わない！」

「だつて」

「だつてじやない」

つたく。どこの駄々つ子だあんたは。

「というかそういう稔のことのが好きな男子だつているんじゃないの

? 1

卷之三

いえ、ば念の初恋話とかも聞いてみた。」

「誰が言ひか!!」あ、言ひたつたがいい私へ!!「あみー!!」

「あ、こら、稔！逃げんな！！」

チツ。人の恋愛沙汰にいつも首を突っ込むくせに自分の話になる

と絶対嫌がるんだから。

…………ん？ せういえば、稔つて好きな人いるんだろ？  
なんだか知らないけどいつもあたしの恋愛沙汰に結びつけるからよ  
く知らないんだよなあ。

溜息をついてから歩き出して、家の前まで来た。  
……また喧嘩とかしてなきゃいいんだけど。

「ただいま？」

「私のやることにこちこち口を挟むぐらうに嫌になつてゐるんだつたら、さうあと出て行けばいいでしょ……」

家のドアを開けた瞬間に怒声が聞こえて来て、驚いて息を詰まらせた。

……今の声は、お母さん……。いつもとは全然違つ怒鳴り声。今にでも、泣き出しそうな……。

あたしがドアを開けたことに全く気づかずに口論を続ける一人がいる部屋に、恐る恐る近寄つてみる。△所へ続くドアをほんの少しだけ開くと、部屋の真ん中で睨み合つてこむお母さんとお父さんがいた。

お母さんの目にはうつすらと涙が浮かんでおり、お父さんの方は苦虫を噛み潰した様な顔をしていた。

……今まで何回も一人が喧嘩する所を見てきたけど、あんな・  
・ あんな状態の一人なんて見た事がない……。

「私が何をやつてもネチネチネチネチと文句をつけてきて… だつたら貴方は何かできるわけ！？」

「出来たとしてもお前が何一つやらせてくれないじゃないか…！俺に何をしろっていうんだよ…！」

「ふざけんじゃないわ！！ 私がやつてと言つても何一つやってくれないくせに…！ 都合のいい時だけ私のせいにしないで…！」

「お前にこそ都合のいい時だけ俺のせいにするじゃねえよ…！」

．．．．何なの。

どうしてこの二人はいつも喧嘩しか出来ないの。どうしていつもいつもいつもいつも喧嘩しないといけないのよ．．．つ！ その度にこんな気持ちになるあたしは、どうすればいいっていうのよ！

一人がこんな状態で家にいたくないと思ったあたしは、床に転がっていた鞄を拾い上げてから家から出て行つた。

あの状況じゃあ、あと一時間は険悪の雰囲気が続くだろ? なあ。

水無瀬といい親といい、なんであたしはこんなに険悪な雰囲気にばかり巻き込まれてるわけ? いや、まあ、水無瀬との険悪な雰囲気は今日で解決したからいいとして(多分ね)、両親が毎日あれじやあ精神的に参るよ。ほんとこ。

はああ、と大きな溜息をついて、マックに「どうも謝るかと思つて」矢先、

「有賀?」

最近その名前を呼ばれる時は同じ人だから嫌そうな顔をしそうになつた。けど、寸での所でその声の持主が違つ」と気づいて驚いて振り向いた。

立つていたのは宮谷君だった。

「宮谷君……」

名前を呴くと宮谷君がニッと笑みを浮かべた。

「ここな所で何やつてんだよ、有賀」

「……ああ、いやあ、なんか家に帰りたくないって……」

「?」

富谷君が首を傾げた。

・・・・・富谷君なら別にいいかな。

「両親が喧嘩しててね。すつごい大喧嘩。だから

にへらつ、と弱い笑みを浮かべると富谷君が少し目を見開いた。  
それからさつか、と呟くと、あたしが入るとしていたマックを指  
差した。

「奢るよ?」

・・・・・富谷君こそ真の優しさを秘めている男・・・つ――さ  
すがすぎる!

わーいありがとーといいながらルンルン気分でマックに入っ  
て行くあたしを、苦笑を浮かべて富谷君が追つて入って来た。その  
まま一人でハンバーガーと飲み物を頼むと、窓際の席に腰を降ろし  
た。

店内を見回すと制服を着ている子が多い事から、学校帰りの子が  
殆どなのだろう。まあ、確かにマックは小腹がすいた時にはもって  
こいの場所だから気持ちはよく分かる。勉強とかも出来るしね。あ  
たしは人が多くて集中できないけど。

「コーラを飲みながら店内を見回していると、富谷君の視線を感じ  
て顔を戻した。

・・・・・うあ、稔の言葉思い出しちゃつたじゃない! ああああ

あだめだ。」（）で余計に氣にしたら絶対変だから普通に振る舞おつー

「わうこえぱや、畠谷君はこんな所で何やつてんの？ 部活もないし、すいぶん前に帰つてたんじやないの？」

畠谷君は野球部に屬しててさば、確かに野球部は四時半に終わつたはず。

あたしの質問に、ああ、と畠谷君が声を出した。

「こや、今日好きな漫画の発売日でわ。俺の家の周りつて本屋がないからりで買つていつと思つたり立ち読みしちやつて、こんな時間」（）。

「わうなんだー。でもその気持ち超分かる。本屋つて立ち読みしちやうよねえ」

あたしが同意すると畠谷君が小ちく笑い声をあげた。

「わうわう。一冊だけ買って行くつもつが三冊立ち読みして一冊買つちやつたよ

「あははは、わうこひ」ともあるよつ。それがきっと本屋の目的だ

「ね

「むへ、なるほど。本屋つて商売上手なんだな。チツ、はめられた

「ぜ

一人で笑い声をあげると、富谷君がハッとした。

「そりゃええ、お前んちの親つて、仲悪かったつけ?」「え?」

こきなつ会話が戻つたなあい。

「いや、中学の時に何回か見かけたことがあるんだけど、仲良しなうな夫婦だったから . . .」

「んー . . 。喧嘩を始めたのはあたしが高校に上がった頃から。去年はそんなに喧嘩することなかつたのに、今年からは小さな」とですぐにお互いに食いつくようになつちゃつてるんだよねえ . . .」

今日みたいな大喧嘩もしちゃうし。

はああ、と深く溜息をつくと、富谷君が少し眉を寄せた。

「俺んちの親も最近よく喧嘩すんだよ」

「え? ソうなの?」

「うん。ほら、俺達来年は受験生だから、進路のことによくもめるんだよ。母さんは俺に特定の大学に行ってほしいんだけど、父さんが俺の進みたい大学に行くべきだつてね。嫌になるよ」

ふう、と富谷君が息を吐いた。

・・・そつか。そうだよなー。進路のことでもめるのはどの家族

でもありそただけど、どうとかといえば親と子供が喧嘩つてイメージがして、親同士が喧嘩するつていうのは考えなかつたな……。

「そつかー。富谷君ちも大変なんだね」

「まあな。まつ、有賀の親が進路のことでもめているのかどうかは知らないけど、そんなに気に病むなよ？ 親つつーのは兄弟並みに喧嘩するもんなんだからさ」

一カツと富谷君が笑顔を浮かべて、あたしも小さく笑い返した。  
さすがクラスのムードメーカーだなー。人の気分をすぐに変えられるのがすごいや。

「へへっ、ありがとう富谷君。ちょっと元氣出たかも」「そりやよかつた」

その後も一人で雑談していると、いつの間にか六時になつたのに気づいて慌てて一人して店内から飛び出した。

話しこむと時間が過ぎて行くのを全然感じないんだよなあ。お母さんもお父さんも喧嘩してなければいいんだけど……。

はあ、と息を吐いてから、まだ隣にいる富谷君に向いた。

「それじゃあ氣をつけて帰つてね、富谷君」

「有賀こそ」

「今日はありがとうございました」

「いえいえ。励ましになれたのなら何よりでござります」

スッと紳士的にお辞儀をした宮谷君に笑い声をあげると、宮谷君もあたしを見て笑った。それから一瞬真剣な表情になつたけど、それに気づかずにはあたしは踵を返した。

家に帰つたらどうしようと考へながら歩き出した瞬間、

「つ、有賀つ」

グイッ、と腕を引っ張られたと思うと、そのまま身体を翻された。驚いて目を見開くと、宮谷君があたしの両腕を強く掴んだ。

「はつ、え!？」

「有賀、聞いてほしいことがあるんだ」

「…え?」

『あいつ絶対彩那のこと好きだと思つのよねー』

稔の言葉が脳を横切つた。このタイミングでそんな言葉が脳を横切つたのは、きっと気まぐれなんかじゃない。

嫌味として言つてゐるわけじゃないけど、告白されるのははじめてじゃない。だから、なんとなく告白される時は相手がどんなふうに振る舞いのかは、なんとなく分かつてゐる。・・・つもり。

少なくともこんな決死の表情であたしの両腕を掴んで『聞いてほ

しい事がある』って言われたら誰だつてそう連想するでしょーー！？  
ちょっとパニックになってきた！

「え、あの、み、富谷君？」

「俺、俺さ、」

ちよ、いや、告白じゃないかもしないし早まるなよ彩那！ そ  
んな自惚れみたいじゃないか！ ああああだから富谷君が決死の覚  
悟であたしと向き合ってるからって別にあたしに告白するわけじゃ  
ないだろーし！

「俺、有賀のことが、その」

あたしの腕を掴んでいた力を緩ませて、一瞬だけ言葉を切った富  
谷君が俯いた。

ねえ、ちょっと、本当に・・・・・！ あたし、富谷君との関係  
壊したくないの・・・・・っ！！ いやでも『好き』って言われたわ  
けでもないのにそんなこと言つのもおかしいけど、だけど言われて  
からじや遅いしあもづつ！

脳内で必死に思考を巡らせていく間に富谷君が顔をあげて真っ直  
ぐとあたしを見た。

「俺、有賀のことが？」

「彩那ちゃん？」

ピタッ、とあたしと富谷君の動きが止まる。気のせいであつて欲しいかけど富谷君の口の形が『す』で止まつてゐる。いや、気のせいだよね。そんなん告白とかされるわけじやなかつたしね！  
．．．．．はあ．．．。

と脳内でそんなことを思つていていたけど、そんなことよりもあたしを呼んだ声にあたしも富谷君も振り向いた。背中を流れる黒い髪に整つた顔立ち、右手にはスーパーの袋。  
おそれもなく斎木美智子さんだ。

「．．．．美智子さん」

予想以上に声に安堵が込められていて、しまつたと思つてゐる間に美智子さんがあたしと富谷君を交互に見た。  
それから、あら、とこゝつ感じで口元を覆つ。

「．．．．お邪魔しちゃつたかしり？.  
「美智子さん！」

本当にこの人のタイミングはなんなのよ！ 必死に、何も言わないで！ 的な視線を美智子さんに送つていたら（それを分かつてくれたかどうかは分からぬけれど）、富谷君が困惑した表情であたしと美智子さんを交互に見る。

…………そりゃあ、なんちゅうタイミングでくるんだって富谷君も思つてるだろ？ね……。

「…………有賀、知り合い？」

「えと、う、うん。知り合いでのお姉ちゃん」

なんとか富谷君と目線を合わせてから美智子さんに視線を滑らせる、へえ、と静かに富谷君が呟いた。だけど美智子さんが一瞬ノリと微笑むと少し目を見開いた。

…………まああれだけ美人に笑いかけられちゃ……誰でもそうなるよ。うん。同性でも見惚れるくらいだからね。

「はじめまして 斎木美智子です」

「あ、は、はじめまして、み、富谷悠人です」

「よろしく富谷君 あら、富谷君は彩那ちゃんと同じクラス？」

「いえ、学年は同じですけど」

「あら、そう。じゃあうちの弟の愁也とも知り合って？」

「……愁也？」

ひいいいいいいいいいい！！！ 美智子さん！！ 美智子さんなんてこと言つのよー！ ちょ、水無瀬のお姉ちゃんとあたしが知り合いつかが世に知られたらほかに何を言われるか分かつたもんじゃない！ あたしの『何も言わないで』視線は効果がなかつたのかよ！ ！！

（）には水無瀬じやないと言つた方がいいのかいやでも水無瀬じやないって言つたつて愁也つていう名前の男子なんてあいつ以外にい

ないじゃない！ だけどだからといって水無瀬のお姉ちゃんとあたしが知り合いだってバレるのもなんとなくまずい気がするっていうかいや絶対やめたほうがいいっていうか！ ちょ、どうするのあたし…！

とか心の中で叫んでいる間に一人の会話が続いて行く。

「愁也つて……まさか水無瀬のことですか？」

「み、みや？」

「そりそり！ 水無瀬愁也、私は結婚してるから苗字は違つけど、私の弟なの」

「…………水無瀬が？」

ああああああああああ…………宮谷君の視線があたしに注いでくるのが分かる…………。だめだ、どうしよう、ここで下手に言い訳しても「まかせないし、それどころか美智子さんが何を言つても全然平氣よねみたいな雰囲氣でいるからちょっと無理これは無理！

「み、美智子さん！ あたしに話があつたんでしょう…？」

(美智子さんに取つたら) よく分からぬ沈黙に陥ると、すぐにあたしがそんな言葉を口にした。美智子さんが驚いて両目を大きく見開いたけど、今回はあたしの視線の意味が分かつたのか、交互にあたしと宮谷君を見てから困惑氣味に頷いた。

「えっ？ あ、え、えと、そ、そうだったわね」

「とにかくだから、」ねん富谷君！ 今日はありがとうございます。気を

「えっ、  
」

一  
え  
二  
、

返事を待たずに美智子さんの腕を掴んで引っ張つて行く。確実に

富谷君が見えないかどうかを確かめた。

充分は距離を引いて離したからなの  
よし。

「ちょっと、彩那ちゃん？」一体どうしたってのよ

「三國志」のノア版：ああああああああああああああ

卷之三

恋愛はやはりひとつ厄介だ。（後書き）

約束通り投稿できました！… わーいわーい！ いやもうほんと  
よかったです。

微妙な所で区切つてすみませんvv 長くなってしまったので、  
一話に分けようと思っています。今日の夜か明日には投稿します。

1111まで読んでくれてありがとうございます。おね

親の悩みを抱えてるのよあたしだけじゃないとだね。

「…………そ、それは悪かったわね。…………」めん

田の前のお茶を手に取つて飲んでるあたしは現在斎木家。多分水無瀬も帰つて来るから抵抗があつたんだけど、事情を話さずに帰るのもなんだか気がひけたから、美智子さんに誘われるがままにここにきてしまつた。

さつきまで起こつていた事を全て美智子さんに話し終わると、しょんぼりとしてしまつたあたしに美智子さんがとても困つたよう感謝つてきた。

小さく首を左右に振る。

「いや、あの状態で美智子さんには何も言わないで、つて分かつてもらう方が無理だから、そんなに謝らないで。あたしも美智子さんに救われたし」

「っていうか、美智子さんって鋭そうなのこどうして肝心な時に分かってくれないんだ……っ！ いいけど… 救つてもらつたら文句なんて言わないけどやー！」

溜息をついてお茶をすすると、美智子さんが一瞬だけ視線を彷徨わせてから口を開いた。

「あの富谷君、悪い子には見えなかつたけどねえ・・・。嫌いなの？」

「・・・そんなんじやないんだけど・・・、富谷君とは中学からの付き合いだし。でも・・・そんなんふつに彼のことを考えたことはないし、これから先もそんなことは起きないと思うから・・・。それに、仮にあの時に告白されていましたとして、あたしが断つてしまつたら一人の間がギクシャクするのは田に見えてるもん。むき合ひが長いだけに、そんなことになるのは・・・やだ」

「・・・」

ふう、と美智子さんが息を吐いた。

「仕方がないわね。私だって好きでもない相手と付き合えなんて言わないから、まつ、この件についてはお開きつてとにかくね」

「・・・ありがとう」

「んで、彩那ちゃんと愁也が付き合つてゐつていう噂はどういが発端

「？」

「・・・分からぬ」

いきなり話が戻つたからびっくりした。

正直に答えると、そつ、と美智子さんが呟いた。

「・・・んー。この際だから正直に語りかけど、あたしも愁也と彩那ちゃんが付き合つてると思つてたのよね、はじめて一人が対面したのを見た時に」

「 . . . . . 」

あれ？ 気のせいかな？ なんだかす“じこ”とを言われた気がするんだけど。

あたしの表情に美智子さんが顔の前で手を振った。

「いやいや！ 今だつてそう思つてるわけじゃないけどひれり！ 愁也が猫かぶりなのを知つてゐるのつてあたし達の家族と夏菜達の家族しかいないからさ。そりや、今まで他人にバletedことがないつてわけじゃないんだけど、そういう場合はなんとか脅してもみ消すかられ」

「 . . . . . 」

「 . . . もみ消す？ 一体どんな恐ろしことをしてもみ消すんだわ！」

「それに、バレる場合つて大体相手が愁也のギャップに怖がるのが多いんだよね。でも、彩那ちゃんだけは違つたし、愁也もなんづーか、自然体？」 だつたから

「 . . . 素を出してるんだから自然体なのは当然のことじやないの？」

「せうなんだけどさー。愁也自体氣づいてないんじゃないのかな。彩那ちゃんと一緒にいた時にさ、家族と一緒にいるみたいな感じだつたから、ちよつとびっくりしたんだよね」

「 . . . . . 」

脳裏に久我先輩と水無瀬の言葉が横切つた。

『貴方の周りでは彼は落ち着いた様子を見せるもの』

『お前は無駄に俺に媚びないし、一緒にいて楽だから』

『素を出せるたつた一人の人物に無視されるのがこんない辛いとは、思わなかつたんだよ』

「…………。なんなのよ、みんなして。稔まであたし達はお互いのことを分かつてゐみたいなこと言つてたし。あたしは水無瀬と付き合つ氣なんて一切ないつーの。

と、じこまで考えてあたしは眉を寄せた。

「…………美智子さん」

「何？」

「その水無瀬は、じこにこてるの？ 部活終わつたんだから家に帰つてると思つたんだけど」

「ああ……」

と言つてから美智子さんが顔を伏せた。

「…………聞いてはいけないことだつたのかな？」

何回か口を開こうとしてから、再び閉めることを繰り返してから、美智子さんは息を吐いて視線をあげた。

「……彩那ちゃんだったり、言つても平氣かな」

「え?」

「……あのね、あたし達は四年前に母親に捨てられたのよ  
「……」

一きなり重いことを言われて、あたしは驚いて目を大きく見開いた。

捨てられたって……。だ、だから美智子さんの家に遊びに来る時に親がいなかつたのか……。  
あれ、でも、お父さんは……？

「……お、お父さんは?」

美智子さんが息を吐いた。

「お父さんは愁也が生まれる前に死んじやつたの」

「……」

「だからあの子は父親の顔は知らない。その分母親に対する愛情は絶大だったのよ。特にあの人は再婚をしなかつたからね。あの人もとても愁也のことを可愛がっていたわ。それこそあたし以上にね」

「……なら、どうして……」

美智子さんが視線を伏せた。

「嫌になつたのよ。子育てに。女手一つで育ち盛りの男の子を育てるのは、あの人に取つたら荷が重すぎたのよ」

ギリツと美智子さんが歯ぎしりをした。

「馬鹿げてやがる。子供を育てるひとのビリヒト重い荷があるつていうんだよ」

吐き捨てた美智子さんに、彼女がどれだけお母さんを憎んでいるのかが伝わつて來た。父親のことは『お父さん』と呼ぶのに、母親のことを『あの人』と呼ぶことからも、それが充分に伺える。

「美智子さん . . .」

「 . . . とにかく、あたしが二十を過ぎたのをいいことに、中学に上がってばかりの愁也を置いてあの人は出て行つたのよ。それから四年間ずっと音信不通」

「 . . . 」

「それが、つっこみになつて帰つて來たのよ」

「え！？ か、えつ、帰つて來た！？」

美智子さんが頷いた。

「そりやむづびづびへりしたわよ。」の四年間ビリヒトをまつ歩こつて

たのか知らないけど、謝り倒しながらまた一緒に暮らしたいとか言ったのよ。

「……………それで……………」

ふんつ、と美智子さんが腕を組んで椅子に寄りかかつた。お茶をすすつてから力を込めて湯のみをテーブルにダンツ、と置いた。

「断つたに決まってるわつ。何考えてんのか知らないけど勝手に出で行つたくせにフラフラ帰つて来るなんて許さない！」

۱۰۷

驚いてあたしが田を見開くと、『?』と美智子さんがあたしを見上げた。

גָּדוֹלָה

「…いや、美智子さん、その事水無瀬には話したの？」

「話したに決まってるじゃない！　あの人が帰つてから愁也に連絡

「…あせじめ…」

確信した。あたしがはじめてあの猫がぶり野郎が猫かぶつてない所を見た時、あいつは携帯の中に『絶対に家に入れるなよ』と叫んでいた。それも美智子さんと全く同じような怒気を込めて。

つてことは . . . . あの電話の相手は美智子さん、話の中心となっていたのが、二人のお母さんってことか！

ん？ ところで、

「えっと . . . それと水無瀬はどうやって繋がってるの？」

「え？ ああ、それが、今日の放課後も来たのよ。つたぐ、信じられない。もう三回目よ？ 何回断れば気がすむんだつーの。今回は愁也とも対面してね、大喧嘩を繰り広げてあいつが部屋に閉じこもって拗ねてるわけ」

「え？ あ、じゃあ水無瀬ここにいるの？」

「いるわよ？ 何？ 会いたいの？」

「違うつ！――」

必死に否定するとゲラゲラと美智子さんが笑い声をあげた。 . . .  
・そんなに美人なの相変わらず品の欠片もない笑い方をしますね、貴方。

それにしても、水無瀬いるのか。全く物音がしないからいいのかと思ってたんだけど . . . 。そつか、水無瀬にそんな裏があつたとは知らなかつたなあ . . . 。それなら電話に向かつて叫んでも納得するつていうか . . . 。うん。

と、一人でうんうん頷いていると。

「ところで、彩那ちゃんはそろそろ帰らなくて平氣？」

「え？」

美智子さんの言葉に顔をあげると、時計を指差しながらいつかを

見返してくる。そんなあたしが時計を見ると、七時を回っていた。

「え、ちょ、もうこんな時間！？ ヤバい！！ 帰らなきゃ！」

「めんね、美智子さんっ」

「いえいえ、あたしは全然平気よー」

慌ててお茶を飲み干して玄関まで行くと、あつ、と美智子さんが声をあげた。

「．．．うーん。一人で彩那ちゃんを帰すわけにはいかないわね．．．」

「えつ、いや、まさかまた水無瀬に送らせるとか止めてよね、ほんと」

あれはもう会話が持たないっていうか、何を話せばいいか分からないうていうか。ぶつちやけ水無瀬と一人きりで帰るのが嫌なだけっていうか。

美智子さんが少しだけ不満そうな表情をした。

「もう。彩那ちゃんって愁也のどこがそんなに嫌なのよ。あいつ、確かに性格悪いけど、根は優しいのに」

「それは、．．．まあ、何となく分かってるつもりだけど、あたしに対しては悪魔になるから無理」

美智子さんが笑い声をあげた。

「分かつたわ。仕方ないからあたしが送つてあげる  
「え、でも悪いよ！」

「平気平気、一人で帰すわけにはいかなから。ほら早く早く」

美智子さんが靴を履いてからあたしの背中を押すと、一人で家から出て行く。

．．．それにしても、二人の家族がそんなに大変な関係だったとは思わなかつたなー。見た所生活に不自由は全然ないよう見えたから、てつきり両親共々いい仕事についていい給料でやつていつてるのかと思つてた。

それが姉弟二人だけの生活だつたとは、予想外だ。美智子さんが水無瀬よりも十歳は年上だつたからいもの、そんなに歳が離れてなかつたら、子供一人を置いて出て行つちゃつてたのかな、お母さんは．．．そう考へると、両親の仲が悪くとも一緒に住んでゐるあたしは平和な方なんだろうか？

黙々と考え込んで思考を巡らせているうちに一つの間にか家の前に來ていた。美智子さんはこの間殆ど何も話してなかつたけど、．．．お母さんのこと考へてるのかな。

「．．．送つてくれてありがとう、美智子さん。元気出してね？」  
「あははっ、ありがとう」

一人で微笑み合つて、あたしがドアのハンドルに手をかけた瞬間、

「彩那ちゃん」

呼ばれて振り向くと、美智子さんは弱々しく笑みを浮かべていた。

「一つだけ聞きたい」とあるんだけど」

「あ、はい……」

「愁也がどうして猫かぶつてるのか、知ってる?」

「…………。そりや、先生からの待遇はよくなるし、モテるし、誰も敵に回らないし……みたいなこと言ってなかつたっけ? 確か。いかにも下衆っぽい言い方だつたけど。

思ったことをそのまま口にすると、美智子さんが大笑いした。

「あはははっ! 言ひそつだねっ、確かに! いかにも愁也っぽい真相の隠し方だよ」

「…………」

真相の、隠し方?  
美智子さんが微笑んだ。

「愁也が猫をかぶりはじめたのは、あいつが中学に上がる頃。つまり、うちの母親が出て行った直後からなのよ」

「…………」

「あいつが猫をかぶってるのは、人生がやりやすいからなんかじゃない」

「えつ！？ 違うの！？」

すつじく嫌味つたらしくあんなこと言つてたのに…

苦笑を浮かべて美智子さんが首を左右に振る。

「あいつが猫をかぶてるのは、母親がそういうあいつを求めているからだと思ってたからなのよ」

「つ…！」

息が詰まつた。

「……あの人が出て行つたのは、自分が悪い子だったから。自分がいけないことをしたから。お母さんの求めていた息子じゃなかつたから。愁也はそう思い込んでしまつて、だから、猫をかぶつてい子を演じれば、あの人気が帰つて来てくれると思っていたのよ」

「…………そんな…」

「……子供は何を言つたつて分からないくつて思つてる大人は多いけど、そういう人達は自分が子供だった時のことと思い出していいのよ。自分に向けられたものが好意なのか悪意なのか、人が自分を責めているのか責めていないのか。それぐらい、簡単に分かるの

よ、子供だつて

「…………」

美智子さんが寂しそうに瞳を伏せた。

「今でも猫がぶつてるのは、それが癖になってしまった、っていうのもあるし、……心のどこかでは、あの人が帰つて来てくれるんじゃないかつて思つてたんでしょうね。それが本当に帰つて来ちゃつたもんだから、いろいろと思うことがあるのよ、きっと。あの子はもう子供じゃない。自分が変わった所であの人が帰つて来ることはないのは分かつてる。だけど、変えることができないでいるのよね、やっぱり。四年も猫がぶつてたんだから、責めやしないけどさ」

あたしが顔を伏せると、美智子さんがふふっと笑つた。

「あんまり気にしないで？ ただ、彩那ちゃんはあいつの素を知つてるから、言つておきたかつただけ。……あたしも、多分愁也も、彩那ちゃんのことはどうでも信用してるから」

「…………美智子さん…………」

「ふふっ、じゃあね」

「…………」  
言つてから、今度こそ手を振つて美智子さんは歩き出した。あたしもその後ろ姿に手を振り返してから、家の中に入つて行つた。

声は聞こえてこない。つまり喧嘩はしていないことかな。いや、

喧嘩はしてなくても嫌な雰囲気になつてゐるだらうなあ……。あたしがいなかつたことに気づいていたのかは分からぬけど、台所を覗くと、テーブルにはあたしのための夕食が置いてあつた。キッチンにはお母さんが、テレビの前には新聞を広げてお父さんが座つてゐる。

……ってか、あんな大喧嘩するくらいにお互いに腹が立つてゐんだつたら同じ部屋にいなければいいのに……。

「遅くなつて」めん

声をかけながら台所に入ると、お母さんとお父さんが一人ともこつちを見た。

「彩那！ ディーツイッテたのかと思つちゃつたじゃないの。携帯もこじに起きつ放しだし！」

「」めんごめん。帰り道に友達とバッタリ会つてしまつて、そのまま雑談してたらこんな時間に……

・・・まあ、嘘ではない。

「わー。まあ、無事ならよかつたわ。とにかく」飯食べちゃいなさい。私もお父さんも食べちゃつたから

「はーい」

言いながら席について、ふと思つた。

水無瀬と美智子さんは、いつもやつて心配をしてくれる親とか、  
「」飯を作つておいてくれる親とかは、いない。それは、普段両  
親をうざがつている人からしたら、楽に聞こえるかもしれないけど。

とても、とても寂しいことだな。

あたしには、毎日喧嘩をしてもあたしを心配して、一緒に住んで  
くれる親がいる。

もしも、水無瀬と美智子さんの親みたいに、急に出て行つてしま  
つたら、・・・とてもじゃないけど耐えられない。

口に「」飯を運びながら、あたしは一人黙々と考え込んでいた。

親の懶みを抱えてるのねあたしたしかじやないでいいだね。（後輩め）

約束通り投稿できていってよかったです。それにしてもやつぱり文才が落ちてる気がする。。。

あ、やつこえーばー！ 昨日はアクセスが過去最高の数を叩き出しつて驚きました！ いやもうほんと！ パソの前で『なん。。だと。。！』ってなりました！

もう皆さん愛しますーーー！ こんなに読んでくれていいとは思つてなかつた。。

これからもよろしくお願ひします！

リーダーおで読んでくれてありがとうございます。。

## 尊も度が過ぎると笑えない

わたし、ビリもんかね。

そんなことを考えながら、あたしは学校への通学路を歩いていた。

昨日の水無瀬と美智子さんの件ももちろんわざだけじ、今は何よりもすりへ怪しこまま富谷君を置いてこつこつしたことが最大の悩みである。 . . . . いやもつ、ほんとどひよへ。

あれが告白だとして（仮にね。仮に）、こくら美智子さんが乱入してきたとはいえ、あたしが聞こうとしたことは結構明白だったんじゃないだろうか。いや、どう考へてもバレバレだったと考える方が良さそうだな。うん。

・・・それにしても、ビリしてあんなタイミングで告白を（仮）しようと思つたのかは謎だ。

・・・・・あああああだめだ！ こんなウジウジ考へても仕方がない！ 少なくともあたしは富谷君に對して変な態度で接することはないから、富谷君が何も言わない限りは平氣だ！ 多分！ ってかお願ひ！

うーんうーんと遠慮しないで、ポンッと肩を叩かれて驚いて身を引いた。

稔が笑いながら立つていた。

「稔！ やめてよー 超びくつしたじやんー！」

「それが目的だもーん」

「・・・のやうに」

「ははっ。なーにひしくもなく考へ込んじゃつてんのよー。」

「・・・こやあ、ひょっとねー。」

「これは言つてしまつた方がいいのかなあ . . . だつて稔は、なんか、富谷君があたしのことが好きだつてことに気づいてたみたいだし。でも言つたら言つたで『ほりつ！ やつぱりあたしが言つた通りだつたでしょ！？』とかすごい興奮状態で言われそう。

．．．容易に想像できる所があたしと稔の絆の固さを表してゐるよね。

とにかく今の時点で稔には秘密にしておことつと思つたあたしは適當にはぐらかすと、それ以上深く追求しなかつた稔と共に学校へと足を運んだ。

ところで、水無瀬の話を知つてしまつたからには、簡単に『猫かぶつてることをバラすぞオラア』とも出来なくなつたわけで。いやまあ、出来ることは出来るけど、猫をかぶつてる理由を知つてしまふとなんだか．．．．．．「ひ、罪悪感に襲われるつていうか．．．．

．．．あたしつてどこまでお人好し？

いつものように学校のはじまる十分ほど前に教室に入ると、富谷君が同じクラスじゃなくて良かつたと思って息を吐いた。それはそれで最低な発言に聞こえるかもしけないけど、水無瀬の姉である美智子さんとあたしが知り合いだと知られてしまったからは、なんていうか、水無瀬とあたしの間に何があるんじやないかと疑うこともできるわけで。だってクラスメートの兄弟姉妹と知り合いつて、余程そのクラスメートと仲が良くて、よく家に遊ぶに行くとか

思われるわけでしょ？ 少なくともあたしはそう思う。だからこそ  
美智子さんが水無瀬のお姉さんだつて知られたくなかったわけで。  
・・・富谷君が誰にも言わなければいいんだけど。いやもうどう  
しよう。

ノートを取り出している所で、ふと斜め前に気配を感じて僅かに視線をあげた。

水無瀬が挨拶をして来る女の子達に笑顔を振りまきながら席に腰を降ろしていた。そんな挨拶を返された女の子達は至極嬉しそうにしていた。んー、学校一のモテ男に笑顔で挨拶されちゃあ誰だつて悩殺されるよねー。因みにこれは棒読み。

・・・しかし、まあ、いつ見ても完璧なほどの猫かぶりだね。俳優としての才能があるよ、あんた。もちろん美智子さんも。

やれやれ、と溜息をついてノートを見ると、今日の時間割りを見て頬が引きつった。

・・・・・よりこよつて一時間田が物理かよ・・・・・。これは最早神様からのあたしへの罰としか思えないねー。水無瀬とあたしが付き合つてゐるつていう噂が絶えてるわけじゃないとと思うから、相変わらず美里ちゃんとは微妙な関係だし、水無瀬との関係は若干復興したとしても（若干ね。若干）、今度は富谷君と氣まずくなりそうだし。いやなんないよ！ 断じてなんないよ！ ていうか絶対なりたくない！

うわああ・・・、という表情を浮かべていると、コンコンと音がして顔をあげた。水無瀬がこちらに足を伸ばしながらあたしの机に足を軽くぶつけていた。注意を引きつける行為だったのか、あたしが顔をあげるとすぐに足を引っ込んだ水無瀬にあたしが眉を寄せた。

「・・・何？」

できるだけ声色に失礼さを出さないようにしたけど、あんまり上手に出来たわけではないらしく、水無瀬が一瞬素の憎たらしい笑いを浮かべそうになっていた。寸での所でそれを押しとじめてから口を開けたのだが、それに続くはずの声が出ない。ん？と首を傾げていると、水無瀬の視線が一瞬だけあたしの右側に流れた。

つられてあたしも右を見ると、稔が必死に紙に何かを書き込んでいた。しかし稔が朝から勉強するわけはないから、つまりそれはあたしと水無瀬の会話を盗み聞きしているとバレない様にするための「ごまかし」ということかしらね。

「稔？」

呼びかけると、シユバツとともに「」と速さでびっくりしたよをつけた顔をあげた。

なんだよその速さ。即ちがびっくりするよ。

「え、は、何？」  
「…何してんの？」  
「…何が？」  
「盗み聞きとはまた悪趣味だね」「なーに言つてんのよ、彩那。私が盗み聞きなんてするわけないでしょ？ 勉強してんのよ、勉強」「…」「…」

「…」

な。

小さく息を吐いてから再び水無瀬を見上げると、先程の女の子達に向けていた惱殺スマイルを浮かべてあたし達の会話を聞いていたようだつた。

．．．くつそかつこいいなお前は本当に。認めるのも癪だけど。

「また後でもいい？ 水無瀬君」

「うん、別にそんなに大事な話じゃないからいいよ

訳：

『後에서도いいよ、水無瀬』  
『お前絶対聞けよ。すっげー大事な話だから聞かなかつたら絞めるぞ?』

．．．ちょっと訳ミスったかな？ まあいいや。大体あつてると思つし。

あたしは大きく息を吸つてから稔と一緒に理科室へ向かう。そんなあたしの様子に稔が眉を片方あげたけど、何も言つ気はないあたしの気持ちを察してか、肩をすくめただけで特に質問攻めはしてこなかつた。

一時間目だから理科室は開いていなくて、仕方ないから明美先生が来るのを待つために物理の生徒達が談笑しながら教室の前に群がつていた。あたし達の物理のクラスは人数が二十五人くらいいるから、この狭いスペースで溜まるのは非常に窮屈だ。

好きな人はいないと思うけど、あたしつて狭い場所は大嫌いなんだよね。閉所恐怖症つてわけじゃなくて、人混みとかが苦手なだけ。

仕方ないから壁に寄りかかると、斜め前に水無瀬が現れた。いや、現れたという表現がぴったりの登場の仕方だったよ今の。おかげでめっちゃびっくりしたんだけど。

稔が友達の果鈴と話し始めたのをいいことに、水無瀬がくいっと顎をしゃくった。

「……お前、昨日うちに来たんだって？」

少しだけ人混みから離れてから水無瀬が囁くようにそんなことを言うと、驚いて瞬きを何回か繰り返してしまった。いや、まさか素のまま話しかけて来るとは思わなかつたし……。

っていうかお前、知り合いが半径五メートルに入つたら優しい水無瀬愁也にスイッチオンするとか言つてなかつたっけ？ 今の所半径二メートルぐらいなんだけど。

「ぐん、とあたしが小さく頷くと、そうか、と水無瀬が呟いた。

「何？なんか悪かった？」

「……いや、やうじやねえんだけど。なんか……」

「？」

らしくもなく水無瀬が言葉を濁して、あたしは首を傾げた。

なんだか迷つてる様に視線を彷徨わせてから、小さく息を吐いた。

「……うひの母親の話を聞いたんだって？」

「……あ……えと、うん……」

「……」

い、いけなかつたんだろうか？

「ごめん、聞かない方がよかつた？」

「……いや、別にお前は俺のこと知ってるからここんだけビセ、  
その……」

「……別に誰にも言わないよ？」

「それも分かつてる」

「……じゃあ何よ」

さつさと言わんかーい、的な視線を送り込むと、再び水無瀬が息を吐いた。

「……変な気を遣わないで欲しいんだよ」

「…………変な気……」

とは一体どういった意味？

「……だから、なんか、母親のことを知る奴って、大抵俺と姉貴にすつげえ氣を遣うようになるんだよ。俺達は別にあいつが出て行つたことに対し悲しんでるわけじゃねえから、やうに「ことをやられるとすつげえ迷惑なんだよ」

「……そう、なんだ……」

普通ならそうなるだらうな、と思つ。家族の誰かが何も告げずに出て行つてしまつたことがわかれば、誰だつて氣を遣つ。もしもあたしの周りの友達にそんな子がいたら、あたしは必ず氣を遣つだらう……。

正直言つてあたしも水無瀬と美智子さんに『気を遣つ』といふだつたし。

「……姉貴が昨日言つてたんだけど、お前とはすぐ仲がいいから変に気を遣つてほしくないらしいんだ。俺もそう思つた。だから……」

「…………そりゃ、それまで言われいや……」

あたしが呟くと水無瀬が顔をあげた。安心しきった表情になつたことに対するちょっと驚いたけど、その後に水無瀬が小さく笑つた

のを見てまた驚いた。

．．．水無瀬が普通にあたしに笑いかけてくれたことって、あつたっけ？　いや、あの、憎たらしい笑顔とかは抜きにして。

「助かる、悪いな

「う、うん」

「遅れてごめん！！！　鍵持つて来たよーーーー！」

動搖しまくりのあたしが頷くのと同時に明美先生の張り上げられた声が聞こえた。全員がその声がした方向に振り向くと、明美先生が全力疾走でドアの所まで走りよっていく。

「先生おそーい！」

「いつまで待たせるつもりだよ」

「もう五分以上待ってるんだけどー？」

「えーいうるさいぞ！　抜き打ちテストをやつてほしくなれば黙つて入りなさーい！」

「げえ、先生の鬼！　などと声が飛び交いながらみんなが教室の中へ流れ込んで行く。あたしも苦笑を浮かべて人の波に乗ろうとする

と、ふと一人の人物がこちらを振り返っているのを見て、うつと息を詰まらせそうになつた。

振り返っていたのは美里ちゃんと、富谷君だ。じつとこちらを見ていたけど、あたしのことを見てるわけではなかつたらしい。二人

の視線は静かにあたしの右後ろにいる水無瀬に注がれている。あくまでさりげなくだけ、振り返ってるのがあの二人だけだから、逆に目立つっていうか。

少し目を丸めてあたしが水無瀬の方を振り返ると、

「……お前、また何か厄介ごとに俺を巻き込んだんじゃねえだろうな」

ボソッと聞こえるか聞こえないくらいかの声量で言われた。  
ええまあ、『また』という言い方は心外だけど、確かに巻き込んでます。

他のクラスメート全員がこちらをチラチラと見るくらいに、あたし達の班の空気は重いものであつたらしい。普段の明るいムードメーカーの宮谷君は殆ど喋らず、美里ちゃんもたつたの一、二回あたしや水無瀬に質問をするだけだ。あたしと水無瀬もこの重い雰囲気が何から來るのか分かりきつてることもあるって、あまり話さなかつたけど……。

・・・キツイ！ キツイよこの空氣…！

特に今日は実験はなくて、ただ先生の言つ事に耳を傾けながらノートをとるような形だから、ずっと四人で動かずこの班に座つてることとなる。あああああああもう逃げ出したい。本当に逃げ出したい。重すぎるよこれ・・・っ！

頭を抱えたまま机に突つ伏したくなつたけど、それはそれで状況が悪化するような気もするからやめたほうがいいかも。

心中大きな溜息をついてからふと視線をあげると、水無瀬がじつとこちらを見ていた。

驚いて目を見開くと、何かを伝えたいのか、水無瀬の視線があたしの左側に座つている宮谷君に向回かいつた。

『おい、何があつたんだよ』

と田で訴えられたあたし。

・・・え、なんて（田で）返せばいいわけ？

『何がよ

『何がじやねえよ。お前と宮谷の間に何かあつたんだろーが嫌だなあ水無瀬君。そんなことあるわけないでしょ』

『告白されたのか？』

『つむつせえよその口縫い付けるだ』

『そうか。ついに言われたのか』

『うるつせえよついてどうこうことだよ』

『それでお前が断つて気まずくなつたんだな

『つむつせえよ断つてねえよ』

『まあお互い宮谷の気持ちを知つちまつたつてところだろ』

『つるつせえよ海に沈めるぞ』

とまあこんな感じに田代の会話を繰り返している所で、明美先生が声を張り上げた。

「はい。そこで目で会話してるトップツリー！ 頭がいいからつて私の授業から逃げられると思わないでよね！ 一人とも黒板にあるこの問題を解いてもらうわよ！」

グルンツと一緒にあたしと水無瀬が全員の注目の的になつた。あたしと水無瀬の後ろにいる美里ちゃんと宮谷君も顔をあげてあたし達を見た。

席から立ち上がりながら素早く水無瀬を一睨みすると、注意しないと分からぬいくらいの動作で肩をすくめた。  
後で絶対殺してやるこいつ。

黒板に書いてある復習のための質問は重力についての問題が一つと速度についての問題が一つ。お互い見合させてからあたしがチョークを手に取った。水無瀬も同じようにチョークを手にもつと、あたしに向かって猫がぶり水無瀬君の笑顔を浮かべて来た。

「有賀さん的好きな方を選んで良いよ」「そればどーもありがとついでこまゆー」

学年一位の余裕を見せつけやがつて！ あたしだってどっちも解けるんだよバカやううーー！

と叫びたい気持ちを押し殺して、あたしの前にあつた速度の質問にチョークを走らせて行く。目の端で水無瀬がふつと笑ったのを捉えてから、あいつも自分の前にあつた重力の質問に取りかかった。あたし達が解いて行つている間に先生が生徒の質問に答えて行く。話し声が増えたのをいいことにすぐに教室中の人達が話し合いをはじめた。耳をすますと勉強とは関係のない会話をしている生徒の話し声が聞こえる。

「 . . . あの一人つてやつぱり付き合つてんの？」

「違うと思うよ。美里も否定してたし」

「でもあいつつて水無瀬のことが好きだから否定しただけなんじゃねえの？」

「確かにそれもあるわよね . . .」

「ところで田での会話ってなんなのよ」

「そのまんまだろ？」

「何よそのまんまつて」

「つまり見つめ合つて会話してたつてことよ」

「じゃあやつぱ付き合つてんのか？」

「そうこうじとかなあ . . .」

ボキッと、チョークの先が少しだけ折れた。

隣にいる水無瀬がチラッとあたしを見たと思うと、今の会話を繰り広げていた班に視線をやつた。それからふんっ、と鼻を鳴らしながらあたしが睨みつけたけど、水無瀬はそのまま顎をしゃくった。

「……」うちの班の方が酷い」と言つてゐるが

ボソツと呟かれて今度はもう一つの班の方に注意を向けた。

「あいつらも、あれか？ やつちまつたのか？」

「まさか！ 付き合つて間もないって聞いたけど？」

「俺は一人が水無瀬の家にいるのを見たつていう噂を聞いたけど」

「げえ、マジかよ？」

「あたしは逆に彩那の家に水無瀬君がいるのを目撃した、っていう話聞いた事あるよ？」

「それってやつぱり有賀が率先してんのか？」

「まあ、あの水無瀬君が自分から言つとは到底思えないけど……」

「だよなあ……」

「げえ、有賀恐るべし」

今度こそボキッとチョークが半分に折れた。ギヨツとして水無瀬がこちらを見たけど、あたしは出た答えを黒板に殴り書きすると拳を握りしめて一気にその班に向かおうとした。

ダンシ、と勢い良くチョークを置く音に噂していた班がこちらを見た。それからあたしがものすごい形相なのを見て瞬時に顔を恐怖に染める。ギリッと歯ぎしりをしてから一步踏み出した所で、

「有賀つー」

ガツ、と右の二の腕を掴まれたと思つて、名を呼ばながら引つぱり返された。

「何、っ！」

言いながら腕を振り払おうとしたけど、水無瀬が眉を寄せたままあたしを見て腕を離そうとはしてくれない。騒ぎを見たみんなが徐々にあたし達に注目していくのを見て、水無瀬が声を最低限に潜めた。

「てめえが殴り掛かつてどうする・・・っ！」

「あんたねえっ！ あんなこと言われて我慢してられるわけ！？」

対照的にあたしが大声で叫ぶと、今度は先生がこちらを見た。驚いて目を見開いてる。

「あ、有賀さん？」

殺す勢いであたしが噂してた班を睨みつけるけど、水無瀬が一向に腕を離してくれない。あたしが大声で叫んだにも関わらず、水無瀬は尚も声を潜めて叫ぶ。

「殴り掛かつたら肯定してると同じようなもんだ……っ！ 我慢しろ……っ！」

「あんたは我慢できるかもしないけどねえ！！ あたしはあんなことを言われて聞かない振りをすることなんて出来ないのよ！！ 離して！」

「離さない！ 落ち着け！」

水無瀬までもが声を荒げると、先生が慌ててあたし達の間に割つて入つて来る。

「ちょ、ちょ、ちょっとーー一人とも落ち着いてーー！ 何があったのよー！ 有賀さん！」

先生もあたしの腕を押さえ込んで動きを封じようとするが、さすがに先生を振り払おうことは出来ずにはあたしは歯ぎしりをした。動きを止めたあたしに水無瀬が腕を離すと、明美先生が眉を寄せながら心配そうにあたし達を交互に見た。

「どうしちゃったのよ、一人とも！」

「なんでもないです」

必要以上に強く言い放つと、あたしは怒りを充分ににじみだしてまま席に戻るために振り向いた。その動作に明美先生も腕を離してくれて、水無瀬が小さく息を吐いた。

「すみません、先生。あそここの班が有賀さんに対する失礼な発言してたから、有賀さんが怒っちゃって」

水無瀬が言うと、先生がまあ！ と言つてから腰に手を当てて指された班を見た。ビクッとその班員四人が肩を震わしたけど、それが明美先生から怒られるに対してもなく、水無瀬が四人を睨みつけていたからなんだと気づいていたのは、きっとあたしだけだった。

尊も度が過ぎると笑えない（後書き）

何気に明美先生が一番懐かつたりする。

「」今まで読んでくれてありがとうございます。

## 四角関係とか冗談じゃない

ムカムカムカムカムカムカという効果音が聞こえるぐらいにあたしは今すぐ怒ってる。いやもうすぐなんか遙かに飛び越えて怒つてる。これだけの怒りを一人の人間の中に溜め込むことが出来るのに驚くぐらいに怒つてる。

つまりまあ、一言で言えば、

あたしに話しかけるな。

だけどいくらオーラで言つても話しかけて来る奴は必ずいる。いや、こいつの場合はあたしの周りの空気がどんな意味をかもし出しているのかを分かつてる上で話しかけて来てるわけなんだけれどね。いい度胸じやねえか！ しかも学校で堂々となるとてめえふざけてんのか！？

現在昼休みである。

一時間目物理のクラス以降、あたし達に接触を図った生徒は一人たりともいない。それこそ物理を取っていないクラスメートまでがそうだから、まあ、うちのクラスは空氣を読むのが非常に上手ということだが分かつた。

だがしかし、そんなことはどうでもいい。

なぜならば、あたしは今中庭で水無瀬と二人きりでいるからだ。なぜ二人きりなのかつて？ そりやーあたしが穏と楽しく話しながら（え？ 全然楽しくなかつたと思つて？ エーいやかましい）お弁当を食べていたのにあいつがいきなり屋上に乱入してきて、『有賀さん、ちょっとといい？』とか言つて強引にあたしを引っ張つて

来たからであつて、決してあたしの意思についていったわけではない。あたしの意思でついていつたわけではない。ここにポイントは重要。

中庭に連れて来たのは屋上には人が結構いたからで、ここは田が当たる割には結構狭いスペースで人があんまりこないからだ。．．．だけど教室の中で弁当を食べている一年生には上から丸見えである。あたしは溜息をついて腕を組んで壁によりかかつた。水無瀬は後ろに重心を傾けながらベンチに座っていた。  
．．．．．つてあんたが誘つたんだからなんか言えや！－

「．．．ちょっと、話があつたんじゃないの？」

あたしとしてはひとつと話をして終わらせたい。なぜならこの場面を一階にいる一年生に見られたら終わりだからである。いや、つていうか一年生じゃなくとも変な噂が出回つてゐる以上、誰に見られても好都合ではない。

あたしの言葉に木々を眺めていた水無瀬がん？ といふ感じであたしを見た。

．．．．ん？ ジヤねえよ！

「話。あつたんじゃないの？」

せりきよりも強く言い放つと、水無瀬が少し周りを見回してから息を吐いた。

「話があんのはお前の方じゃねえの？」

「は？」

いくら人はいないと言つても、学校内で警戒しているのか、普段よりも水無瀬の声は幾分小さかった。

「人の」を散々睨みつけやがつて。俺は何も悪いことはしてねえ  
つつの」

「 . . . . .

いやいやいや、そもそもあんたが何も言わなければあたしが噂してた班に殴りかかることもなかつたんだけど。

つてか一日中睨みつけていたことがバレていたか . . 。いやだからつてなんでこのタイミングで呼び出すの！？ 今日だだでさえあんなことがあつたんだから接触はしないべきでしょうよ！－！  
と、顔に現れてしまったのか、水無瀬があたしを見て眉をあげた。

「あんなことが起つた口に俺達がいきなり接触を絶つたら周りの奴らはなんて言うと思う？」

「 . . . . . 『やっぱり付き合つてるから怪しまれない様に距離を取つたんだ』、的な？」

「分かつてるじゃねえか」

「いや、だけど、なんていうか、それでもあんたと一緒に見られるのは嫌だ」

「富谷と狭川か？」

「 . . . . . 」

セツヒーは本当に嫌い。

「 やつぱつせられてたんだろ」

「 . . . つるさこなされてないよ」

「 じゃあ今日のお前らの空氣はなんだよ？ 三時間田の化学でもまたたく回り空氣だつたぞ」

「 あなたはどうして人の空氣なんか気にしてんのよー？」

「 面白いから」

「 こつこつか絶対にぶっ殺す。」

「 告白とかされてないから！」

「 でも気持ちは知つちまつたんだひ？」

「 . . . . . 」

「 こいつって、まさか密かに情報屋だつたりするんだろうか。いくら洞察力がいいからつて、なんで簡単に人の気持ちとか全部分かることができんのよ。物理の時もついにいわれたか、的なこと言つてたんだから、富谷君があたしのことが好きだつて気づいてたんだらうし . . . 」

「え、あ、いや、来てよ？」

「あんた、それ、美智子さんから聞いたんじゃないでしょ？」「

「…………」

黙り込んだ。

「…………」

「ちよつと待つよおおお…… 美智子さんどれだけあんたに情報あげたの……？」

「…………まあ、昨日お前らが話してた大体全部の内容」「マジかよおおおおお……」

「じうじへ…………」じうじて肝心な所で美智子さんいつも抜けてるのよ…… いや、まあ水無瀬はどうせ分かつてたっぽいからいいけど…… あのがガールズトークだと思つてたのはあたしだけですかそうですか！

「あああああ、と両手を覆うあたしに、クックッと水無瀬の笑い声の聞こえて来た。

「まつ、高谷がお前のことが好きだったてこのには前々から気づいてたから恥ずかしがるほどのことでもねえだろ」「

「…………」

「こつ今前々つて言つた？」「

「ちょっと待つてよ。あんた、去年はあたしと富谷君と違つクラス  
だつたでしょーが。なんでそんなのが分かるのよ」

「別に去年からって言つたわけじゃねえだろ？ お前は知らねえだ  
ろ？ けど、俺と富谷は通つてる塾が同じだったんだよ。俺は去年の  
途中で止めたけど」

「……塾？」

「そつ。別に仲は悪かねえからよく話したんだけど、お前の話題が  
よく上がったんだよ。んで学校でのお前ら見てちや結構バレバレだ  
ったわけ」

「…………や、それってさ、いつ頃、くじい？」

富谷君が塾に通つてるのは知つてゐる。中学にいた頃もずっと塾に  
通つてたけど、水無瀬も中学の間同じ塾に通つていたとなると……。

あたしの表情を見て何を察したのかは知らないけど、ニヤツと水  
無瀬が怪しい笑みを浮かべた。

「俺は中一からあいつと同じ塾に通つてゐるけど、その頃からお前は  
よく話題に上がつてた」

「…………えつ、つていつか、あんた、高校入る前から富谷  
君とは知り合つたわけ？」

「まあな」

カラッて言つたよ」こいつ。

「げえ……言わぬきや絶対に分かんないよ……。つてまさか

あんた塾でも猫かぶつてたの?」

「当たりめえだろ?」

ソウテシタネ。スリマセンネ。

「……とこりで、さつきから富谷君の話ばっかりだけ、あんた美里ちゃんとはどうしたの?」

「何が?」

「……え、だから、告白とかされてないの?」

「なんで俺が告白されるんだよ」

「いやあ……だってあんた今『富谷と狭川か?』って言ってたし……。美里ちゃんと何かあつたんじゃないかと思つて……。今日もなんか全然話してなかつたし」

「あいつとは何もないし、この先どうにかなるつもりもない。話してなかつたのは俺とお前の噂のせいでいろいろ想つことがあるからだろ」

「……だといいんだけどなあ……」

曖昧な返事をすると水無瀬が眉を寄せた。

「なんだよ」

「いや、あのや。あたしの口からあんたと何もないって言つたわけじゃないんだよね、美里ちゃんに。あくまで人伝だったから、ちゃんと分かつてくれるのかなあ……つて」

「聞けばいいじゃねえか」

「そんな簡単に聞けたら苦労してねえつつの。つてか話つてそれだ

けだつたら帰つていい？ 上の一年生がこいつらを見るのはかがす  
つごく怖いから

あたしの言葉に水無瀬は何回か瞬きをしてからスッと視線を上にあげた。そこではじめて一年生がいたことに気づいたかのようにあ、と声を漏らした。

てめえが気づかずに入素であたしと話してゐわけがねえだろーが！

あたしが苦虫を噛み潰したような表情でそんな水無瀬を見ると、彼の視線があたしの元へ戻つて来た。

「見られちゃまずいのか？」  
「…………じゃあね」

だめだ。こいつの危機感とあたしの危機感が全く違うからこれ以上話しても無駄だ。

あいつの場合は『付き合つてないんだから別に一緒に見られても問題はない』って思つてるようだけど、普通だつたら『付き合つてるって思われる以上、一緒にいたら付き合つてるって思われるに決まってる』って思うわけで。

…………もうほんつと疲れる。

溜息をついて踵を返すあたしに、おいつ、と言いながら水無瀬が追つてくるのが聞こえる。

中庭から建物内に入った所で、あたしは再び息を吐くと追いかけ るな！ というために振り向こうとした。

したけど、その前にこちら側に歩いて来ている一人組を見て動き

が止まる。止まつたあたしに追いついた水無瀬も、その一人の姿にチツ、と舌打ちをしたのが聞こえた。

「……もハヽ言つまでもないけど、」口ひに向かって歩いて来ているのは富谷君と美里ちゃんだつた。

そんな一人もあたし達の姿を見つけて驚いている様子だ。

「……まさに尊をすればなんとやらだな。

「……有賀、水無瀬……」

話せる距離まで来て富谷君が立ち止まってあたし達の名前を呟いた。富谷君の少し後ろについていた美里ちゃんがやりにくそうに視線を逸らしている。

「……いやだなあ、」口ひ氣。

「富谷君も美里ちゃんも、こんな所でどうしたの？」

「……俺達は購買に。委員会があつたからお腹食べるのが遅れたんだよ。そういうお前らは？」

「えつ

しまつたー。口ひらへんにいる人なんてなかなかいないから聞いたんだけど、瞬時にそっくりそのまま返された。

言い訳を考えるために必死に脳の中を探しまわっていると、隣で水無瀬が小さく息を吐いたのが聞こえた。

「俺達はちょっと相談してたんだよね、有賀さん」

「あ、う、うん」

さすがスラスラと嘘が出る男！ 不自然な沈黙に陥る前に絶妙なタイミングで嘘を入れて来た！ あ、いや、案外嘘でもないのかな？ 水無瀬の言葉に富谷君も美里ちゃんも困惑した表情を浮かべた。

「相談？」

「…何の相談？」

「ああ、ほら、今日の物理での件でね」

「今、なんか、俺達についての噂がいっぱいまわってるでしょ？」

それについてどうじょうかな、っていう相談」

…だ、大体合ってる。

あたし達の言葉に美里ちゃんはそっか、と呟いてから、大変だね  
も付け足してくれたけど、富谷君は無言である。

やめてくれ。本当に無言とかやめてくれ。

もう本当この四角関係何！？

「…有賀つてさ、」

「あ、え、何？」

富谷君が口を開いて何かを言おうとしたけど、一瞬だけ美里ちゃん

んに視線がいつてから、その口から言葉は発せられなかつた。ちよつとしてからやつぱいい、と言つて首を振ると、じやあな、と言つてそのまま美里ちゃんと一緒に購買に向かつてしまつた。

．．．美里ちゃんを見たつてことは、水無瀬関係だらうか．．．。  
．．．多分美智子さんのことについてだらうな．．．。

充分に距離がとられてから、水無瀬が盛大に溜息をつくのが聞こえた。

「何を聞きたいかは狭川の気持ちと同じぐらにバレバレだな

「．．．ちよつと」

「なんでお前と俺の姉貴が知り合いなのか知りたいんだろ？　あい

「

「．．．．．．」

「いやん、とあたしが頷くと、再び水無瀬が溜息をついた。

「聞きたいんだつたらとつとと聞けつつの。イライラする」

「水無瀬つ！」

「俺は教室戻る。お前は後からついてこよ」

「はっ！？」

「一緒に見られたくないのはお前じゃねえのかよ」

あたしが声をあげると、水無瀬が呆れた表情をして振り向いた。

「…………」

眉を寄せて視線を逸らすと、ふんっ、と鼻で笑つてから水無瀬が教室の方へと向かつて行つた。私は宮谷君と美里ちゃんが行つた購買の方向をしばらく見てから、溜息をついて、あたしも教室へ戻るために歩を進めた。

教室に戻ると、ずいぶんと怒りが鎮まつたのを感じ取つたのか、稔が気楽そうな感じで話しかけて來た。水無瀬があたしと稔との昼食中になたしを引き離したのを見ていながらも、彼のことを話題に出さなかつたのはこの子の配慮であると考えておこづ。

水無瀬の方も同じ感じで、ちょっとだけツンツンしてゐる様子もあつたけど、朝とは打つて変わつて何人かの女子と会話を繰り広げていた。若干笑顔が強ばつてる気がするけど、あいつ、ああいう時は猫かぶつてるの嫌だろうねえ。あたしだつたら絶対に嫌だし。

五時間目、六時間目と、特になにも起きずに時間が流れて、気づけば放課後になつてゐた。稔を待つことが日課となつてゐるあたしは今日ばかりはずつと教室にいるのはつまんないと思つたから、学校をウロウロしようと思つた。

いや、多分氣のせいだとは思つただけど、今日はどこに行つても

誰かに見られてる気がして殆ど座ったままだったんだよね。だから  
気晴らしに誰もいない学校の中を歩き回るのうかと。ついでに職員室  
に寄つて明美先生に謝つて来た方がいいかなあ・・・。結局あの後  
は怒り度MAXだったから全然明美先生と話してなかつたし。  
よしひ、そういうふうと思つて階段を降りるために角を曲がりうつ  
した瞬間、

「有賀のことなんだけどさ」

ショバッとものはすゞい速さであたしは柱に身を隠した。

・・・今の声は・・・富谷君・・・。ちょっと遠めに聞こえるつ  
てことは、階段を上がって来ているのか、下の階で話しているのか  
・・。

「有賀さんがどうかした?」

・・・・・・・・・・水無瀬・・・。

トンツ、トンツと階段を上つて来る音が聞こえる。声の大きさか  
らして上つて來てるのは水無瀬だ。

つて、いや、ちょっと! ここで隠れてるあたしを見られてはす  
ごくすごくまずい! 教室に戻つても良いんだけど、すぐそこまで  
水無瀬が來てるから、今動いたら絶対に勘づかれるよ! や、ヤバ  
い!

「お前つて有賀のこと好きなの?」

トーンツと足音が止んだ。ホツとしたけどそんなのもつかの間、富谷君の言葉にあたしは口あんぐり。窓に薄く移つてゐる水無瀬を盗み見ると、同じく田を大きく見開いてる。

「……っで、ここからだとあたしは一人のことが窓に反射してるからよく見えるけど、あっちからは見えないんだな……。仕組まれたかのように都合よくここにいるよねえ、あたしも。

とか呑気なことを考へてるのはただちよつぴり現実逃避に走りたいからである。

田を見開いていた水無瀬が、スッと田を細めてから富谷君の方へ振り向いた。

「……やつこいつ富谷！」「有賀さんが好きなの？」

「……だつたら悪いかよ」

「……え、ちょ……つ……！」あたし超気まずい場所にいるんだけど……ちょ、もう教室帰つても良いですか!? 水無瀬がもうちょっと離れてくれたら確実に聞かれずに走つて帰れると思うんですけど……そのまま階段を降りてくれませんかね水無瀬君……！  
とあたしの心の叫びが聞こえるはずもなく、富谷君の言葉に水無瀬が息を吐いて壁に寄りかかった。

「俺と有賀さんはなんでもないよ  
「俺は付き合つてゐるのかを聞いたんじゃない。好きなのかって聞いたんだ」

「……好きと嫌いだったら好きだけどね」

「…………あの……水無瀬を嫌つてる自分からしたりすつぐく複雑な一言であります。本当に。しかも富谷君がそんな水無瀬にだんだん苛立つて来てる……つーはつきり答えてやれよ！本当にあいつは意地が悪いな！」

「俺が言いたいことは分かってるだろっ」

「……恋愛対象としては別に好きじゃないよ」

好きだつたらこつちが困るわ。  
富谷君の眉間のしわが寄つた。

「……だつたらなんで最近お前と有賀関連の噂が増えてるわけ？  
前から何回か噂は聞いたことがあつたけど、こんなに流れたのははじめてだろ」

前も噂なんてあつたのかよ！？ とか驚愕に満ちた表情を浮かべていると、水無瀬が呆れた表情を浮かべたのが分かる。

「そんなの俺が知るわけないでしょ？ 俺と有賀さんが学校外で一緒にのを誰かが見て、そこからいろいろ作り話が発展したんじゃないの？ 噂なんて殆どそうじやん」

「……じゃあ、」

先程よりも静かに富谷君が口を開いた。

「どうして有賀は、お前の姉貴と知り合いなんだよ」

「…………」

壁に寄りかかっていた水無瀬の目が少し見開いたのが見えた。あたしの目も大きく見開く。あたしじゃなくて水無瀬に聞いちゃうの！？ そこ水無瀬に聞いちゃうの！？

水無瀬の視線がチラツと富谷君に向いた。

「…………俺だつて良く知らな」よ。いつの間にか姉さんと有賀さんが知り合いで、俺は何も知らされてなかつたつて感じ

「…………」

白水無瀬君（白水無瀬とは猫をかぶつてる時を指します）だと美智子さんへの呼び方も変わるものか……。

水無瀬が答えると、ギリツと富谷君が歯ぎしりをした。

「…………俺は苛立つてんだよつ。お前は有賀のことが好きでもなんでもないのに、ああやつて尊が出回つて有賀が振り回されることはいつ。あいつはあんだけ悩んでんの」「今日だつてお前は飄々としてたじやねえかっ！」

「…………」

怒りを露にする富谷君とは反対に、水無瀬の表情は変わらない。それが余計癪に触つたのか、富谷君が拳を握りしめた。

「あいつは殴り掛かるうとしてたんだぞ！？ それだけ酷いことを言われたってことなのに、お前は殆ど顔色を変えずに止めてたじゃねえか！ あんだけ叫んでて、あれだけ怒つてたっていうのにお前は？」

「じゃあそのまま殴り掛けたり？」

言葉が遮られて富谷君が言葉を詰ませた。

予想外に水無瀬がドスの聞いた声を出したからだ。水無瀬が言葉を続ける。

「そのまま有賀さんが殴り掛けたらどうなつてたと思つ？ 本当に違うから殴り掛けたんだつて人は思うかもしないけど、殆どの場合はムキになつて否定をすると肯定だととるバカが多い。別に俺達は付き合つてないんだから俺はどうでもいいんだけど、有賀さんはああいうのが許せない質たちだから、性格的に余計疑われる。そのまま俺が有賀さんに殴らせてたら、やつぱり付き合つてるんだつて周りの人と言われて、最後に傷つくのは誰だと思つ？」  
「…………」

富谷君が黙り込んで、あたしも目を見開いてしまった。  
…………そんなに…………考えててくれたとは…………。

水無瀬が苛立つたように頭をかいた。

猫かぶつてるのに怒りを露にする水無瀬はあんまり見た事がないから、なんとなく新鮮な気がする。こんなこと思つてる場合じやないけど。

「話したことってそれだけ?」

いらだちを込めた水無瀬の言い方に、しかし、宮谷君は終わってない、と一言。

水無瀬の眉が寄る。

「……お前は、本当に有賀のことはなんとも思つてないのか」

「しつこよ。思つてないって言つてゐるじやん」

「それじゃあ、有賀が他の誰かと付き合つたら、なんとも思わないつて言い切れるのかよ」

瞬時に水無瀬の目が鋭く変わる。

「…………どうして言い切れないとこいつの?」

「…………お前らは、傍から見てもお互にこのことを大切にしてゐるよう<sup>ひかむすんで</sup>に見えるから」

「…………」

・・・・・宮谷君も、そんなこといつのかよ・・・つー！

「大切？」

「普段の何気ない会話とか、特に物理の時の班では、なんつーか親密やつにしてるじやねえかよ」

… してゐるの?

「……今日の 時間だから、お互いのじとちゃんを分かつてた  
つまこーし」

—

これはさすがの水無瀬も黙り込んだ。  
いやいやあたしも同じ立場  
だったら黙り込んでるよ。

だらう?

「……有賀さんは勉強関係で普段からよく話すし、性格も親近  
間が湧きやすいからそういう思つだけじゃないの？」

「じゃあなんとも思つてないんだな」「

「何回言えば分かるんだよつ

・・・水無瀬が語尾を荒げたけど、以外と富谷君はそれに対しうるさいはしなかった。

たにとそんなことも吹き飛んでしまは、既に西谷君の次の言葉は

「……じゃあどうして、この前有賀とキスしてたんだよ」

…………神様。いつそのこともひつあたしを殺してください。

四角関係とか冗談じゃない（後書き）

タイトルミスつたかな・・・。あんまし四角関係な感じが、しない・・・。  
まいっか！

いいまで読んでくれてありがとうございます。おー

嫌じゃなかつたとか断じて思つてない。思つてない。（前書き）

なんだかすゞじへ長くなつた。後半だけ微妙にR15なのだらうか  
？ といつかR15がどじからどじまでなのががよくわからない。  
.。

と、とにかく、苦手な方はどじ注意をー 性的描写ではないとだけ  
言つておきますー。

嫌じゃなかつたとか断じて思つてない。思つてない。

硬直するあたし。硬直する水無瀬。そんな水無瀬を睨む高谷君。  
…………嘘でしょ……。

水無瀬がゆづくつと高谷君の方に首を向けた。

「……キスつて？」

と・ぼ・け・た！ とぼけたぞ!! 「」は『とぼけんじや  
ねえぞ!!』とかお約束のことを言われるのを待つていいのか、水無  
瀬君よ！

案の定高谷君は歯ぎしりをすると、より鋭く水無瀬を見据えた。

「とぼけてんじやねえよー 僕は見たんだ！」

「……何を？」

「」の前、お前らが一人とも「」捨ての当番だった時に、お前が有  
賀を壁に押し付けてんの見たんだよ……」

「……」

「」の発言にはさすがに水無瀬が僅かに目を見開いた。

だけどあたしはパーティクである。

見られてたああああああ！？　どうして！　いつ！　どうやって見られてたの！？　どこからみてたの！　っていうか見られてるんだつたらどうしてもつと早く言わないのよ！　富谷君が問いつめてくれば変な言い訳でも考へつけたかもしれないじゃん！

．．．いやそれは無理だけど。無理だけど！　見られてたんだつたら水無瀬が謝つて来た後でも縁を切るために必死に遠ざけてたかもしれないじゃん！　決して富谷君のせいにしてるわけじゃないけど！　かんつべきにあたしと水無瀬のせいだけど！

頭を抱えて思考がグルングルンとして安定しない中、水無瀬は至つて冷静に富谷君と会話を繰り広げていた。

．．．お前の冷静さは一体どこから来るんだよ。こんな状況で逃げ場なんて皆無に等しい状況でどこから冷静さを引っ張りだしてくるんだよ！

「．．．だつたら何？」

「は？」

「俺がキスしてたとして、俺になんて言つてほしいの？」

うつわつ！　うつわつ！　開き直つたよこいつ！　開き直りやがつた！

はあ！？　という表情を浮かべた富谷君に全力で同意した。

「てめつ！　好きでもない相手を壁に押し付けて、その上無理矢理キスしてて、その台詞はねえだろ！…！」

「無理矢理じやなかつたら？」

「……何だと？」

「有賀さんが同意してたとしたら？」

何を言い出すのこいつ。ねえ、何を言い出すの。

「……同意なんてしてるわけがねえだろ」

「どうして分かるの？」

「……あいつはお前のこと嫌つてんだろ。大体、あいつの性格上、そんなの同意するはずがない」

水無瀬が目を細めた。

あたしは富谷君の言葉に心中で全力に頷いた。さすが！ よく分かつてらっしゃる！

「だから俺が無理矢理キスしたと……

「それ以外に何がある」

ふう、と水無瀬が溜息をついた。

「……つていうか、さつきからこいつ全然自分の素を隠そうとしてないんだけど……。富谷君もそれに対しても一切ツッコミは入れてこないし。あたしに散々脅しかけてまで口止めしてたくせにその緩さはなんだよ！ バレてほしくないんじゃねえのかよ！」

眉間にしわ寄せて睨みつけて来る富谷君に、水無瀬はただスッと

視線を合わせただけだった。

「……その通りだ、って言つたら?」

バキイツー!

水無瀬の顔に容赦なく宮谷君の拳が当たった。あたしはハツと息を呑んで口元を覆うと、そのままあまりの衝撃に後ろに飛んだ水無瀬とバツチリ目が合つてしまつた。

あたしの姿に瞬時に水無瀬の目が大きく見開かれた。口の端から血が垂れているのを見てあたしも目を大きく見開く。あたしに対しても水無瀬が何かを言おうとした様子だったけど、宮谷君がそのまま寄つて来る姿に舌打ちをして立ち上がつた。

「つてえ . . .

「ふざけんじやねえよ! 周りの奴らには優しい振りをしやがつて、本当はそんな奴だったのかよ、水無瀬! —」

振り返ればあたしがそこに立つているのが見えるような位置だけど、今の怒り狂つた宮谷君の目には水無瀬しか映つていなかつた。

水無瀬も水無瀬でキツと宮谷君を睨みつけていた。

「薄々気づいてたんじゃねえのかよ、お前も」

「つー」

瞬時に声が低くなつて口調が変わつた水無瀬に、さすがに畠田君が僅かに動きを止めた。だけどそれもつかの間、全てを呑む込むと殺す勢いで水無瀬を睨みつけていた。

「薄々はな。塾でのお前はもっと口調が碎けた感じだつたのに、ここにいるお前はちつともそんな雰囲気は見せねえから、変だとは思つてたんだよ」

嘲笑うかのように富谷類が鼻を鳴らした。

「はつ、なんだよ。猫かぶつてたのかよ。道理でおかしいわけだ」

「……」

「……下衆野郎が。猫かぶつて全員を騙してると、女に無理矢理迫るような行為をする男だつたのかよ。くそが、幻滅だよ」

「……お前に幻滅された所で痛くもかゆくもねえよ」

「ド、ゴッ、」と今度は富谷君の拳が水無瀬の腹に向かつた。けど、寸での所で水無瀬が避けたから、その音は富谷君の拳を水無瀬が受け止めた音だった。思わずあたしが鋭く息を吸うと、そこではじかれたように富谷君がこすり下へ振り返つた。

□元を覆つて目を見開いていたあたしの姿を見つけると、時が止まつたかの様に一瞬全員が動かなくなつた。

「……あり、が……」

だけじゃはりというかさすがというか、水無瀬が止まった私達の中で最初に動いた。掴んでいた富谷君の拳を離すと、そのまま彼の前から退いた。はつとして富谷君が水無瀬の腕を掴んだ。

「おいっ！ 話はまだ終わってねえよ！」

「有賀がここにいる状態で何を話せつて？」

「…・・・・・つ…！」

水無瀬の言葉に富谷君は言葉を詰まらせた。それから一瞬悔しそうな表情を浮かべたけど、渋々水無瀬の腕を離した。そのままあたし達から顔を背けると、水無瀬が溜息をついた。

「いっ・・・・・つ」

富谷君を見ていたあたしはその声にはつとして水無瀬を見ると、顔を抑えていた左手についている口元から流れた血が予想以上に多かった。

「ちょ、水無瀬っ！ あんた、大丈夫！？  
「対したこと、ねえよ」

とか言いながら思い切り顔しかめてるよ！

見せてつ、と言いながら思わず水無瀬の両頬を自分の手で包むと、それを見た富谷君と水無瀬が目を見開いたのに気づかなかつた。富谷君に殴られたことで口の中に相当大きな切り傷ができてしまったのか、口元には結構な血の量がついていた。この様子だと口の中はもつと酷いな . . 。

水道！ と言いながら水無瀬の身体を翻すと、廊下にある水道に水無瀬の背中を押す。しかめつ面をしながらも口の中の血を洗い流す水無瀬を見ながら、はつとして今の自分の状況を思い返してみた。

. . . あれ。あたし、今富谷君と水無瀬が解いた誤解を、また招くようなことしちゃつてるんじやね . . . ?

そりつと富谷君の方を振り返ると、案の定困惑した表情を浮かべている。

「え、あ、みや？」

「有賀は、水無瀬の猫かぶりのこと知つてたの？」

予想していたことと違つことを聞かれて度肝を抜かれた。

「は？ え、あ、えと、う、うん」

「. . . いつから？」

「い、いつから？ えと . . . い、一ヶ月くらい前、かな？」

瞬時に富谷君の眉が寄る。

「 . . . あんなキスもされてたつてこいつの、誰にも言ひたくないの

かよ . . .

「 . . . . . あ、いや、あの . . . . . 「 . . . . .

誰かに言つたらキス以上のことをやられるとはさすがに言えない。とこいつか、あたしも別にそれが理由でバラしてないわけじゃなくて、猫かぶつてる理由を知つたからには . . . . なんとなく、バラすのはやるせないっていうか . . . . 。

黙り込んだあたしの背後で、水無瀬がバシャバシャと音を立ててからキュッと水道の元を締める音が聞こえた。そのわざとらしい音に富谷君がキツと水無瀬の方を見る。

「 . . . ことん嫌われたぞ、水無瀬。

「そ、それにはいろいろわけがあつて . . . 」

「 . . . . . 信じらんない。こんな奴の事情に振り回されるなんてどこまでお人好しなんだよ、有賀」

「 . . . そ、それは自覚します . . . 」

「 . . . . . 「 . . . . .

俯いてしまったあたしを富谷君がじつと見下ろすのが分かる。黙り込んでしまって、この沈黙に耐えられずにあたしが顔をあげると、富谷君はあたしの目を真つ直ぐと見てから盛大に溜息をついた。

「 . . . あり得ねえ . . . 。俺達ずっとあの猫かぶり野郎に振り回されたのかよ。マジで信じらんない」

猫かぶり野郎という単語に對してあたしも水無瀬も何も言わないと、富谷君はもう一度溜息をついてから踵を返して階段を降りて行く。水無瀬の方を振り返つてから、洗い残していた血を見て再び水流し始めたのを良い事に、あたしは慌ててその富谷君の後を追つた。

下の階につこてまたもう一階降つよつとしてる所を慌てて呼び止める。

「みやたにくんっ！」

ピタッと動きが止まって、そのまま振り返つた富谷君は、やけに疲れきつたように見えた。

「 . . . 何？」

「あ、あの . . . こんな、こんなこと言つのもふざけてるって思つかもしれないんだけど、水無瀬が猫かぶつてるのは他の人に言わないでほしいの！」

「 . . . なんで . . . 」

予想通り富谷君が困惑に満ちた顔を浮かべる。

当たり前の疑問だ。富谷君はあたしと水無瀬がキスしてゐるのを目撃してる。それが水無瀬に無理矢理されたキスだということも知ってる。そんな無理矢理キスされた張本人が、キスをした奴の秘密をバラすな！ というのは、おかしいと思つるのは当然のことだった。  
. . . だけど、

「 . . . 水無瀬が猫をかぶつてゐるには、その . . . 結構複雑な理由があつて、家族とかも絡んで来るから、だから . . . バラさないで欲しいんだよね」

「 . . . . . 」

「あたしがこんなこと言つのもおかしいのは分かつてゐるんだけど、でもお願ひ！ 結構 . . . 結構複雑だから . . . 」

さすがに本当の理由を教えるわけにはいかないから、これしか言えないけど . . . 分かってくれ、富谷君！！

田の前にいる富谷君が溜息をつくのが聞こえた。

「 . . . 本当にどこまでお人好しなんだよ」

「 . . . 分かってるけど . . . 」

「安心しろよ。別に誰かに言つつもりはなかつたし。言つた所で信じてくれる人なんて殆どいないと思つよ？」

「 . . . . . 」

「 . . . それは、確かに一理ある。特に女子にそんな」と言つたらただの男子の嫉妬だとか思われて終わりだらうな . . . 。そこいらへんも含めてあんな優しい猫かぶつてゐんだろうか、あいつは。黙り込んだあたしにふつと小さく富谷君が笑つた。

「 . . . いりじりやられたよ  
「え？」

「……お前と水無瀬が仲いい理由がやつと分かつた気がした」

「……いや、あの、仲良くないし……」

「お前らこそうこいつもちはなくとも、共有の秘密を持つてる以上、話す事も多くなるだろ？」、協力関係も成り立つだろ？。それがいくら無意識だったとしても。だから周りからは仲が良むずに見えたんだな」

「…………なんか、こりこりと」めんね、富谷君

富谷君が苦笑を浮かべる。

「お前が謝る」とはないよ。悪いのは全部あいつだと黙っている」

「……それには同意する」

「はまつ。……じゃあな、仮をつけて帰れよ」

「……ひさ。富谷君もね」

小さく笑つて富谷君が階段を降りて行く。その後ろ姿をしばりく眺めてから、はあ、と大きく溜息をついた。

……とんでもないことになつちゃつたなあ……。

思いながら来た道を戻つて、階段を上つて行くと、柱に寄りかかっている水無瀬がこちらを見た。

「……バカじゃないの？」

「……はあ？」

なんだよその第一声！ 頼み込んだあたしにほかに「う」とはな

いのか！

「バカとはなんだ！ バカとは！」

「富谷と組んで俺が猫かぶりだつてバラせば、信憑性も増すだろ。  
なんでバラそうって思わないんだよ」

「バラしてほしいわけ？」

「そういうわけじゃねえよ

はあ、と息を吐いた。

「あんたにはあんたの事情がある。あたしにはあたしの事情がある。  
いいじやんそれで。言つてほしいんだつたらまた富谷君と組んでバラすけど？」

「……それはやめろ」

ふひひという不気味な笑い声をあげると、

「あ、いたああ！－ 彩那！」

ビクッとあたしも水無瀬も肩が跳ねた。驚いて声がした方へ振り返ると、稔が手を振りながら体操着でこちらを向かって来ている。

「うわあ、すっかり忘れてた……。

息切れながらあたし達の所まで駆け寄つて来ると、あれ、水無瀬君！ と言しながら水無瀬にも挨拶をする。一ヶ口りと瞬時に切り

替わった水無瀬が挨拶を仕返す。そんな水無瀬を胡散臭そうな目で見たい衝動があつたけど、今の所は心の目に任せておこう。

「どうしたの？ 稔。部活終わった？」

「それがさー、今日はなんか特別訓練であたしだけ残るらしいの。だから彩那は先帰つていいよ？」

「えつ？ いや、いいよ、待つよ」

「いいつていいつ！ 本当に六時半ぐらこまであるからさ、そんな時間まで引き止めおくのはさすがに悪いから！ あつ、水無瀬君！ この子のこと送つてやつて！」

「えつ？」

「は？」

と驚くあたし達を放つておいて、稔はじやあねー！ と手を振りながらさつて行く。

．．．嵐のよつな子だなほんとこ。

隣で水無瀬が溜息をついた。

「俺も今から帰る所だし、どうせ道は同じだから送るよ」

「はあ！？ あんた懲りてないわけ！？ あたしとあんたの噂が絶えたわけじゃないんだから、他の生徒に見られたらどうい訳するつもりなの！？」

つていうかどうして人を送ることになるとそんなに律儀になるのよー。

「別に付き合っていないんだからいいだろ？ 帰り道が重なつて勉強の話をしてたとでも言えれば誰でも信じるよ」

「…………」

いや、まあ、確かに学年一位と一緒に勉強の話をした、って聞けば納得はするかもしれないけどさ。遠くから見た人があたし達にその疑問をぶつけずに勝手に解釈したらどうするつもりだよ！とか心の中で叫んでる間に水無瀬はとつと階段を降りて行ってしまってる。

「富谷とのことで話もあるから一緒に帰つても損はねえだろ」

「…………」

「…………それはさすがに一理ある。」

仕方ない、と腹を括つて、あたしは教室に戻つて鞄を掴むと、水無瀬と一緒に帰ることにした。

とあつさりと言つたものの、やつぱりなんとなくこいつと一緒に見られることに抵抗を感じたから斜め後ろについて歩いていた。それが気に入らないのか何回か水無瀬がこちらを振り返つたけど、特に何も言わなかつたからあたしも気にしてない振りをした。

時間が時間ということもあつてうちの学校の生徒は全然見当たらぬ。学校に残る生徒達はだいたい五時ぐらいまでは部活があつて、ない人はその生徒を待つてゐるのか、先に帰つてしまつのが殆どだから、中途半端な時間で学校から出て來たあたしと水無瀬が誰かに会う確率は非常に低い。

といつても警戒はするよ。もちろん。これ以上噂が増えたらとてもじやないけど耐えきれない。

はあ、と溜息をつくと、チラッと水無瀬が肩越しにあたしを見た。

「お前、ずっとあそこへいたの？」  
「え？」

さつきから一言も話してないのにいきなりそんなことを言われてあたしは目が点。  
「……すいません、もうちょっと分かりやすく言つてくれませんかね。」

「……あのー、何の話？」

「さつき。俺と富谷が話してゐる時に、お前ずっとあそこへいたの？」

「ああ……えと……た、多分？」

「多分つてどういうことだよ」

「いや、二人の会話がどこから始まつたのかは知らないからよく分かんないけど……あたしがいたのは一人が階段を上つて來てる時

だつた

「 . . . . . 」

「そもそもビリヤツてあんなことになつたのよ」

あたしが盗み聞き（いや別にあの場合は不可抗力だよねー？）を始めた時には一人とも会話の途中だつたと思つから、何がどうなつてあんなことになつたのかはよく分からない。二人は部活も違うから、いくらどっちも部活の時間が同じだからつて偶然一緒になつて話していたとは考えにくい。

となると、宮谷君が水無瀬を呼び出したのか、水無瀬が宮谷君を呼び出したのか . . . 。いや、前者だな。

「 . . . 僕は今日の部活は早めに終わらせるつもりだつたから、他の奴らがまだ部活やつてる間に、着替えてて、丁度更衣室から出て来た時に宮谷が僕を呼んだんだよ」

やつぱり . . . 。

「なんだか知らないけど怒つてる様子だつたから、お前関係だうなとは思つたけど

「 . . . なんで宮谷君が怒つてたらあたし関係なのよ」

「それ以外にあいつが僕に話しかけて来る理由はないだろ」

「 . . . . . 」

「とにかく、最初はまあ穏やかに勉強の話とかしてたんだけど、これがどこに向かってるのか察した僕が話を終わらせるために校舎に入つたんだよ。そのまま追いかけて来るから、聞きたいことは他に

あんだけ？ と聞けば黙り込んだ。そのまま俺が階段を上つて行つたら、お前のことが話題にあがつたわけ

「……じゃああたし本当に悪いタイミングであそこへいたんだね……」

「そうだな。すげえタイミングだつたな」

いや、あたしは悪いと言つたんだけど

と、そこまで思つてより重大なことを思つ出した。

「つじょつと！ 今更だけど、あんた富谷君に猫かぶりのことバレて平氣だつたわけ？」

「言つただろ。あいつだつて薄々気づいてたんだ。俺も無理にいつの前で偽物装つてたわけじゃないし、バレても別になんともないと思つてたから」

「……あの……なんであたしにはあれだけの酷い口止めをしといて、富谷君には何もなし？」

「お前と違つて口が軽くないから」

「……あんたねえ……つ」

「大体あいつも言つてただろ。言つた所で誰も信じてくれないって。あいつはあれを分かつてるけどお前は分かつてない。この違いだよ。まつ、さすがに一人で組んだんだつたらこりこり違うだらうから確かめたんだけど」

あたしの家がある通りに曲がりながら水無瀬が言つて、あたしの口角は引きつった。

どこまでバカにしゃがるんだこいつ。

「…………か、何気に畠谷君のこと結構信頼してるんだね」

「他の奴らと違つてなにかと付き合こね長いからな」

「ふうん……」

「…………が、何気に畠谷君のこと結構信頼してるんだね」  
「他の奴らと違つてなにかと付き合こね長いからな」  
「ふうん……」

あたしの家の前まで来て水無瀬が立ち止まつた。あたしは鞄の中をあさつて鍵を見つけると、それをドアに差し込む前に車がないことに気づいた。

「…………車がないってことは、一人とも帰つて来てないのかな……。

溜息をついてドアを開けると、お礼を言つたために水無瀬の方を振り返つた。

けど、あたしが何かを言つ前に水無瀬が口を開けた。

「それで、正式にお前に自分の気持ちがバレた畠谷のことばりにするんだ？」

「…………どうするつて……」

「どうするも何も、あたしには何もできないでしょ？。返事が欲しいと言われたわけじゃないし、なんていうか……ちゃんと告白されたわけじゃないし……。

俯くあたしに水無瀬が眉をあげた。

「なんだよ。フランないのか」

「…………いや、だってちゃんと告白されてないじゃん」

「でも富谷の気持ちを知つてるのでお前もあいつも分かつてないじゅ

ねえか

「ただけで、なんか、そこのあたしが返事があげるのと違つ気がする。」

水無瀬が息を吐いた。

「好きじゃないんだつたら好きじゃないってはつきりいやれよ。あいつもそつちの方がすつきりするだろ」

「……あんたは気持ちを伝えた側じゃないからそんなことが言えるのよ」

「無駄に返事を引き延ばされた方が酷じやねえのか?」

「……そんなのことは、ない……ど、ど、と思つ、ナビ」「めんどくせえなー。そんなに深く考えずに、好きだつたら好きつて言つて、好きじやなかつたらひとつとふつちやえばいいじやん」

キツと水無瀬を睨みつけた。

「あたしさじつあんたに彼女が出来るのかが時々すぐ疑問だよ」

「へえ、俺の魅力が分からないと」

「はあ? 分かりたくもないよ。大体、あたしの中では魅力という点では富谷君の方が勝つてるよ」

「はつ、じゃあどうしても選べと言われたら、俺よりも富谷の方がいいんだ」

「当たり前だよー」

「へえ……?」

呴かれたと思うと、ズイツと水無瀬が一気に間合いをつめた。あたしが驚いて家の中に後退すると、顔に怪しい笑みを貼付けたまま水無瀬が更に近づいて来る。バタンシッとドアがしまったと思うと、グッと腰に水無瀬の腕が回された。

「ちよ、ちよっとー！」

「じゅあお前は、」

チユッと音を立てて水無瀬が首もとにキスをした。そのまま唇を耳まで這わせると、低い声で囁く。

「富谷にこんなことして欲しいんだ？」

その声を聞いてあたしが身震いしたのをいいと、口元に笑みを浮かばせながら耳を甘噛みして、そのまままた首もとに下がつて行く。慌ててあたしが水無瀬の胸板を押し付けたけど、当然びくともしない。

「ち、違つてー、ちよ、みなせつ」

あたしの声を無視し、水無瀬は顎の下に口付けをすると、頬を上つてそこにキスをする。それから、腰に回していく方の手であ

たしの頬を支えると、力強く唇に自分のを押し付けた。

一瞬酔いしそうになつた自分の理性を慌ててかき集めて、身体を動かそうとしたけど、身体どころか顔さえ動かない。がつちりと固定されてしまつてゐる。

「んんっ！　んんっ！」

と必死に音をたてるけどそんなものにおかいなし。水無瀬は綺麗な睫毛を伏せたままキスを繰り返す。熱っぽく繰り返されるそのキスのせいでもんどうん力が抜けて行くのが自分でよく分かる。胸板を押し付けていた手からはいつのまにか力が抜けて、いつの間にか水無瀬の腕を弱く掴んでいる。

なんだか、傍から見ればとてもじやないけどあたしが抵抗してるように見えない気がする。

いやだからって抵抗しないわけじゃなくてっ！

と、そこまで思った所で、唇を割つてあたしの口の中に何かが入つて来る。そのままあたしの口内を漫食して、歯列をなぞると、逃げ惑つていたあたしの舌を簡単に絡めとつた。

もうその瞬間に何も考えられなくなつっていた。

ただ荒い吐息だけが耳に聞こえてきて、今のあたしには水無瀬が自分に触れていることしか認識できなくなつていた。

一瞬だけ水無瀬が唇を離すと、思考が回復するような気もしたけど、あたしを見て何を思ったのか、そのままさつきよりも強く唇を押し付けてきた。何度も何度も角度を変えて何回もあたしの舌を絡めとつて行く。

腰に回されている腕にグッと力が入り、容易く水無瀬の元へ引き

寄せられると、そのままその腕がスッとシャツの中に入り込んだ。背中に当たる水無瀬の手が布越しではないことが分かつてはいても、キスのせいで正常に考えられなくなつていた。

キスがどんどん深くなつて行き、背中に円を描いていた水無瀬の手がスッと背中をのぼつていつた瞬間にカツと目を見開いた。

そのまま殆ど吸い取られてしまつた力の最後を振り絞つてグッと

水無瀬の左腰を拂ひ去る。左た

ズザザザザ、とののすごいスピードで水無瀬と距離を取つてから、荒い呼吸を繰り返す自分を必死に落ち着かせようとした。体中が熱くなっている。水無瀬を見上げると、なぜだか少し目を見開いていた。

だがそんなことはどうでもいい。

「あんた、今何を、しようとしたのよー。」

「…何つて？」

「とぼけるなあああ！ 思いつきり人のぶ、ブラのストラップを外そうとしてたじやねえかよ！！」

「だったら？」

コ・ロ・ス。

くれた」とに感謝をする気も起きないわーーー！」

「言わなくても出て行くよ。宮谷への考え方は、今の俺のおかげ

「どうして、おまえは、おれのことを、そんなふうに思ってたんだ？」

「失せろおおおーーー！」

絶叫するあたしにニヤリと口角をあげたまま、水無瀬は玄関のドアを開けて外へ踏み出した。

あたしは「に涙を浮かべながら「の中で呪いを繰り返していく通り呪いを繰り返してから今起こうたことを思い返してみた。瞬時に体中が熱くなる。

……いや、いやいや！ 別に全然！ 全然違うし！ 嫌

「」の時、ドア越しにいた水無瀬が今の行動に自分自身が驚いていたということを、あたしは知る由もなかつた。

嫌じゃなかつたとか断じて思つてない。思つてない。（後書き）

一人称だと他人の考えてることが書けないからちょっと大変 . . .  
。

「ここまで読んでくれてありがとうございます。」

閑話 水無瀬愁也の有賀彩那への第一印象（前書き）

ああもひつ . . . すいぶん前からじつじつ書いてたのにこんなにも遅れてしまった . . . 。  
「めんなさいっ！」

## 閑話 水無瀬愁也の有賀彩那への第一印象

有賀への第一印象は『宮谷が好きな美人』だった。一見、普通に見えることは見えるのだが、誰かと並ぶことで、あいつの美しさは際立つたと思う。そこそこの方だと思う他の女子と並んでいるのを見た時に、はじめて『美人』だという印象を抱いた。

塾で何回も宮谷が話題にあげるため、クラスは違うが、何かと興味深く、俺は有賀がどういう人物なのかを観察しようと思ったのだ。観察していればするほど、有賀彩那という人物は美人である自分の容姿に関して全くの無自覚だというのが分かつた。あの容姿に兼ね備えて、強気で常識人という性格があつて陰ではそれなりに人気な方なのにも関わらず、自分がモテることを知らないのを見ると、そんなことを思う程の人数に告白はされたことがないということなのだろう。違うクラスである俺のクラスメートの間でも、入学してばかりだというのに話題にあがるぐらいの人物であつたため、それはそれで意外な印象だった。

だが、有賀に対して感じたのはこんなもので、結局『宮谷が好きな美人』から印象が変わることはなかつた。

そんなことを思うのも束の間であり、俺の有賀への印象は一学期の定期テストの結果発表を見たことで変わることとなる。

自慢ではないが、俺は昔から勉強はよくできるタイプだ。分からぬことがあれば、説明を一回聞くだけで全てを理解できる。既に自分のクラスの中では『秀才』として知られていて、ほかのクラスの奴らでも俺に勉強を教わりに来る奴らは多かつた。

そのため、一位から五十位の点数が書き記された紙が廊下に張り出された時、一位に自分の名前があつたことに対してそこまで驚くことはなかつた。

だが、一位に記された名前を見て、僅かに目を見開いた。

「あ、彩那っ！ あつたよ！」

隣から上がった嬉しそうな声に少し視線を向けると、隣のクラスの立原稔が目を輝かせながら俺の後ろに向いていた。その視線を追うと、有賀が三十位ぐらいの所を一生懸命見ていたが、立原の声にはじかれたように顔をあげると、すぐさまこちらに向かつて来る。自分の名前が一位にあるのを見て目を見開いたけれど、飛び上がって喜ばないことから上位であることに対しても驚いているようには見えない。ということは、自分の頭の良さに対してある程度自信はあつたということだろうか。何よりも当の本人よりも立原が興奮していたからなのかもしれないが。

「す、二位だよ二位！ やっぱり彩那は頭がいいんだよ！  
三十位なんかにいるわけがないと思ってたんだよね！」  
「…そういう總こそ五位なのはどういうこと？ テスト期間中  
一回も勉強してる所を見た事がないんですけど」  
「私は一回聞けばすべてのみこむ生まれつきの天才型だから」  
「…」

笑顔を浮かばせたまま立原が言うと、有賀は溜息をついて成績表を見つめた。

正直言つて、有賀と俺の点数差に対して俺は驚いていた。たくさん的人に勉強を教え込みながらも自分の勉強が簡単に出来て、なつかつ便利な脳をしているため、一位になつてもならなくとも、一つ順位が下の人とは圧倒的な点数の差をつけられると思っていた。し

かし、俺と有賀の点数差はたったの五十点だ。三位である神楽は有賀と百点も差をつけられており、四位の遠田、五位の立原も同じ様な点数差であるにも関わらず、有賀だけは俺のすぐ後ろについてきていた。

確かにこの時に興味を持ったのかもしぬないが、俺の有賀への印象は『宮谷が好きな頭のいい美人』としか変わることはなかつた。

「一位は水無瀬君かあ」

「知ってるの?」

「知ってる、つてあんた・・・。すぐ後ろにいるんだけど」

立原の言葉に有賀が驚いて振り向くと、俺は少し困った表情を浮かべながら彼女を見た。俺の姿に有賀は目を見開いてから、成績表を見て、再び俺を見た。

「あ、ごめんなさい！　まだ全員の顔を覚えてなくて・・・」

「大丈夫だよ。俺も全員知らないし」

ニッコリと微笑むと、有賀も小さく微笑み返した。

・・・この瞬間『宮谷が好きな頭のいい美人』ではなく『すこく美人』に印象が変わったということは俺の中にとどめておく。

「有賀さんでしょ？　百人以上いるのに一位なんてすごいね」「そんなこと言つたら水無瀬君はその百人以上の中の一位だからもつとすこじよ？」

「ははっ、そんなことないよ。きっとたまたまだって」

「またまたー！ ねえ、よかつたら勉強教えてよ！ 学年一位から勉強を教えてもらえるほどいい勉強方法はないから」

嬉しそうな顔で聞かれては、猫かぶつてる以上断ることは出来ず、俺は面倒くさいと思いながらも首を縦にふった。

「うん。 いつもいいよ」

「ありがとう」

これが、有賀彩那とのはじめての会話だった。

違うクラスということもあって、有賀との交流は所謂『勉強会』以外で増えることはなかった。そういう『勉強会』でも会話することは殆どなく、学年一位と二位が共に勉強をすると嗅ぎ付けて来た奴らが加わったこともあって、俺と有賀、そして気晴らしについてきた立原は、そんな奴らに勉強を叩き込んで行くだけだった。

有賀と共に勉強していく気づいた事は、教えられる全ての物事を簡単に呑み込むことができるということだ。他の奴らには何回も何回も同じことを繰り返して一つ一つ丁寧に教えて行かないといけないが、有賀の場合は問題の解き方を大体説明すると、納得した声をだして簡単に解いて行くことが出来るのだ。また、解き方さえ分かれば、応用問題を出されても、深く考え込まずにスラスラと解けるのだ。この時思つたのは、頭がいいというよりも、有賀は頭の回転が非常に早いのだろう。頭の回転が早いために大体の解き方が分か

れば全ての段階を説明しなくとも推測して解けて行けるのだ。だから応用問題も対して難易度が上がったと思う事もなく、簡単に解けるのだろう。

俺にはないその頭の回転に、確かに少し尊敬の念を抱いた。

「なあ、水無瀬と有賀つて付き合つてんの？」

初めてこれを聞かれた時は一年生の三学期に入した時だつた。そこまで交流があるわけでもない（というよりも共に勉強する以外に殆ど話したことがない）のに、そんなことを言われた時は心底驚いた。

は？と思わず素で答えようとした所を、その質問をして来た田辺滉太が眉を寄せたまま更に質問を投げつけて來た。

「なんか噂で回つてんだよ、もづいぶんと長い間秘密で付き合つてるつてきいたけど？」

「えつ、その噂の根源はどう？」

答えて寄つては素で殴り込みにいくぞ。この噂が宮谷の耳に入つたらどうしてくれるんだよ。

と思つてみると、田辺が更に困惑した表情を浮かべた。

「さあ。気づいた時にはもうじぶんと回つてた噂だつたし…。有賀に聞くのは怖いからお前に聞く」とになつたんだけど」

「 . . . . . 」

三学期にも入れば、大体の人物の性格は掴めて来る。俺は完璧に猫をかぶっているというのもあって、男女関係なく溫和で優しく、運動神経も抜群で頭もいい完璧なイケメンとして全校生徒の中で認識されている。後半の三つは本當だとして、最初の一一つは姉貴が聞いたら笑ってしまうような言い方だ。俺としてはそう認識されるために猫をかぶっているため、なんら問題はなかつた。

だが、有賀は違う。

最初は頭のいい美人と全員に認識されていた有賀も、段々とその強気で真っ直ぐな性格を現すようになつていて。三学期に入つてから三人に告白されたと聞いたが、どれも『ごめんなさい。好きじゃない』とは付き合えません』という一言でどん底に突き落とされているらしい。曲がつたことも嫌いであるらしく、一度裏庭でタバコを吸つている男子生徒を見つけては、タバコがもたらす悪影響を延々と説教したあと、聞く耳を持たない三人にバケツに入った水を盛大にぶちまけたらしい。そんな彼女に怒つた三人に一瞬たりとも怯まず、逆に大声で怒鳴り返しながら、立原が止めに入るまでずっと怒っていたと聞いた。

その話が耳に入つた時は声をあげて笑いたくなつた。第一印象はまったくもつてそんなものではないため、どんな人物も露になつて来る彼女の性格には驚いている様子だった。

「で？ どうなんだよ

黙つて考え込んでしまつた俺に、田辺が先を促すように言った。  
はつとして田辺を見て、俺は首を横に振る。

「どこからそんな噂が発展したのかは知らないけど、完全にガセね  
タだから」

「あ、マジで？」

「マジで？ つてどういうことだよ」

「いや、お前らって一緒に勉強するぐらいだからそんな仲に発展しててもおかしくないって思つてる奴らが多くてさ・・・」

田辺の言葉に今度こそはあ？ と素で返してしまった。

「一緒に勉強つて、俺と有賀さんの一人きりなんて絶対ないよ？  
必ず五人ぐらいが勉強会のために集まって来るし」

「なんだ、そんなもんか」

「うん」

つまんねえの、と言いながら田辺が去つて行き、俺は溜息をついた。噂が立つているのに対しても驚いたのは本當だ。だが、そんな噂がたつのも無理はないかも知れないと、俺は考え返してみた。

言わざもがな、俺は完璧超人美少年として成り立つてゐる。有賀の方も性格はともかく、それ以外ならば完璧なステータスを誇つてゐる。美人であり俺の次に頭が良く、運動神経もいいと聞く。そんな二人が揃つて勉強をしていれば、人というものは噂をたてたくなるものらしい。

再び溜息をついてふと教室の外を見ると、富谷がこちらを見ていた。

早速きたか、と思いながら腰をあげて、目でこちらを呼んでいる

富谷の側へ寄つた。富谷は階段の近くまで俺を寄せてから、周りを見回しながら口を開いた。

「噂で聞いたんだけど、お前と有賀が付き合つてるって本当?」

案の定有賀のことを見かれた俺は、呆れて首を横に振つた。

「付き合つてないから。完璧にガセだよ。有賀さんからも聞いたんじゃないの?」

「いや、なんかそんな噂が回つてることすら知らなかつたっぽいから聞いてないんだけど . . .」

「 . . . え、聞いてない? 僕なんて聞いてくる人はお前で二人目なんだけど」

「うえ、マジ? つてことは無意識のうちに全員が有賀に聞く事は躊躇つてるってことか?」

「そうじやない? さつき田辺に聞かれた時も有賀さんが怖いから聞けないとが言つてたし」

「そりか . . . ジゃあ、付き合つてないんだな」

「付き合つてないよ」

あからさまにほつとした表情を浮かべた富谷に思わず笑つてしまふ所だったが、寸での所で押し留まる。

「 . . . そんならなんか、悪かつたな、水無瀬」

「いや、別にいいよ」

言つと富谷は笑つてもつ一度だけ悪い、と言い残して教室へ戻つて行く。

と、そこで入れ違いのように有賀が教室から出て来た。噂をしていた本人の登場に僅かに目を見開くと、こちらに気づいた有賀が笑みを浮かせながら手を振つた。

周りの人達の視線を感じ取りながらも引きつった笑顔で手を振り返すと、あらうことか有賀がこちらに歩み寄つて来た。  
・・本当に噂のこと知らないんだな

「一学期ぶりー、水無瀬君。定期テストに向けて勉強してる?」

「一学期ぶり、有賀さん。毎日予習、復習してたらわざわざ勉強しなくてもいいような気がするから、正直あんまりしてないかな」

「あははっ。分かる分かる。あたしも全然勉強してないんだよねっ。もちろん予習、復習はかかさずやってるけど。おかげで穏にはガリ勉と命名されちゃつたわ」

少しむぐれで言つ有賀に笑いを零すと、有賀も少し笑つた。

「そういう立原さんはどうなの?」

「あの子は天才型だから勉強なんてしなくとも余裕でテストで高得点取れるのよ。頑張つて勉強して上位キープしてるあたし達に取つちゃムカつく現実よね」

「ははっ、そうだね」

と、そこまで話してからふと有賀の教室に目をやると、富谷が友人と話ながらさり気なくこちらをチラチラと見ていた。

「…付き合っていないと言つてる側から……」これはちょっとヤバい。

誤解されないように俺は素早く有賀から離れたことにした。

「とにかく俺はそろそろ戻らないといけないから、有賀さんも戻つたほうがいいよ」

「え、あ、そうだね。引き止めてごめん、またね」

笑いながら手を振つて去つて行く有賀に俺も小さく手を振り返す。そのまま有賀が教室に入ると、俺は溜息をついた。

この日以降、どうして有賀の耳に噂が入らなかつたのかはまつたくの謎のままに終わつた。

考へ事あらゆる題をくれなーのが学校生活とこりも。 ( 記書き )

ああもつ煮るなり焼くなり蹴るなり殴るなり好きなよひにして  
ださー！

「考え方かいする題をくれなーのが学校生活とこつも。」

「で？ 彩那は参加するの？」

稔の声にあたしははつと我に返った。田の前で稔が首を傾げながらこちらを見ていて、何やら質問を投げかけて来たようだつた。  
「…正直全然聞いてなかつた。

「え、あ、何の話？」

「私の田をはつきつと見つめながら会話してたのに『何の話？』はねえだらーよおこ」「じめんつて！ ちゅつと考え方しててー！」

すつと稔が田を細めた。

「へえ…。考え方ねえ…。一週間も私の言つ言葉が耳に入らないぐらこのふか―――――――に考え方だつたらぜひとも聞きたいわね。言つてじりん？」

「いや、だから…。じめんつて…。

「答えになつてない。言こなよ」

「言わないよつ」

「言えよ」

「言わないよー。」

ムキになつて返すあたしに稔が訝しげな表情を浮かべたけど、それ以上深く追求してもあたしが何も吐かない事を推測したのか、諦めたように溜息をついた。

悪いね、稔。これの理由だけは本当に言えない。

考え方というのは言ひまでもなく水無瀬と富谷君のことである。実はこの一週間、殆どどちらとも口を聞いていない。富谷君はともかく、水無瀬があたしに話しかけてこないことはさすがに想定外だつたかも。いや、水無瀬のことだからこの前の事件（あたしと水無瀬が付き合つてるだのどーのこーのの事件ね）があつたとしても、『知つたこっちゃねえよ』といつ感じであたしを怒らせるためにわざと話しかけてきたりすると思つてたから。なんていうか、拍子抜け？ つていつても決して残念だと思ってるわけじゃないんだけど。どつちにしろ、あの噂について追求して来る人がなぜか全然いかつたこともあって、ここ一週間あたしは（外見的には）平和に過ごしている。

「で？ 何の話をしたの？」

聞くと稔がこちらを睨み上げた。

「本当になんにも聞いてなかつたんだね」  
「だから謝つたじやん！」

といつてもやっぱり稔は不機嫌そうに眉を寄せた。

「あのね、もうすぐ藤祭こじまつじゆでしょ？」

稔の言葉にあたしは、ああ、と思わず声を漏らした。そういうな  
そんな時期になっていたな。

藤祭とは、他の学校で行われるいわゆる『文化祭』とこうやつだ。  
なぜあたし達の学校も文化祭という名ではないのかは疑問だけど、  
どうやら文化祭だけじゃあたし達の個性が出てないから、藤ヶ丘の  
『藤』をとつて『藤祭』としたらいい。『祭り』っていう命名のせ  
いで、どつかの神社で行われる祭りなんじゃないかと思い込んでし  
まう人も少なくない。

それでもここへんじゃ何かと評判で、去年もものすごい数の人  
達が来てくれていた。

そんな藤祭の時期があるために、今やどのクラスも出し物やら何  
やらを決めているのだ。この出し物を決めるのがなかなか大変で、  
クラスの全員が一致するような出し物は存在しないから、ものすご  
くもめ事となってしまうことも多々ある。あたし達のクラスも去年  
はお化け屋敷にするのか喫茶店にするのかものすごく抗議したもん  
なあ。

結局はお化け屋敷になつて、一応『現実味』が一番あつた出し物  
だつて絶賛されたから結果オーライだったけど。

あたしが、そんな時期だねえ、と呟くと稔がうん、と頷いた。

「そんで、うちの出し物なんだけどね？」  
「おおつ、決まってるの？」

「うん。本当に私の言う事何も聞いてないんだね」「……いや、あの、本当にすみませんでした」

「極上の笑顔を浮かべて言わると本当に申し訳なく思いながらものすごく怖いです。」

「昨日クラスで話し合つてたんだけど、当然彩那は聞いてなかつたからまた一から説明するよ?」

「はい……あの、お願いします」

「私達のクラスは演劇部の子が多いってこともあって、演劇に決まりましたー」

「……演劇?」

「うん。やだ?』

「全然そんな滅相もございません。ただ、去年のやり方とか出し物とかを考えると新鮮だなあ、って思つただけですはい」

普段は逆の立場なのになんだろ?」この威圧感。

「私もそう思つたんだけど、新鮮なのもいいんじゃないかと思つて」「まあね。誰もあんまりやつたことがないから、毎年来る人も楽しみにするかもしれないね」

「でしょ? で、その演劇に彩那は参加する? って聞いてたわけ

「あつ、それで冒頭に戻るわけか……いや、それは申し訳なかつた。」

それにしても、演劇ねえ . . . 別に演技するのは嫌いじゃないけど、なんつっても経験があるわけじゃないし、演劇部が多いんだからやっぱりその子達に任せた方がいいのかな . . . 。

考え込むあたしに、その反応が想定内だったかのように稔が話だした。

「実はね、今年から評価の制度が変わったんだよ」

「え？ 出し物への？」

うん、と稔が頷いた。

「全ての出し物に寄つて、評価される場所が違つんだって。うちは演劇をやるって言つたらメインで評価される点は二つあるって言われて . . . 」

「へえ . . . 。で、その二つの評価を合わせて総合評価が高ければ高い程優勝、ってこと？」

「うん、そんな感じ」

それは面白そうだ。去年の藤祭はただの売り上げで評価されていたから、あまりお客様が来ない、場所的に不利な所で出し物をしていた、本当に面白い出し物だつたりとか、おいしい食べ物を出していた喫茶店とかはそれほど評価されていなかつた。あたし達のクラスもあくまで『現実味がある』って絶賛されただけで、そんなにすごかつたのに優勝候補にすら入つてなかつたからね。

新しい制度が入つたからには、結構平等に評価されるようになる

つてことかな。

「面白そうだね。どんな感じで評価されるの?」  
「おっ、よくぞ聞いてくれた!」

ビシッと稔が人差し指を立てた。

「一つ田ー。その演劇のテーマをどれだけ観客に見せる」とが出来  
るのか、どれだけ気持ちを伝えることができるのかを評価する『表  
現力』!」

「まうほう

「一つ田ー。演劇の中にキャラクターにどれだけ役者を合わせるこ  
とができるのか、どれだけその役者がその役柄に合っているのか、  
台詞の言い回しは確実か、などを評価する『構成力』!」

「へえー」

「そしてこの一番最後が一番重要なのー」

指を三本立ててから稔はキッとあたしを見た。

「いい? 彩那。この最後の評価は一番彩那に頑張つてもうおうと  
思つてゐるから」

「はい?」

「この最後の評価はどの出し物も評価される、ズバリ『ビジュアル』  
!」

休み時間の教室の中で響き渡った穂に声に、あたしは眉をあげた。

「……それって差別じゃない？」

「差別じゃないよ！現実よ！どれだけ内容がよくても、見た目がよくなきゃ誰も見ないじゃない！」

「……そりやそうだけど……」

さすがに外見にこだわるって酷くないか？お化け屋敷とかどうやって評価されるのよ。どれだけ外見が怖いか？それともどれだけお化けをやつてる人が綺麗か？

ビジュアルがどうして全出し物共通の評価なんだろ？……。

「それのどこにあたしが入るわけ？」

「彩那には、絶対に何回もステージに出る人の役を演じてほしいのよー。出来れば主役とかねつ」

「……なんですよ」

「彩那が美人だから」

「……音譜つけたよ」とつ。

「その台詞を否定すると同時に、ちつとも演技をしたことがないあたしを主役つてどういうことよ。普通に考えて演劇部の子でしょ」「だめなんだつて！ビジュアルを考えると彩那しかいないんだよ！」

「あのねえー。可愛い人なんて他にたくさんいるでしょーよ?」「

「でも綺麗の部類に入るのは彩那だけなんだって!」

「稔だつて充分綺麗でしょ? 自分で主役かつて出ればいいんじゃ  
ない? 稔だからみんな許してくれるよ」

「私は監督だからダメ」

「…………なんですか?」

「…………監督? あんたが?」

「何よその言い方」

「いや、だつて…………」

宇宙一の面倒くさがりやの立原稔が監督をするつて…………う  
しょひ。明日は地球最大の台風でもくるんだろうか。

「まさか、立候補したの?」

「そりだけど?」

変更。明日は地球が滅びるかもしれない。

「…………大丈夫? 熱とかない?」

「…………いつも疑問なんだけど、彩那の中の私つてどい今まで面倒く  
さがりやなの?」

「少なくとも、ジュースを買いに行くのが面倒くさいから、冷蔵庫

の中の飲み物を飲み干してわざわざお肉をここで買つて行かせるぐら  
いには……」

「やつちの方が遙かに面倒くせこし……」

「つも。冗談。でもそれぐらいこの例が出ぬへりこには面倒くさがり  
やのイメージがある」

「……酷すぎる。それが親友に対する態度?」

「いや、だつて稔が普段からそつと思わせるよつた感じなんだもん」

「もん、とか可愛く言つな」

はあ、と溜息をつきながら稔は机の中から一枚の紙切れを取り出  
した。

身を乗り出して覗き込むと、あたし達のクラスの何人かの名前が  
書いてあつた。

「何それ?」

聞くと、稔はシャーペンを取り出してリストの一一番下に『有賀彩  
那』と二つ名前を付け足した。  
……つておい。

「ちよつとちよつと稔さん。何やつてんですか?」  
「見ての通り、あんたを主役候補にしてるのよ」  
「やめてよちよつとほんとに」  
「抗議は一切受け付けませーん。監督である私が決めた以上、彩那  
には素直に従つてもらひからねつ」

呆れて何も言えないあたしの表情を見て稔は笑い声をあげた。つてあれ。ちょっと待つて。

「ちよ、ちよっと稔！」

席を立った稔に慌てて声をかけると、何？ と言しながら振り向いた。

「ビジュアルってことは、・・・水無瀬、君も参加するの？」

あたしが聞くと、稔が驚いて何回か瞬きを繰り返した。  
それから、

「何言つてんの？ 当然でしょ」

ですよね。

学校一のイケメンとまで言われる水無瀬が、ビジュアル評価のために出ないんだつたら何に出るんだ、って話だもんなー。

「やつぱりね、そこまでイケメンとなると水無瀬君も中心人物の一人にしてあげたいのよねー。出来れば彩那とセットで」

「やめい」

「という抗議は受け付けないと誓ったはず。んー、どうじょうかな

あ

「……つていうか、何の演劇するのかは決まつてんの？」

「決まつてないよ」

「うわー。即答したよこの子。

「決まつてないのに配役してどうすんのよー。つていうかむしろ配役じゃなくね？」

「何言つてんの！ 誰が何の役をするのかを決めてから、その人達に一番合つキャラがいる演劇を選ぶのが常識！」

「違つでしょ！」

とあたしと稔が言い争つてると、ガラリ、ドアが開いた音がした。条件反射であたしも稔もそちらに視線を向けると、水無瀬が誰かに何かを言ってから教室の中に入つて來た。

瞬時に睨みつけるあたしとは正反対に、稔はおおつーと声をあげてから水無瀬の所に駆け寄つた。

「水無瀬君、良い所に！」

「どうしたの？ 立原さん」

世の女子全員を虜に出来る様な笑顔を浮かべた水無瀬に対して、その場で溶けなかつたのはきっとあたしと稔の二人だけだ。それも笑顔を向けられた張本人なのに頬も赤らめないって……。稔、

とここん水無瀬には異性に対しての興味はないんだな。ざつちかといえば、新しく入った商品が超人気だったことをすごく嬉しがつてる店主のようだ。

「あのさ、私達のクラスは演劇やるって言つたじゃん？」

「そうだね」

「んで、その演劇で評価される分野が三つあるって言つたでしょ？」

「うん。表現力、構成力、ビジュアル、だっけ？」

「そうそうー。誰かさんと違つてよく聞いてるねー。」

おい。

「それがどうかしたの？」

「水無瀬君には、ビジュアル評価のためにぜひとも中心人物の役をやつてほしいのよー！」

稔の言葉に水無瀬はキヨトンとした。そりやそうだ。

それでもその言葉を呑み込むと、水無瀬は苦笑を浮かべた。

「それって差別じゃない？」

「彩那と同じ」と言わないでよー。これは現実よつ、現実

あたしの名前を出すと、水無瀬が僅かに目を開いてからあたしに視線を移した。頬杖をつきながら一人を見ていたあたしはそんな水

無瀬と田が合つて、思い切り睨みつけてやつた。少しだけ水無瀬の目が細められた。

「有賀さんもビジュアルで参加するの？」

「そうよ。美人だからねつ」

「確かにそうだけど、立原さんも充分綺麗なんだから何かの役できるんじゃない？」

「口の上手い男だね！」

笑いながらバシバシ水無瀬を叩く稔。．．．ビリのおばさんだあんたは。

「でも私は監督だからダメ。さすがに役も監督も同時にやるつていのうのは素人の私にはきっと無理だし」

「そう？ まあ、立原さんがそう言つんだつたら無理強いはしないけど．．．」

「つてことで、やつてくれる？」

「まあ、俺でよければなんでもいいよ」

「よつしゃ！ サンキュー水無瀬君」

張り切つて来た！ とか叫びながら教室を飛び出して行く稔にあたしは溜息をついた。変な所で火がつくんだよなあ、あの子。普段は何事も興味なさそうに振る舞つてゐるつていうの。

稔の後ろ姿を苦笑を浮かべてから見送ると、水無瀬はあたしの斜め前にある自分の席に腰を降ろした。あたしが一瞬だけ視線をやると、水無瀬がこちらを見ていて驚いて目を見開いてしまつた。水無

瀬はそれを見ても得に何も言わずに前を向くと、それ以降あたしの方を見ることはなかつた。

稔が役者を全員決め終えたのは放課後になつてからだつた。相変わらず稔を待ちながら教室で勉強をしていたら、決まつたあああああとか叫びながら稔が教室に転がり込んで来た。

ビクつと肩を揺らしたあたしをおかまいなしに稔は机に紙を置くと、シャーペンで何かを書き込みながらベラベラと話し始める。

「役者は全員で二十人！ エキストラとかはクラスのみんなにやつてもらうとして、中心人物が少なくとも四人はいるような演劇を選ぼうかなー。そして三角関係つ。巻き込まれるのは死んでも嫌だけど、見るのは楽しいから絶対に入れたいわねー」

「それは誰かを指しての言葉？」

「だけどなあ、四人となると男二人女二人つてどこか。 . . . チツ、富谷も美里も違うクラスだから無理か . . . 」

「つておい！」

何を企んでたのこいつ！ 誰だよ稔の監督立候補に賛成した人は！

「つていうか疑問なんだけど！ どうして稔が配役決めなわけ？ 他の役員はどうしたのよ、他の役員はー！」

「いることはいるけど、やる演劇を決めるのは私だから、自然と配役係も私になつたのよ」

「あり得ない . . . 」

「まあ、これも私の親友という立場になつたことで受け止めてよ？」

ね」

稔の言葉にあたしが彼女を睨みつけると、稔は笑い転げてから帰る一ゼーと言つて鞄を手に取つた。

そのまま学校を出て駅で別れようとすると、ふと稔があたしを見た。

「……あのや、彩那に聞きたいんだけど」

「？ 何？」

「……あんたと水無瀬君の間に何があるのかは、いつか話してくれる？」

「えつ……」

唐突な質問に何も言えずに驚くと、稔が少しだけ目を伏せた。

「私達つて親友だけじさ、周りの人達が称する『親友』とはまた少し違うでしょ？ 相手を深く追求しないから私も彩那も歩み寄つたつてだけで、実際私達つてお互いのことは殆ど知らないじゃん」

「……うん」

稔の言つ通りだつた。

あたしと稔は、ものすごく気が合うから親友になつたわけではない。究極の面倒くさがりやである稔は、人と深く関わることを嫌う。いや、嫌いというよりも苦手なだけなのだと思う。その分稔自身も人のことを深く追求しようとはしない。あたしも、稔ほどではない

けれど、いろんな人に自分のことを話すのはあまり好きじゃない。別に知られることで何か悪い事を言われるとか、知られたら恥ずかしいとか、そういうことではなくて . . . ただ、『友人だから』という理由で、何もかもを話さなければいけないとは、思わないだけだ。まあ、稔と違つて親しい友人とはそれなりに話はするし、宮谷君とも親の話をしたのは、彼とは長い付き合いだからだ。稔はどんなに長い付き合いの人間でも自分の悩みを打ち明けたり、自分の内面をぶつけたりすることは、絶対と言つていいくほどにはない。あたしはそれを知つてて、稔はあたしのことを知つてて、それであたし達はこうやって一緒にいる。

お互いがお互いのことを探求せずに、気楽でいられる相手だったからこそ、あたしと稔の友情はこうやって続いている。

「話したくないのならいいんだ。ただ、いくら私でも、ここまで来ちゃうと気になるつていうか . . . 。ねつ」

「 . . . だね」

「そんな暗い顔すんなつて！ 私も無理に聞きたいとか思つてるわけじゃないから！ 答えづらい質問しちやつてごめんね。んじや、私は明日までに劇とみんなの役を決めとくわつ。氣をつけて帰つてねつ」

「ん。稔もね」

おー、と言いながら手を振つて稔は駅に入つていった。

あたしはそのまま小さく溜息をつくと、青に変わつた信号を見て、道路を渡つた。

翌日の朝のホームルーム。

稔はそれはもう嬉しそうな表情で教卓に上がり、チョークを持つて黒板に何かを書いて行つた。書き終えてチョークを元の場所に戻すと、満面の笑みで稔は真っ直ぐとあたしに視線を向ける。嫌な予感しかしない。

「とゆーことで、私達のやる劇は『真夏の夜の夢』に決まりました！ 主要人物の四人は決まったので、発表しちゃいます」

そのまま黒板に役柄を書いて行く稔。

「主人公のハーミア役は有賀彩那さん、ハーミアの恋人、ライザンダー役は水無瀬愁也君、ハーミアの婚約者、ディミートリアス役は村上宗吾君、そして、ハーミアの友人でディミートリアスに想いを寄せているヘレナ役を、神楽絵実さんにやつてもらひましたー！」

稔の発表に先生を含めたクラス全体が固まる。

今のうちにここにつと絶交してやるうつかな。



考え事ありある題をくれないのが学校生活というもの。（後書き）

といつことでベッタベタな展開すみませんでした！  
遅れてしまつて本当に認めんなさい…

いや、なんだか『よし…書こう!』とか思つて一部書いても  
そのままズルズルと引きずつて時間が経過…して…行って…  
…。

いや、もうほんとうにひとつ申し訳ない。ほんとうにひとつ…

来週は年末テスト近くめなので再来週までは更新はありません！  
本当に次回はちゃんと時間通りにアップします！ すみませんで  
した！

こんな作者でも読んでくださる皆様には最大の感謝を！

ここまで読んでくれてありがとうございます！

あたしだってムカつく時は本気でムカつくんだから。（前書き）

お久しぶりです。予定よりも遅れてしまつて申し訳ない。ちゃん  
と書いてあつたんですけど思つたより忙しかつた。rzn

水無瀬と村瀬つてなんかかぶるから村瀬を村上に変えさせていた  
だきましたw  
計画力がなくてごめんなさい。。。 短い上にあんまし話は進ん  
でないです。

あたしだってムカつく時は本氣でムカつくんだから。

決めた。あたしはもうこの先稔とは口を聞かなければいいことにした。もしかしたらそっちの方が人生楽になるんじゃない！？ やつべ。超名案じゃん、あたし。

「じゃあ稔ちゃん？ ちょっといろいろ説明してもらおうか？」

そんなことを言いながらにっこり笑ってるあたしは現在屋上で稔と対面中。

つい十分前、ホームルームが終わった瞬間に固まる教室中の先生生徒をほつといて、稔は二コニコ笑いながら席についた。隣であたしはそんな稔を殺す勢いで見ていたけど、あたしなんて存在してないよう無視しやがって。

ついでに斜め前の水無瀬があたしを見てふつと笑ったのは見逃してないからな！

稔はあたしの顔を見て引きつった笑みを浮かべている。だけど瞬時にあたしが笑みを顔から消すと、稔はすぐに視線を泳がせた。

「セットにしたいとは言つてたけどさ、なんで恋人役？ なんでよりによつて、恋人役？」

「え、いや、だつてほら、面白いじゃん？」

今こゝでこゝつを殺しやるつか。

あたしの恐ろしい形相を見た稔が慌てて取り繕うとする。

「だ、だつて！ ビジュアル評価重視だから、必然的に主要人物の二人は美男美女がいいでしょ！？」

「ふざけんじやないよ！ 今どういう噂が回ってるのか知ってる上で、どうしてああいう配役になるのよ！？」

「仕方ないでしょ！！ 他にいい役が見つかなかつたんだもん！」

「もんつていうな！ 役なんて普通にいっぱいあるでしょーが！ だいたいハーミアとライザンダーのキャラがどうやつたらあたしと水無瀬君に合つてるつていつのよ！ 構成力はどうした、構成力は

！－

「そんなもんは捨てた！」

「捨てるな－！」

三つの部類で評価されて、その総合点で優勝するとかほざいてながらも結局ビジュアル重視どころかそれだけしか気にしてねえじゃねえか！

相も変わらずあたしが睨み続けると、開き直ったかのように稔が話だした。

「とにかく、監督には逆らえないって言つたはずだから、彩那に拒否権はない！」

「どうしてそうなんのよ！　あんた本当にあたしの親友！？」

「練習は放課後から始まるから絶対に来なさいよ！　来なかつたら外してくれるかなとか思つても無駄だからね！　外さないからね！」

「…………」

あたしの発言を無視した上に釘を刺された。行かなかつたら役を違う人に回すかなとか密かに思つてたのに。本当に余計な親友の分かち合いだよ。

そそくさと屋上を後にして行く稔を怒鳴りつける気力も失せて、あたしは仕方がないから放課後までは鬱憤晴らしは自重することにした。

そしてその日の放課後、午後三時半。中心人物の四名以外は決まつていないとこもあって、教室の中は嫌にガランとしていた。まあ、教室の外に群がっている人達を除いたらだけど。

殆どうちの学年全員が集まってるんだけど。そんなにあたしと水無瀬が恋人を演じる所を見たいのか。そうか。

…………くつそ稔！！　絶対にいつか後悔させてやるーー！

ムカムカムカという効果音をたてているあたしを無視して、稔はあたし達四人を椅子に座らせながら説明をしていた。

「最初のシーンが宮殿のシーンで、ハーミアのお父さんがハーミア、

ライザンダー、ディミートリアスを連れて殿下の前に来るから、そ

こからねー

「はーい」

つていう返事をしたのは村上だけで、他三人は眉をあげて台本を見ていた。

．．．なんつだこれ。いや、シェイクスピアの時代だし、翻訳されてるんだから仕方がないっちゃ仕方がないんだけど．．．なんでこんなに台詞が、こう、クサイの？ あたしこんなやり取りを水無瀬としないといけないわけ？

ああ、だめだ。朝の怒りがまたこみ上げて来た。

「ヘレナはまだ出番ないから、神楽さんは横で見てていいよ

「分かった」

「彩那と水無瀬君は村上と一緒にここに配置ね。お父さん役とシーシウスはまだ決まってないから私が台詞言つけど。．．．つてちょっと。その一人。聞いてる？」

穏から声をかけられてあたしと水無瀬が同時に顔をあげる。それからあたし達の顔に書いてあるものを読み取ったのか、一瞬だけ表情に恐怖が走った。だけどそこはやはり腐つても立原穏。一切触れずにあたしと水無瀬をさつさと位置につける。

因みに『真夏の夜の夢』あるいは『夏の夜の夢』はシェイクスピアが1590年代に書いた喜劇だ。なんだか、『夏の夜の夢』の方が一般的に使われているらしく、『真夏の夜の夢』は直訳で、どち

らかといつと古くから親しまれている名前なんとか。

全五幕からなり、だいたいの劇の舞台はアテネ近郊の森で行われる。主要人物は男女四人、ハーミア、ライザンダー、ディミートリアス、ヘレナであり、全員が貴族だ。んでまあ、この四人が見事な四角関係を成り立たせているわけ。ハーミアとライザンダーは恋人なんだけど、ハーミアにはお父さんのイージアスが決めた婚約者のディミートリアスがいて、ディミートリアスはハーミアのことが好きで横から彼女を奪い取ったライザンダーのことは毛嫌いしてるので、ハーミアもライザンダーも『はっ！ お前となんか結婚しないよ！』って感じで（いや、多分違うんだろうけど）、ハーミアの友達であるヘレナはそんなディミートリアスに切ない片想いをしていて、三人の関係を余計に複雑にしているわけなんだけど。

．．．簡単にいうと、ハーミアとライザンダーが恋人で、ディミートリアスはハーミアが好きで、ヘレナはディミートリアスが好きってわけだ。

まだまだ序盤だからこの四人とかイージアスとかイージアスが話してる公爵やら女王しかいないんだけど、他に妖精とか職人さんとかもたくさんいる。まつ、あたし達がやつてるのは本当に最初の方だからまだ妖精とかのことは考えなくていいと思うんだけど。

あたし達が台本を手に取ると、稔がうん、と頷いた。

「まだ最初だから台詞に集中するだけで、細かい演出とかは後で決めるからねー」

「うん．．．」

「分かつた」

「そこの女。テンショーンあげて」

「誰のせいでこんなテンショーンだと思つてやがる」

「んじゃあイージアスがハーミアを連れて来る所からねー」

「．．．．．」

「村上も彩那の隣で待機して」

「ああ」

いつそ清々しいほどに無視したなこいつ。

村上があたしの隣に立つのを確認してから、穂は台本に視線を落とした。

「んーと、イージアスが『まつたく、困り果ててあります．．．  
ながつ！ ちょ、この台詞長いから省略するわ』

「うおい」

「どうひじきにのあとにシーシュスが『ハーミア、考え直すこと  
はできないのか？』なんちゅらかんちゅらつてなつて．．．えーと  
．．」

穂が眉を寄せながら台本に書いてある台詞を田で追つて行く。

因みにシーシュスというのはハーミア達が暮らしているアテネの  
公爵の一人。どつかの女王であるヒポリタ姫と結婚をする話をして  
ると、イージアスがヘレナ以外の三人を引き連れて来て、ハーミア  
がディミートリアスと結婚しないんであればハーミアを殺すしかな  
いとかなんとか言う。アテネの中で法律なんだとか。  
なんちゅー法律だよ。

「まいつか。全部行くよー。んーと『ハーミア』、考え直すことはないのか？父親といつもの子にとっては神も同然なのだ。そのために子をどのようにするのかは父親の思いのままではないか。ディミートリアスも立派な若者だろ？』はいハーミア」

「……『ライザンダー様も立派なお方でござります』……

「声が小さ……」

「『ライザンダー様も立派なお方でござります』……」

「よひしご。シーシウスがディミートリアスは父親に好かれてるんだからはよ結婚しろ、的なことを言つて」

「いや言つてないよ

「はい、ハーミア……」

「はあ……。『父は私のことを理解なねりつとはしないのです』『シーシウスが『いや、お前だつて父親を理解していないのではないか？』と言つて』

「『』無礼をお許しください。何がこのよつて私を強くしてゐるかが、あ、強くしてゐるのか分かりません。殿下の御前でこのよつて自分が、自分の思いをさらけだすことはあまりにもはした……ん？あ、はしたないか。あまりにもはしたないことかも知れません。でも私は止める事ができないのです、この思ひを。もし父の決めた結婚を拒んだ時は、あ、時には、この私にどのような重い罰が与えられるのでしょうか』

「噛み噛みだね……」

「うるさいよ！だいたい台詞が全部長い！」

「当たり前でしょ！シェイクスピアなんだから！だいたいあんたの台詞には感情が全然乗つてない！」

「細かい演出はいってさつと言つてたじやん……」

「感情くらいは乗せろよー！」

「キイーーー！」といつ感じでお互い睨み合っていると、水無瀬と村上が慌てて仲裁に入った。神楽さんも座っていた椅子から立ち上がり足早に近づいて来た。

「まあまあ！ 立原も有賀もちょっと落ち着けって。立原もさ、これはみんなで台詞を読み合ってからどんな感じなのかを掴んだ方がいいんじゃないの？」

「感じ？」

「そつ。だつて結構古い時代の劇だろ？ 観客にももっと親近感湧かせる様にや、台詞ももつちよつと馴染みやすくしたりできるんじやないのか？」

「そりゃあ、多分平氣だと思つけど・・・」

村上の提案に稔が眉を寄せる。因みにあたしはその案には超賛成。

困った表情を浮かべた稔に水無瀬が笑いかけた。

「そんなに力まなくても平氣だよ、立原さん。俺達にはまだまだ時間あるし、台本があれば家で練習も出来るし、ね？」

「・・・うん」

小さく稔が頷くと水無瀬も村上笑つた。隣にいた神楽さんも少し微笑を零してから、口を開いた。

「稔ちゃん、いじはせ、みんなで座つて台詞をいろいろいじつてこようよ？ 一人の言つ通り私達にはまだまだ時間があるしねつ」

「 . . . . . 」

なんとなか不満そうに見えたけど、あたしもその案に素早く賛成するとい、穏も渋々頷いた。

結局その日の練習は台詞をいじるだけで終わり、外であたしと水無瀬が恋人を演じるのを見たがっていた方々には申し訳ないことをした。

ざまあみろ！ 面白がつて見るからだバカ共！！  
．．．なんかテンションがおかしいな。今日はいろいろあつたせいで。

あたしは、演技をするためにどけた椅子とか机とかを元に戻しながら、ゾロゾロと帰つて行く野次馬を見て溜息をついた。

どうすっかなあ．．．猛烈な勢いでこのことが学校中を回るような気がするのはあたしだけか？ だつてさ、だつてさ！ なんかよく分からぬ噂が出回つてた時だつて真つ先に久我先輩に問いつめられたよね！？ その噂が消えて間もない時にこんな劇をやるんだつたら普通に回るよね！？

もう一度溜息をついて椅子をしまつと、隣で気配を感じてふと顔をあげた。

水無瀬が飄々とした様子で机を押していた。

．．．こんなにあたしが悶々と考え込んでるのになんだその『え

? 何? 何か問題でもあつたかー?』みたいな様子。ああもう尋常じゃないくらいにムカつく。

睨みつけてから椅子から離れようとすると、有賀、と小さく言つ声が聞こえた。少し目を見開いて首を動かすと水無瀬が机に腕を置いてそのまま真っ直ぐとこっちを見ていた。

・・・・・くつそ。しばらく直視してなかつたから気にしてなかつたけど、久しぶりに顔を見るとくつそかっこいいなこいつ。

「何?」

みんながこっちを見てないのをせり気なく確認してから返すと、それを見た水無瀬がふつと笑つた。

「何?」

さつきよりも強く言つと、水無瀬が少しだけ首を傾げた。  
・・・こいつ、何をすれば余計にかつこよく見えるのかを熟知してやがる。

「お前さ、いつまで俺のことを無視するつもり?」  
「別にしてないでしょ。話してないだけだよ」  
「なんで?」  
「・・・・・」

いい加減にしねえと本気で泣くぞ。

ピクッとあたしの眉が跳ね上がったのを見て水無瀬の顔に張り付いていた笑みがますます大きくなる。

もうなんのこいつ。

「もつそつこいつのやめてよ。本気でムカつく」

「…………」

言い放つてからさつさと背を向けると、あたしは黒板を綺麗にしていた稔の傍に歩み寄った。

稔はあたしを見てから後ろにいる水無瀬にも視線を投げたけど、今回はさすがに何かを察したのか何も言わずに黒板消しをあたしの手の中に入れた。

無言で黒板を消し始めてから、あたしはさり気なく後ろに視線を向けると、机に手を置いたまま水無瀬がこちらに背を向けて動かない様子で立っていた。

…………いつまでも同じ反応を返すと思つなよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3914r/>

---

猫かぶりなあの男とキスをする。

2011年11月30日12時46分発行